

学長賞

「紡がれし者たち」 こやこや

附属図書館長賞

「妄執…いつも、どこまで」 井上たにし

「Lへの憧憬」 植山和哉

「まことの海」 中村優吾

第15回熊本大学

東光原文学賞作品集

2023年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十五回熊本大学東光原文学賞作品集

第十五回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 田中朋弘 / 4

第十五回東光原文学賞作品集の公刊によせて

学長賞

紡がれし者たち

こやこや / 7

(文学部歴史学科四年)

附属図書館長賞

妄執..いつも、どこまで

いのうえたにし / 35

(文学部文学科四年)

附属図書館長賞

Lへの憧憬

植山 和哉 / 81

(医学部保健学科三年)

附属図書館長賞

まことの海

中村 優吾 / 118

(文学部総合人間学科三年)

選考を終えて

坂元 昌樹 「東光原文学賞総評」 / 170

畑 亜弥子 「講評…創作する力」 / 175

農 孝生 「講評」 / 179

田尻 久子 「講評」 / 182

第十五回東光原文学賞作品集の公刊によせて

附属図書館長 田 中 朋 弘

東光原文学賞は、熊大生の言語力向上と創造性豊かな学生の育成、さらに地域社会における文学・文化活動の中核となる人材輩出等を目的に、平成二十年度にスタートした熊本大学独自の文学賞で、今年で十五回目の開催となります。今回から、従来の大賞を学長賞に、そして優秀賞を附属図書館長賞に変更し、副賞として、これまでの図書カードに加え、トロフィーと盾を贈呈することになりました。このように東光原文学賞は、全学的なイベントにグレードアップされることになりました。そこで今回は募集にあわせて特設ウェブサイトを設置して、この文学賞への応募を在学生に広くアピールいたしました。その結果、今回も文系理系を問わず、合計十七篇の応募がございました。応募者の内訳は、文学部七篇、教育学部一篇、法学部三篇、医学部一篇、薬学部二篇、工学部一篇、大学院社会文化科学教育部一篇、医学教育部一篇となっております。まずはさまざまな学部や大学院からご応募くださった方々全員に、厚くお礼申し上げます。

それらの応募作品から、九篇を第一次審査で選出してくださいました第一次選考委員の方々、さらに九篇のうちから四篇を学長賞、附属図書館長賞の候補として選出してくださいました第二次選考委員の方々々に厚くお礼申し上げます。また、東光原文学賞募集要項の作成、ニューズレターの印刷

配布、特設ウェブサイトの設置に至るまで周到な準備をしてくださった図書館課の皆様および関係各位にも、附属図書館長として厚く御礼申し上げます。

さて、第二次選考委員会は、昨年二月九日に開催され、本学教授の畑亜弥子委員、熊本日日新聞社の農孝生委員、橙書店店主・『アルテリ』編集長の田尻久子委員という四名の審査委員によって、それぞれの観点から講評が述べられたのち、委員の間で意見交換が行われ、審査は厳正に進められました。

少しかだけ第二次審査の雰囲気をお伝えしたいと思います。審査委員の先生方には、短い時間に多くの作品を審査していただくというご負担をお願いしており、大変申し訳ないと毎年思います。まずはその点について御礼申し上げます。委員の先生方が、それぞれの作品について、ご自身がどのようにその作品を受け取ったかということや、その作品のよいところ、あるいは検討の余地が残るところなどについて、少し遠慮がちに、しかし同時にはっきりとお話くださることに感銘を受けました。また、多少なりとも違いのある個別の評価を持ち寄って、そこから一定の集合的な評価に到達する過程を見せていただけたのは、とてもエキサイティングな経験でもありました。作品それぞれの詳細については、選考委員の先生方の講評にお任せするとして、一読者としての感想を述べさせていただきます。わたしたちは日常的にも、言葉や態度を用いて世界を共有しているわけですが、日常言語は、語ると同時に消えていくという性格を持ちます。それは語りかけている相手にとってもそうですし、語っている自分にとってもそうですと言えます。作品を創作して公表するということは、そうしたどこかはかないものを、もう少し確かな形にして、他の多くの人と共有するという体験だと理解することができます。

大学での勉強や研究とは別に、創作活動を行うことは、特別なエネルギーを必要とすることだと思います。しかし大学で学ぶべきことは、狭い意味での専門的な知識や技能だけではなく、創作活動なども含めた広い意味での自発的な人間形成ではないかと思えます。ある意味ではそれには、誰かに自分を育ててもらおうという姿勢から、自分で自分を育てたり、育てなおしたりするという態度への移行が含まれているように思えます。東光原文学賞がそのような機会になることができれば、これに勝る喜びはありません。

最後に、受賞した皆さんはもちろんですが、応募してくださったすべての皆様に、再度お礼と感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございました。以上をもちまして、附属図書館長のご挨拶とさせていただきます。



上段：農・坂元・大谷・宇佐川・畑・田尻
下段：井上・小柳・田中・植山・中村

紡がれし者たち

こやこや

噂話とか伝説といった類のものは昔から嫌いだった。不確定な事実は人を不幸にする。例えば僕たちは、人から聞いた友達への悪口を鵜呑みにして、今まで大切であったはずの人を傷つけてはいないだろうか？ 真実を確かめようとせせずに、周りに流されてはいないだろうか？ 僕は自分の目で見えたもの、感じたものしか信じたくない。

信じられないくらい暑い夏の日だった。僕は重い足を引きずりながら、何とか教室に入り、窓際の隅にある自分の席に着いた。教室の後ろの方から見る風景は教室中の人間関係を掌握しているようで小さな優越感に浸れるが、今となっては誰が誰と話しているのか過敏に気にしてしまう自分が情けない。いつもと全く同じように見えるこの風景も、夏の始まりと共に少しずつその色を変えていった。「違うんよお前！ まず城を周回してできるだけアイテムを集めて中に入った方が絶対いい」「そんなん分かつとるけど、どう周るかが重要やん！」興奮して話す圭太にこれまた被せるように守が口早に応える。数日前までは一緒にゲームの攻略をああでもないこうでも

ないと話した仲なのに、今では僕が話しかけてもろくに答えてくれない。

他の奴らもそうだ。僕が話しかけようとすると無言で遠ざかる。ずっと一緒にいた圭太と守も、クラスの委員長も、先生までもが僕と目を合わせることを避ける。触れてはいけない腫物のように。席に着くと不意に大きなため息が漏れたが、教室の喧騒と蝉の大合唱によってかき消され、そのことに気づいたものは誰もいないようだった。机に肘をつきながら考える。ずっとずっと同じようなことが頭の中をぐるぐると駆け巡っている。僕はどこでどう道を間違ってしまったのだろうか。

間違ったもの、曲がったもの、裏切り者は許さないという脅迫めいた正義感がこの街には蔓延っている。田舎になればなるほどその空気が濃くなっていくのは僕の気のせいだろうか。人口減少が進んだ過疎地域に佇むこの閉鎖空間も例外ではなく、田舎特有の礼節を重んじる結束力のある中学校だった。その「団結力」が評価されたのか、創立一〇〇周年記念に市から名産の金魚が送られた時は、僕たちのクラスの二年四組が代表してその飼育を任されることになった。クラスで一丸となって金魚を育てる、ただそれだけのことなのに僕たちは使命感に燃えていた。特に、金魚飼育のためだけに新たに増設された生物係はその期待を一身に背負った。物珍しさと好奇心で立候補した僕や圭太や守、その他数人は週替わりで餌やり、水槽の掃除、酸素ポンプの管理を担当した。簡単な仕事だった。

難しいことを考えすぎて頭がくらくらしてきた。僕は堪らず教室を出た。クーラーが効いた涼しいはずの教室は息が詰まりそうだった。もうすぐ始業のチャイムが鳴りホームルームが始まる。急いで教室に駆け込む生徒と何人かすれ違いながら廊下を彷徨った。家には帰りたくなかった。母が何かあったのかと心配するからだ。保健室にも行きたくない。なんとなく人と話したくない。朦朧とする頭で何とか思考を巡らせる。僕はある場所へと体を引きずるように歩を進めた。

「進捗はどう？ 順調？」あの頃の石井先生は時々僕に声をかけてくれた。金魚によってクラスの間接力がさらに一段と高まったように見えたのか、熱心に飼育する僕にとっても感謝していた。金魚は、僕が餌をやるたびに必死になって口をパクパクさせた。誰かが世話をしないと、この小さな生き物は死んでしまう、そんなことを考えると自分が必要とされているようで素直に嬉しかった。真つ赤な魚体がヒラヒラとその美しさを見せつけるように水槽を泳ぎ回る姿に誰もが魅了されていた。金魚はクラスにあっという間になじみ、なくてはならない存在になった。

僕なんか居ても居なくても変わらない存在だ。今頃教室ではいつもどおりのホームルームが行われているだろう。僕は右往左往しながらも、何とか目的地であるプールサイドにたどり着いた。プールサイドには太陽の眩しい光と蝉の声が容赦無く降り注いでいたが、水面から蒸発した水分が程よく吹く風に運ばれて僕の顔にあたり、その夏らしさを心地よいものにしてくれた。水面が均一な速さで波を打つのをみていると、さっきまでバクバクと音を立てていた心臓の鼓動が少し

ずつ静かになっていくのを感じる事ができた。僕はただひたすらにぼおっと水面を見つめていた。とにかく、何も考えたくなかったんだ。

不意に、静かに一定の距離を保って揺れていた波が突然大きくなった。風が強くなったのかと呑気に考えていたが、プールサイド脇の雑草も、僕の伸びた髪もさして風に靡いている様子はない。むしろ無風だ。何かが変わだ、そう違和感を感じ始めた時、ぶくぶくと泡が水底から立ち上ってきた。まるで、何か大きな物体が下から水を突き上げている様だった。僕はおよそ自然の摂理とは思えない現象を、目を見張ってじっと見ていた。あまりのことに逃げ出すこともできなかった。何かが、水の底から生まれそうな気配がした。

金魚は死んだ。そしてそれはどうやら僕のせいらしい。朝、学校に着くと委員長が泣き腫らした赤い目をして僕を問い詰めた。「宮野くん、今週の飼育係だったよね、金魚……みんな死んでるよ？」水槽の中を覗くと金魚の目は黄色く濁り、ぷっくりと膨らんだお腹がだらしなくぶかぶかと水面に浮かんでいた。金魚は全滅していた。原因は水槽の酸素ポンプのボタンの押し忘れによる酸素欠乏症のようだ、と、石井先生がざわめく生徒達に説明しているのがぼんやりと分かった。説明が生徒に行き届いた頃、「誰の係だったんですかー」と、残酷な好奇心のこもった声で誰かが尋ねた。石井先生は僕の方をチラッと振り向いてすぐに顔を戻すと慈愛に溢れた声で「誰のせいでもないわ、金魚は今日で寿命だったの。」と言った。僕は罪悪感と恐怖で震えが止まらなかつた。胸が痛いという言葉を体で実感したのは生まれて初めてだ。一瞬だけ振り向いた石井先生の

顔は見たことがないくらい冷たい目をしていた。物分かりのいいふりをしたクラスメートは直接僕を責めるようなことはしなかった。でも、クラスのみん中は犯人を知っていた。スイッチを押し忘れた張本人は誰がどう見ても係が割り振られていた僕しかいなかった。それから僕はクラスメイトに無視されるようになった。クラスのみんなは金魚を殺した「僕」という「悪」に対して、「正義」を振りかざし、信じられないほどの団結力を発揮した。

僕は金魚を殺してなんてなかった。スイッチの押し忘れなんていう馬鹿みたいなミスをやらかすはずがなかった。

でも、誰一人として信じてくれなかったんだ。

長方形のプールのちょうど中心点で、黒い影がゆっくりと濃くなっていくのが見えた。じっと目を凝らした次の瞬間、人間の顔が、少女の顔が水面から現れた。それは一瞬生首に見えてギョッとしたけど、その少女の顔はまた水面に消え、数秒後にこちらに距離を詰めて現れた。まるで金魚が餌ほしさにパクパクと水面に顔を出しているようだった。彼女は人魚の様に僕がいる方へ泳いでくる。こんな不思議な状況なのに、彼女が泳ぐ姿があまりにもイキイキとして楽しそうだったので、いつの間にか少女の泳ぐ姿に見惚れている自分がいた。向こうは僕のことにはまだ気付いていないみたいだ。彼女は美しいフォームのまま僕の真横に乗り上げると、やっと僕の存在を認知し、それでもさほど驚いた様子はなく不敵な笑みを浮かべ、（後から聞いた話によると彼女

は微笑んだつもりだったらしい）一方的に喋りまくった。

「あ！ あなた見た見たことある。隣のクラスの宮野くんね！ 私は二の三の河野憂理。こんな状況で恥ずかしいけど……どうぞよろしくね！」

満面の笑顔で確かに彼女はそう言った。彼女の言葉は僕の右耳から左耳を貫通し、そのまま抜け落ちてしまうかと思いきや、頭を支点にした振り子のように僕の脳内をグリーングリーンと反芻した。僕はとにかく彼女の肩まで伸びている髪が水に濡れて光っているのを見て気を紛らわせた。

「突然だけどこのことは誰にも言わないでほしいの。もちろん私がプールから登校してきたなんて誰も信じないと思うけど、それでも変な噂が立ったらめんどうくさいし」

反芻した彼女の言葉はようやく僕の脳みそに染み込み、全くもって理解できないまま消化されようとしていた。この時の僕は終始自分でも呆れるほどの間抜け顔だっただろう。秘密？ プールから登校？ 何を言っているんだこの女は。頭おかしいだろ。不意に治ったはずの頭痛が再発したような痛みを覚えた。彼女は上下に薄い肌着を纏っているのみで水分をたっぷりと吸ったそれは体にまとわりつき、少女の体の輪郭をあらわにしていた。おまけに水分に太陽が反射してキラキラと光を放ち、まるで人間ではないような神々しさを放っていた。これは夢だ。誰かが僕を貶めようとしている。金魚が死んだことも、突然現れたこの謎の女も……。これは悪い夢だ！

その後の記憶は曖昧で、ただ目が覚めた時には保健室にいた。あれは一体何だったのか、もしかしてほんとにただの夢だったんじゃないかとホッと胸をなでおろし、帰ろうとした時、ふと隣のクラスの下駄箱を見ると、見たくない名前がピンポイントで僕の視界に入ってきた。

「二年三組 河野憂理」

彼女は確かに存在していた。

それからというものの、僕とゆうりの奇妙な関係が始まった。僕は以前の出来事が信じられず、頭の中で無かったものになっているが、彼女はそういう訳にはいかならない。学校で僕を見ると必ず話しかけてきた。

「宮野くん久しぶり！ 何してんの？」

「見ればわかるだろ、別に本読んでいただけだよ」

周りの視線が痛い。金魚の件以来ずっと一人でいた僕が誰かと話していることがよほど珍しいのだろう。それも女の子と。河野憂理のことを知れば知るほど僕と対極にいる人間だという事が分かった。いつも友達に囲まれて楽しそうに騒いでいる。数日前には僕にとってノイズでしか無かった声だ。

「ほら友達が待ってるだろ。早く行けよ」

僕は冷たくそう言い放つと読んでいた本に顔を戻した。

「冷たいなあ、じゃあまたね！」

ゆうりは僕と違う世界にいる。決して関わることのない人間だ。あの日の出来事はちょっとした事故だ。そう自分に言い聞かせると周囲の意味のある言葉達が次第に雑音に変わっていった。僕はそのまま本の中の物語に同化していった。

学校からの帰り道、町の中心を流れる古金川に沿って歩く。そして隣にはさも当たり前の様にゆうりがいる。帰り道が一緒だと数日前に判明してから毎日の様にホームルームが終わると教室に来る。

「いい加減にしてくれ、僕に構うのをやめてくれ！」

僕は何十回、何百回とゆうりに懇願したが聞き入れてもらえず、もはや意思疎通を諦めていた。

「宮野くん、この街の都市伝説知ってる？」

いつものように、ゆうりが唐突に話しかけてきた。

「こんな小さな街に都市伝説なんかあるのか？」

僕らが過ごすこの街は海が近く、川も多い。新鮮な海鮮料理は街の名物で県外から観光に来る人もいるほどだ。何でも数百年前、ここ一帯を支配していた大名によって敵襲に備えて城の周りを囲うように堀が作られたらしい。おかげで至る所に堀や川がある。水の都。それがこの街の売り文句だ。もっとも、整備されずに沼と化した川もあるのだが。

「川に沿って柳が生えてるだろう？ 柳の木ってのは幽霊を誘い出すって話聞いたことあるけど……」

よくあるオカルト話だ。僕は本で読んだ記憶を辿りながら答えた。

「そうそう！ 普通は幽霊よね。白い袴を着た髪長い女の人が柳の木の下に佇んでいるっていう」

「普通はって、じゃあこの街は違うのか？」

「この街には昔からある妖怪の伝説があるよ。ほら、職員室のある廊下に飾ってあるやつ」

あっ。思い出した。何故か廊下の一番目立つ場所に置いてあるあの絵。柳の下に佇んでいる妖怪。いかにも水の都らしい。

「河童か」

「正解！」

ゆうりは嬉しそうに笑った。

確かにこの街は河童が出てもおかしくないくらい自然とたくさんの河川がある。学校には必ずと言っていいほど河童の絵が飾ってあるし、商店街には河童の銅像が我が物顔で君臨している。今まで意識しなかっただけで河童はこの街のマスコミ的な役割を果たしていた。

「でも、河童がどうかしたのか？」

ゆうりはさっきの笑顔と裏腹に少し表情を曇らせた。

「宮野くんと初めて会った時、私プールから泳いで出てきたでしょ」

ゆうりと話すことはあれ以来多くなっていたが（もっともゆうりが勝手に話しかけてくるだけなのだが）初めて会ったあの日のことを改めて話すのは意外にも初めてだった。僕はもちろん驚きのあまり失神してしまい、その後おそろくゆうりによって保健室に運ばれたという情けない事実を抹消したかったという動機があるが、ゆうりに関してもその話を切り出すことはなかった。

陽は傾き、二人の影がずっと先まで伸びていた。触れてはいけない秘密に手を伸ばしているような、なんとなく気まずい雰囲気になった。しばしの沈黙の後、僕が声を発しようとしたその時、

「ゆうりくくく！」

遠くの方で野太い声をした。声のした方を見ると、畦道のずっと先に人影が見える。

「あ！ おばあちゃん！」

ゆうりは小さく叫ぶと人影の方へ駆け寄っていった。僕もその後を追いかけた。

ゆうりのおばあちゃんと思われる人物は背筋がほぼ九十度に曲がり、顔に刻まれたシワの数から推定するとかなりのご老齢であることが分かった。しかしその割にはキビキビとゆうりのもとへ近づき、しっかりとした口調で話している。何よりもその顔からは歳を重ね、様々なことを経験した者特有の愛嬌があった。

「ゆうり、学校帰りね。おばあちゃんちによってかんね。今日はたくさん胡瓜が取れたとよ」

「ほんと？ おばあちゃん！ でもママに怒られちゃうよ」

「よかよか！ お母さんにはおばあちゃんからいっとくたい」

そう言うと、ゆうりのおばあちゃんは僕の方を向いて開いているのか閉じているのか判別できない目で、頭のとっぺんからつま先まで舐める様に見つめた。

「こん男の子は誰ね？」

「ゆうりの友達だよ！」

「ほーん、珍しか。ゆうりが男の子ば連れとるげな」

おばあちゃんはにっこりと僕に笑いかけた。齒は所々抜け落ちていいる。

「あんたも来んね、話ばききたか」

「いや、僕はお邪魔ですし……」

「いいじゃん！ 行こうよ！ おばあちゃんの料理とってもおいしいんだよ！」

「来ても損にならん、お年寄りのお願いやけん来てくれんね」

急に誘いを受けることはすぐ苦手だ。いつもなら絶対に断っていただろう。でも、あまりにもおばあちゃんの目が真っ直ぐだったから、僕はいつものように目を逸らして逃げる事ができなかった。

「は、はい。お邪魔します……」

この時のことを思い出すと、河野家の人たちは良い意味でも悪い意味でも、とてもまっすぐだったことを思い出す。ゆうりもおばあちゃんも、まるでこの世界の悪を全く知らないような、牧歌的で優しい時間が流れているような、そんな空気に包まれている。だから僕も無視できないし、軽くあしらうこともできなかった。多分、居心地が良かったんだと思う。そんなぬるま湯に浸かりながら、僕の日常は少しずつ変化していったんだ。

おばあちゃんの家は僕らが歩いていた古金川のすぐそばにあって、周りに生茂る雑草や柳の木に紛れて、外から見るとその大きさを判別できなかった。おじいちゃんはゆうりが小さい時に亡くなってしまったらしく、一階建ての平家はとても広くて一人では持て余してしまいそうだ。ゆうりが言う様におばあちゃんの作る料理はとても美味しかった。胡瓜の浅漬け、くちぞこの煮物、野菜の煮付け、そしてピカピカの白米。僕らが帰ってきてから驚くべき手際の良さであったという間に料理は出てきた。

「うーん、おいしい！」

「本当だ、おいしい……！」

「どんどん食べなっせ、そげん喜んでくれるとおばあちゃんも嬉しか〜！」

僕の親は共働きなので家族全員で食卓を囲むことが少ない。おかずもスーパーのお惣菜がメインになることがしばしばだ。だからって、文句を言いたいわけじゃないけど、おばあちゃんの手作り料理は僕の胃袋をあっという間に虜にした。おかわりを申し出るとおばあちゃんはシワだらけの顔をさらにしわくちゃにして満面の笑みでご飯をよそってくれた。

ご飯を食べ終え、ゆうりと他愛ない会話をしている時、唐突におばあちゃんが口を開いた。

「で、宮野さんはゆうりのどこまで知っとっと？」

僕はぼかんと口を開いた。

「ど、どこまでと言われましても……」

「おばあちゃん！ まだ宮野くんは何も知らないの……これから言うつもりだから……」

「ほうかほうか、うんうん。丁度よか。これが良い機会たい」

一体何のことだ？ 優しい時間が流れていたはずの夕食が一瞬で緊張感に包まれた。おばあちゃんは僕の方を向いて姿勢を正した。そして目を最大限に見開き、ゆっくりと、そして太く芯のある声で話し始めた。

「宮野さんや。どうか信じられんじやろうけどね、わし達河野家には秘密があるんよ」

「な、なんですか？ 秘密って」

そこまで言う少しの間があいた。時計がカチカチと音を鳴らす。おばあちゃんは意を決した様に言葉を吐き出した。

「驚きなさんな、わしたちはな、河童なんじゃ」

「か、かっぱですか……！」

え、かっぱってあの皿を頭に乘せて甲羅を背負ってる緑色のあれ？ 間違いなく目の前にいるのは人間なんだけど。

ゆうりが続く。

「私たちは水の中を自由に移動することができるの、この街の河童伝説は私たち河野家のことよ」
帰り道、僕は頭を冷やすために古金川の堤防に腰を下ろした。何度も断ったが、送ると言っていて聞かないゆうりがさも当たり前前のように居る。

「……つまりゆうりは、水の中をワープすることができるんだな。あの日は遅刻して急いで学校に行くためにゆうりの家の風呂から学校のプールまでワープした」
何度も繰り返しゆうりに尋ねたことをまた繰り返した。

「うん、そういうこと」

水の中で行きたい場所を願うと水がある場所に限ってだが、心の中で想った場所へ瞬間移動できる。それが河野家に伝わる特殊な能力だった。

「じゃあ、あのおばあちゃんもワープできるのか？」

「おばあちゃんは若い頃できたけど、もうできなくなっちゃって言った。それに、私の両親はできない。能力の存在さえ知らない。能力が発現するのは河野家の中でも珍しいことなの。それに、いつなくなるかわからない」

なんとも不思議な能力だ。信じられない。

「ちなみにこのことを知っているのは私とおばあちゃんと宮野くんだけだよ」

「なんで僕がこんな秘密を抱えなくちゃならないんだよ」

僕は頭を抱えた。何かとんでもないことに巻き込まれている気がする。

「君と初めて会った時のことをね、おばあちゃんに話したの。そしたら変な噂を立てられる前に事実を話して口封じしなさいって言われて……」

「そんな、僕、誰にも言うわけないだろ、そんなこと……」

「まあいいじゃん！ おかげで私たち友達になれたんだし！」

なんともポジティブで身勝手な女だ。

「遡れば河野家ではこの能力を持っている人がたくさんいたらしいんだけど、今じゃ私だけになっちゃった。河野家の河童伝説が途絶えるのも時間の問題ね」

河童の血を引く一人の少女、河野憂理。僕は改めて目の前の少女を見つめた。ゆうりはいつも笑っているせいとか、口角が常に少しだけ上がっている。初めて彼女がプールで泳いでいるのを見た時、あまりにも楽しそうなので目を離すことができなかったことを思い出した。彼女は制服を着ていなかったし、上下の薄い肌着が水を吸って光を反射して、河童なんかじゃなくて、本当に

キラキラした人魚みたいだったんだ。

「でも、一つだけ気をつけなきゃいけないことがあるの」

「気をつけること？」

「水の中をワープできるのは基本的に私の体だけなの。服を着てワープすると体に負担になる。なんだかエネルギーを吸い取られるみたいなの。何か物を持ってワープする時も同じよ。消しゴム程度だったら差し支えないんだけど、通学鞆とかの大きさになるととても疲れる。だから基本的には薄着だし、そのために学校には予備の服を置いてるの」

「だからあの時肌着だったんだ。少しでもドキドキしてしまった自分が恥ずかしくなった。」

「ただ水中で水のある別の行きたいところを願えばそこにワープできるだけ。ほんっとなんの役にも立たない能力だよ」

僕は堤防の硬いコンクリートを背にして上向きに寝っ転がった。日はとっくに沈んでいて星が怖いくらい綺麗に見えた。この世界には自分では考えられないような、信じられないものがあるんだ。

「本当だな、学校に遅刻しそうになる時にしか役に立たない」

僕たちは顔を見合わせて笑い合った。一つの秘密を共有していることが、誰かと関係を持っていることが、新鮮だった。たとえそれがこの不思議な力を持った河童少女でも。風が体に当たって少し肌寒かった。僕たちは身を寄せ合って今までの人生のことを話した。もっとも僕の人生なんて三分もあれば終わる様な薄っぺらいものだが、何故か話は尽きなかった。柳の木が風に揺れ

てざわざわとなる音が心地よかった。また明日も、ゆうりは学校で話しかけてくるだろう。きつとその次の日も、またその次の日も、ずっと。それを僕は鬱陶しがりながら聞くんだ。初めて学校に行く意味ができたような気がした。

秋が来て冬が過ぎた。受験生になった僕らは相変わらずたくさんのお話をした。もっとも、ほとんどの場合ゆうりが喋り立てるだけなのだが。ゆうりは自分の学力よりもかなり上の高校を目指して勉強した。僕と同じ高校に行くために。合格発表の時、2人の名前があったのを見て歓喜した。おばあちゃんも喜んでくれた。僕はおばあちゃんが大好きだ。料理だったり、農作業だったり、たくさんのお話をしてくれて。僕を本当の孫みたいに可愛がってくれた。ゆうりと一緒にいると、ゆうりの友達が話しかけてきて、それが数珠つなぎに広まっていくもんだから、僕はいつの間にか金魚の一件が起こる前よりもずっと友達が増えた。クラスの奴らも、次第にそんな僕を無視することはできなくなって、少しずつ話しかけてくれるようになった。楽しい時間はどうしてこうもすぐに過ぎ去ってしまうのだろう。

そして僕らはあっという間に高校二年生になった。

騒がしい教室、外から聞こえる体育の授業でサッカーをする声、廊下を誰かが歩く音、僕の周囲は何一つ中学生だったあの頃と変わってない。五、六時間目の授業が終わる。僕はゆっくりと

帰る準備をする。今日の授業の内容を思い出しながら教科書をバッグに詰める。すると、いつもの様にあの声がある。

「宮野く！ 帰ろう！」

ゆうりが廊下の窓から手を振っている。

「うん、ちょっと待って。今行く！」

僕らは一緒に家路に着く。いつの間にか当たり前になってしまった、初めて会った中学二年生のあの日から、今までずっと何年もこうしている。友達からは何度も付き合っているのか聞かれるが、お互いにそう言う話をしたことがない。僕もゆうりが僕のことをどう思っているのか分からなかった。ただ、何となく、僕たちの間には恋人とかそう言うものを越えた何かがあるような気がしていた。その時はそれが何なのかまだ分からなかったけど。

「おばあちゃん、元氣？」

ゆうりのおばあちゃんは一年ほど前に足が悪くなり、今では杖を使っている。

「うん、畑を小さくして今でも野菜を育ててるよ。何回も一緒に暮らそうって言ってるんだけど嫌だ。おいしいちゃんと過ごしたあの家を離れたくないみたい。多分それがおばあちゃんにとって一番幸せなのかなって思う……」

「そうか、そうだな。今度会いに行ってみるよ」

「うん！ おばあちゃん、宮野くんが来るととても喜ぶからそうしてくれると助かる」

その週末、僕はおばあちゃんに会いに行った。

「まあ、宮野くん。久しぶり。来てくれたとね」

おばあちゃんは相変わらず元気だったが腰は今まで以上に曲がり、木製の杖を慣れない様子で使っていた。中学の時は頻繁に遊びに行っていたものの、高校になるとあまり時間もなくこの家を訪れるのは久しぶりだ。玄関に入るとすぐ横におじいちゃん（おばあちゃんの夫）とおばあちゃんのお父さんの遺影がお出迎える。今では見慣れた顔ぶれだ。三十分ほど他愛もない話をした。最近の学校生活、夏が近づいてきたこと、ゆうりは元気にしているかなど。

「ゆうりは頑固やけん、無理するところがある。悪かばってん、あの娘のこと見といてくれんね」
「ゆうりが頑固なのは僕が一番知ってます。大丈夫ですよ」

実際、ゆうりは何かに夢中になると周りが見えなくなる節がある。

僕らが中学三年生の時、事件は起きた。ゆうりと一緒に学校から帰っている途中、急にゆうりが顔を引き攣らせて叫んだ。

「宮野くん！ 見て！ 猫が溺れてる！」

「本当だ！」

見ると、野良猫が河川に飲まれて流されていた。猫は濁流の中、呼吸しようと必死に前足を動かしている。昨日大雨が降ったせいで川の流れもはやく、猫が溺死してしまうのは時間の問題にみえた。周りに人もいない。どうしよう、とにかく警察を呼ばないと、でも間に合うかどうか……。

「早く助けなきゃ！」

そう言うや否やゆうりはセーラー服を脱ぎ、下着のまま川に飛び込んだ。あの時は十一月で水温は相当低かった。

「ゆうり！」

止める暇もなかった。ゆうりは息を深く吸い込み、水中へ潜るとふっと姿を消した。その数秒後には猫を抱き抱えたまま川辺に現れた。猫は無事だったらしく、助けられたこともわからない様に逃げていった。大変なのがゆうりだった。猫と一緒に水中をワープしたことでかなり体力を消耗した様だった。

「ゆうり！ どうしたんだよ、大丈夫か！」

肩が激しく震え、息も絶え絶えになっている。ゆうりのこんな姿は見たことがなかった。僕は急いで自分の着ていたブレザーを掛け、氷のように冷たいゆうりを少しでも温めようと抱きしめた。

「おばあちゃんの家に行こう！ あそこならここから近い！」

「…ダメ！ 心配、かけちゃう…！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろう！」

ゆうりは頑として動かない。

「ちょっと休んだら…大丈夫だから…！」

僕は仕方なくゆうりを自分の家に連れていった。この時間なら親はまだ仕事から帰ってきてないはずだ。案の定家には誰もいなかった。お風呂に入って熱いお茶を飲むとゆうりは少しだけ元

気になった。ゆうりのあんな姿を見たのは初めてだった。僕は知らなかったにしろ、ゆうりを止めることができなかつたことを激しく後悔した。能力を使うことがあんなに危険なことなんて。僕と一緒にいないとゆうりはまた無茶をして大変なことになるだろう。これからは絶対にゆうりから目を離さない、何があっても絶対に。

「私ももう長くないから、ゆうりを頼むよ」

急に真面目な顔をしておばあちゃんが言った。

「何言ってるんですか、冗談はやめてください！」

おばあちゃんが亡くなるなんて考えられないし考えたくもない。僕はこれからできるだけ週末はおばあちゃんに会いに行こうと決めた。

涼しかった春が終わり、七月に入ると暑さが一気に本格化してきた。僕は家で汗だくになりながら、水着を探していた。ゆうりに海に行こうと誘われたんだ。学校ではよく一緒にいるが、外で会うのは久しぶりだ。にしてもなんでこんなに暑いのだろう。確かこの押し入れにあったはずだけど、

「お母さん！ 俺の水着どこあるか知らない？」

階段の下へ大きな声で呼びかける。

「押し入れの奥にあるはずよー！ ちゃんと探さない！」

探してるんだけどなあ……。僕は目一杯背伸びをして押し入れの奥まで手を伸ばした。カンッ、

何か金属が擦れた音がすると同時に手に固くてひんやりとしたものが触れた。身を乗り出してやっとの思いでその物体を取ると、古びたクッキーのカンだった。軽いが中から音がする。何か入っているみたいだ。何でこんなところに置いてあるんだろう。触れてはいけない何かに触っているようで罪悪感があったが、ほんの僅差で好奇心がそれを上回った。僕は固く錆びた蓋をこじ開けた。

「なんだ……これ」

中には古びた紙切れがたくさん入っていた。

「写真か！」

そこには、見覚えのある若い女性が写っていた。へえ、お母さん昔は痩せていたんだなあ。体型が変わっても切長で優しい目は何も変わっていなかった。どうやら、この缶には母の思い出の写真が詰まっているらしい。ほとんどが二十代前半の母、そして若かりし頃の父の写真だった。おそらく僕と思われる赤ちゃんの写真もあった。最も古い写真は母が小学生くらいの頃の写真だった。僕には母方のおばあちゃんとおじいちゃんはいない。若くして亡くなったと聞かされている。

この集合写真に写っている人達は、ほとんど知らない顔ばかりだ。写真を眺めていくうちに、あの違和感が少しずつ大きくなっていった。この思い出が詰まった皆さんの写真は、どうしてこんな押し入れの奥に置かれていたのだろうか。アルバムなら別にきちんと整理されたものがあるのに、まるで故意に隠されていたみたいだ。僕は無心でひたすら写真をめくっていった。そして、ふとあることに気づいた。

「ん？　なんだこの人？」

僕は目を疑った。額から汗が滴り落ちる。目の前にある現実が信じられなかった。なんで、この人がいるんだ。どういうことだ、一体……。

その時外で激しい雨が降り始めた。辺り一面真っ黒な雲に覆われ、巨大な雨粒が屋根を叩きつける。それは今までに見たことのない激しさだった。僕はそのあまりの煩さに耳を塞いだ。

雨は降り止まなかった。勢いは衰えるばかりか次第に増していった。雷鳴が轟き、下の階からテレビで大雨洪水警報が流れている音が聞こえた。僕は布団にくるまったまま何もできなかった。途中会社から早退してきた父がドアの外から呼びかける声があった。何も、何も考えられなかった。携帯が鳴り響いている。きっと大雨警報が定期的になっているのだろう。僕はそのまま眠りに落ちた。

何秒、何分、何時間がたっただろう。目が覚めても相変わらず外は土砂降りだった。ただ、窓の外に広がる光景が異常なものだと言うことはわかった。古金川が氾濫している。もともと雨の多いこの街では川が氾濫することはしばしばだ。しかしそれは住民や自治体も分かったことでダムを作ったり、堤防が建てられたりと、様々な対策が行われている。なのに、窓の外は一面海の様になっていた。僕は時間を確認するために携帯を見た。十件以上の不在通知が届いている。着信もとは、

「ゆーり……！」

一番最近の着信は五分钟前だ。掛けても繋がらない。留守番電話が残っている。僕は震える手で画

面をタップした。

「宮野！ 大変なの……！ おばあちゃんが……！ 家に取り残されて、足を痛めて避難できなかったみたいで……。車でも迎えに行けない。どうしよう……。救助を呼んだけども間に合わないよ……。 どうしよう！ おばあちゃん死んじゃう！」

ゆうりの悲痛な叫び声はそこで途絶えた。おばあちゃんの家はここよりも低地にある。あの平屋ではこの勢いだととくに浸水しているだろう。悲しみと同時に怒りが込み上げてきた。何件もの着信。ただ無力にベッドで寝ていた自分。

「何やってるんだ俺は！」

僕はベッドから飛び起きた。ゆうりが次に起こす行動は簡単に予測できたし、僕がするべきことも分かっていた。急いで階段を飛び降りて玄関へ向かう。お願いだ、間に合ってくれ！

「裕介！ あんたどこに行くの！」

「ごめん！ すぐ戻るから！」

母の声を背に外へ出る。激しい雨が体を打ちつける。僕は急いで身に纏っている服を脱ぎ出した。

『この能力は河野家だけに伝わるものなの』

当たり前だが周りには誰もいない。僕は素っ裸のまま、すぐそばを流れている古金川へ向かう。

『水の中で行きたい場所を考えて』

膝まで水に浸かる。痛いほど冷たいが、怯んではいられない。僕は古金川へ身を投げる。

冷たい水が僕を飲み込んでいく。こんな状況なのに、どうして水中にいとこんなにも穏やかな気持ちになるんだろう。まるで、母親の胎内にいるようだ。全身に意識を集中させる。生まれて初めての体験なのに、やり方を知っているみたいだ。

早く、僕をゆうりとおばあちゃんの元へ、平家のすぐそばの古金川へ……。

あの押入れの中にあった写真で僕が見たものは、ゆうりのおじいちゃんだった。おばあちゃんの家のお玄関に遺影が飾っているから同じ人だと言うことはすぐに分かった。おじいちゃんは、子ども時代の僕の母さんを抱っこしていた。あくまで僕の推測だが、きっと母さんは河野家のおじいちゃんと愛人との間に生まれたのだろう。河童伝説の血を引くのはゆうりだけじゃない。今まで気づかなかっただけで僕にもその能力があるはずだ。僕はゆうりと同じ河童の血をひいている。それも色濃く。

急に水温と水圧が変わった。水の空気が変わった。目をゆっくり開けるとそこは完全に浸水したおばあちゃんの家だった。古金川から氾濫した濁流が腰近くまで迫っている。間に合え！ 早

く見つけるんだ！ ゆうりとおばあちゃんを！ もしゆうりがおばあちゃんを見つけて一人でワープを試みたなら体への負担が大きすぎて大変なことになってしまう。川で溺れた猫を助けた時の痛々しい姿が頭によぎった。

この平家で一番高いところはおそらく台所の長机だろう。僕は急いで水を掻き分けながら必死に前に進んだ。電気が落ちていのか灯りもなく、周りもよく見えない。奥で何かが動いているのが見えた。目を凝らす。いた！ おばあちゃんとゆうりが机の上でうづくまっている。おばあちゃんは意識がないようでぐったりしている。ゆうりはこちらを見ると驚いた顔をした。時間がない。早く安全な場所へ連れて行かなければ。

僕は二人の元に駆け寄り、おばあちゃんを僕とゆうりが囲うような態勢になった。ゆうりは僕がいることに驚いたようだったが、すぐに真剣な顔に戻って、目配せをした。今は時間がない。詳しいことはまた後で話そう。僕とゆうりが知っている安全な場所。そこにはゆうりの着替えだがある。おそらくたくさんの人が避難しているはずだ。初めて会ったあの場所。きっとゆうりも分かっている。二人がかりでおばあちゃんをゆっくりと机からおろし、息ができるように半身だけ水に浸からせた。成功する保証はなかった。僕は死ぬのか？ いや、まだ死ねない。まだやることがあるんだ。

僕とゆうりは静かに目を閉じた。すぐに、体にこれまでにない圧力がかかった。肺が破裂しそうだ。物凄い勢いで流されているのが分かった。僕は、おばあちゃんとゆうりを離さないように腕に精一杯の力を込めた。どれくらい経っただろう。ほんの一瞬のことだったかもしれない。急

に流れが穏やかになるのを感じた。早く、おばあちゃんを！　もがく様に水面まで泳ぎ外の世界に顔を出す。予想した通り、そこは中学校のプールだった。

「ふはあ！　はあはあ……！　ゆうり！」

同じ様に顔を出したゆうりと最後の力を振り絞っておばあちゃんを屋根のある場所まで連れて行く。僕はすぐに救助隊を呼びに体育館まで走った。

「おばあちゃん！　しっかりして！」

おばあちゃんは何度か水を吐き出しぐったりと横になった。息も安定して規則正しく脈を打っている。よかった……何とか間に合った。僕とゆうりはその場に倒れ込んだ。体がひどく疲れている。おばあちゃんが助かったと言う安堵感は鳴り止まない雨でさえ心地よく聞こえさせた。後に来た救助隊の人は、僕たちが何でこんなところにいるのかとても驚いていたが、水に濡れたおばあちゃんを見ると慌てて救護室まで運んでいった。

少しずつ雨は弱まっていき、遠くの方では雲の割れ目に太陽が覗いて、いく筋もの光の線が地上に降り注いでいた。まるで世界が終わっていくのを見ているようだ。いや、もしかしたら始まりなのかもしれない。

僕は、ゆうりと初めて会った時のことを思い出していた。あの頃は誰も信じることができなくて、自分が世界でたった一人ぼっちのような気がしていた。ふと濁流で溢れたプールを見つめると、小魚が鱗を輝かせながら泳いでいるのが見えた。それは中学三年生の時に自分が殺してしまった色とりどりの金魚を思い出させるのに十分だった。酸素ポンプのスイッチを入れ忘れたことな

んて全く身に覚えがない。でも、周りの圧力に流されて、もしかしたらそうだったのかもしれないと諦めてしまった……。

いや……、待て……。僕はあることを思い出していた。金魚が死んだ前の日の夜、僕は浴槽に浸かって金魚のことばかり考えていた。何となく水槽を掃除して、何となく酸素ポンプのスイッチをカチカチと鳴らす『イメージ』をしていた。あの時、ほんの一瞬だけ右手が固い何かに触れてカチツと音が鳴った気がした。おそらく僕はあの瞬間に、知らず知らずのうちに能力を使い、浴槽から水槽まで右手だけがワープしてスイッチをオフにしまったんだ……。

タネは驚くほど単純で明快なものだった。僕はホッと息をなでおろした。スイッチをオフにしてしまったのは確かに自分だが、そんなこと分かるわけがなかった。ようやくあの時からずっと抱え込んでいた罪悪感から解き放たれた気がした。僕はゆっくりゆりの方を向いて口を開いた。

「ゆり……」

「……なあに？」

「ごめんな、すぐ電話に出なくて」

「本当だよ……。でも、信じてた……。なんとなく分かったの、私。宮野くんが河野家の血を引いてるんじゃないかって」

「どうして……!」

僕はうろたえた。

「だって、宮野くん似てるんだもん、すごく。私のおじいちゃんに」

「そう……かな……？」

「そうだよ、初めて会った時から他人とは思えなかった」

「ゆうりと出会った日から僕の周りはすっかり変わっていった」

「変わったのは周りじゃなくて宮野くんだよ」

「変えてくれたのはゆうりだよ」

世の中にはあり得ないことが存在する。嘘のようなほんとの話は僕らの好奇心を弄び、刺激して、いつの間にか姿形を変えて伝わっていく。でも、偽りだらけの世の中だけど、確かに真実は存在するんだ。この世界には僕らをワクワクさせるような嘘みtainな出来事で溢れている。僕は何となくこれからもゆうりと一緒にいて、信じられない不思議なことが沢山起こるような気がした。ゆうりから一瞬でも目を離したら、今にもどこかへ消えてしまうような気がした。ふと横を見ると、ゆうりはゆっくりと静かに、信じられないくらい綺麗な涙を流していた。

「……何で泣いてるの？」

「……分らない。多分、ずっと一人ぼっちだったから……仲間ができて嬉しいんだと思う……」
大粒の涙を流すゆうりはただただ美しく、僕はそれがとても愛おしかった。

「これから……新しい何かが始まる気がするの」

僕は二人で優しい光と雨に包まれながら、新しい世界が始まろうとしているのをじっと見ていた。

妄執…いつも、どこまで いのうえたにし

男がいる。

入道雲がによきによきと生えるその根本には六階建てのビルがあって、その入り口に男はいる。ビルの入り口は洋画に出てくるガレージの造りみたいに吹きさらしの空洞になっていて、その真ん中に男は立っている。

吹きさらしの奥にはフランチャイズのハンバーガー屋があって、二階より上は映画館だ。映画館に入るには、向かって右手にあるエレベーターに乗るか、その隣の階段で登るかしないといけない。

しかし、男はどちらをするでもなく、ハンバーガー屋に入るわけでもなく、吹きさらしの真ん中にただ立っている。

その男というのは、いたって普通の男だ。身長は俺と同じくらい。髪は短く刈ってある。もう三、四ヶ月は美容院に行っていない俺との差がそこにある。

眼鏡はかけていないし、コンタクトもしていない。つまり、裸眼である。その艶めかしい語感

のわりに、取り立てるほどでもないことに定評のある裸眼だ。

その男は猿から進化してきたような顔をしている。自分は猿から進化したのだと信じきっている顔だ。言い換えれば、ほとんどの人類と同じ顔だ。俺とも同じ顔をしている。

もう少し頑張れば、テレビばかりで見るイケメン俳優風くらいにはなれるだろうし、もう少し自堕落であれば、俺よりひどいことにもなりうる。

そんな普通の男だ。

しかし、そいつは旅に出ようとしている。

それは全く普通のことではない。

普通とは恐らく、旅に出ないことだからだ。

誤解を防ぐために言うが、そのピルの映画館で映画を観ることをありきたりな比喻表現でもって、「旅に出る」などと言っている訳ではない。

旅に出るとは、その意味のまま、旅に出ることだ。

しかし、映画を観た後ではあるらしい。

「どんな映画を観たんだ？」

「男の人と女の人が旅する映画だ。」

「だから君も旅をしようと思ったのか。」

「だからというわけではないが、だからと言っても差し支えないのかもしれない。」

その旅の目的地を俺は知らないし、実のところ、その男自身も分かっていないらしい。

当て所もない旅だ。

旅に目的地がないというのも、普通ではない。

普通の旅とは恐らく、見たいものか食べたいものがあることを言うのだ。

しかも、男がこれから出ようという旅は、旅というには随分と規模感の小さな旅だ。

「九州を出ようかどうかというところだ。」男はそう言う。

そういうところも普通ではないのかもしれない。

あまりカッコつけずに小旅行と言った方がいいのではないかとも思うが、男がそれを旅というのなら、まあ旅なんだろうと飲み込む。

こいつの格好を見て、旅人だとわかる奴もいないだろう。

そいつはジーパンを履いている。デニムではなく、ジーパン。ダメージでもない。まっさらな紺色のジーパンだ。

そして、白いTシャツを着ている。よく洗濯された、パリパリのTシャツ。おひさまの匂いが漂うやつだ。脇の部分が汗で滲んでいる。

胸の部分には黒く凄惨なフォントで pick me と書かれている。

そのスカした文句だけが特異点で、その男の爽やかな全体像の中で、なんだか独特の禍々しさを放っている。

「ヒッチハイクでもしようってのかい？」
俺はからかってみる。

男は俺をジロリと睨んで、しかし何も言わない。その目を見て、俺は止められないことを悟った。

そいつが普通でなくなることを、俺は止められない。俺はまた、一人になるらしい。

置いていかれることには慣れていたけど、寂しいものは寂しいものだ。そいつのことは好きでも嫌いでもなかったけれど、居なくなると寂しいものなのだ。

そいつは俺の目を見て言う。

「俺はうんざりした。」

「俺にかい？」

「俺にだよ。」「俺もだよ。」

そいつは笑う。からからと風車が回るように笑う。

「それじゃあ、一緒に来るかい？」

「冗談じゃない。俺はまだ普通でいたい。」

「俺だって、できることなら普通でいたい。」

「旅になんか出なければいい。」

「そんな単純なことじゃない。」

「普通ではもう、いられないのか？」

「いられない。」

男はそう断言する。

俺はなんだか悔しくって、その男の取りすました顔が憎くって、もういっちょ、からかってみたい気持ちになる。

「自分探しの旅ってやつかい？」

男は機嫌を損なわれたとでもいうようにぶっきらぼうにこう答える。

「そんな陳腐な言葉選びはしないでくれ。」

「なんだよ。ある意味での普通さではあるじゃないか。誰だって少なからず、そんな時期はあるだろうさ。自分が元々普通じゃないと勘違いするくらい恥ずかしいこともない。」

「自分探しているのは普通というより、凡俗の類だよ。少なくとも俺の中ではね。自分がインドで見つかるなんて思っちゃいないさ。」

気づくとお互い喧嘩腰になっている。

誰もが普通ではいたくて、凡俗ではいたくない。その境を見極めるのが世間一般で言う「センス」なんだと思う。

俺は話を戻す。

「じゃあなんで旅になんか出るんだ。」

「そうだな……」

「勿体ぶるなよ。」

「いや、そんなつもりはないんだ。」

男は少し黙る。眉間に寄った皺が深くなる。そこに俺が深淵を見出そうとした前か後か、微妙

なところで、また口を開く。

「なんというか、今まで二十年とちょっと、俺は生きてきて、しかし、どうにもしこりがあるんだ。」

「しこり？ そんなの誰にでもあるもんじゃないか。」

「いや、それは言葉の上の問題だ。俺のはもうちと具体的で、緊急性がある。」

「ほう、それじゃあ、そのしこりとやらを教えてくださいよ。」

「ふむ、つまりだな、今の俺の手元には、嫌いなものしかない。」

「そりゃ大変だな。」

「そう他人事にしないでくれ。」

「いや、すまなかった。そんなつもりじゃなかった。」

俺は続きを促す。男はやっとこさ、その重い口を開く。

「これまでの人生で、俺は自分の嫌いなものばかりを見つけてきた。全部嫌いかと言われるとそうでもないが、どこを見回しても嫌いなものばかりだ。」

男は自分の手のひらを開けたり閉めたりしている。

「というより、俺の好きなものには形がない。掴めないし、愛でれない。それを表す言葉もない。その総体、俺の好きなものの総体をこの旅で探したい。」

男のその言葉を聞いて、俺はただならぬ興味を覚えた。

なるほど、男の言うことには、俺も覚えがあったのだ。

世界が広いことを俺はインターネットと映画と小説と、それから数人との会話で最近知った。しかし、そこで語られることのほとんどは誰かの嫌いなもので、好きなものもないではなかったが、煙草を吸わない人だの、早朝の露の香りだの、あなたの笑顔だの、どうにもあやふやなものばかりだった。

よく考えればおかしな話だ。嫌いなものの理由なんて一から十まで、聞いている相手とうんと言うまで、どこまでも説明ができるのに、好きなものの理由を聞かれるときいきなり言葉が出なくなる。

だから俺は男に付いて行くことにした。男の好きなものを探すついでに、自分の分も探してみようと思った。

「君の邪魔でさえなければな。」

「旅は道連れ、世は非情。」

来いという意味なのだろうか。

回りくどい言い方は好きではなかったが、そうであれば嬉しいとは思った。

そういう意味でこの言い回しは成功していたのだろう。

俺も付いていきたい。

もしかすると、普通であることに興味がなくなっただけかもしれない。

いい加減、寂しさにうんざりしただけかもしれない。

実際のところ、自分の好きの総体まで見つかるとは少しも考えていなかった。

旅を始めるにあたって、俺たちはレンタカー屋で車を借りることにした。

旅は歩くものだ俺は考えていたから、男がそれを提案してきた時は多少意外に思ったものだ。しかし、歩くことに大した拘りがあるわけでもないの、俺はそれを苦勞もなく受け入れられた。

ネット予約で車種を調べて、値段を検討する。

レンタル時間は一番手頃なところにした。つまり二十四時間である。

二十四時間の外出を旅と言うのには抵抗がないわけでもないが、男がそれでいいと言うからそうした。

いつもは、ネット予約なんてめんどくさそうなのは他人に任せっきりな俺だが、その俺以上に、男は他人に任せっきりだったから、俺がやらざるを得なかった。

その間、男は相変わらずグーとパーを繰り返している。まるで、以前にはその手の内に何かがあったんだと言わんばかりに。

でも、そんな男に文句を言いたくなるほど苦痛な作業ではなかった。

旅するのは準備期間が一番楽しいんだと、俺はこの旅の終わりに結論づける。

この作業もその一部であった。

この車の方が安い。

この車の方が広い。

この車の方がカッコいい。

しかし、結局それらの作業は全て無意味なものになった。

「俺はファンカーゴがいいんだ。」

「ファンカーゴってトヨタのファンカーゴかい？」

俺が熟考に熟考を重ねて、最終的に借りようとしたのは、メーカーは同じトヨタだったが、車種は銀色のポルテだった。その予約画面を見せると、男はそれまでさした興味も見せなかった癖に、そんなことを言ってきた。初めからそう言えはいいのに。

似たようなもんじゃないのかと思うが、車好きってのはやたらとこだわりの強い人種だと、俺はインターネットで知っていた。

しかし、こいつがそういう種類の車好きではないことも知っていた。

そのはずなのに、男はなんだか涙目だった。

「ああ、そうだ。それも赤くて、底の部分だけ灰色で、なんだか髭面みたいで愛嬌のあるやつ。」

「なにか思い入れでもあるのかい？」

男は何も言わなかった。吹きさらしの空洞は風を変質させることで、びよーびよーとなる楽器に変える。俺たちの間の静寂を間抜けな音で埋めようとする。

「わかった。それじゃあ、ファンカーゴにしよう。」

「頼むよ。」

元々こいつの旅だから、俺も大した異論はなかった。幸い、ファンカーゴを貸しているレンタカー屋が近くにあったので、すぐさまそれを最安値で予約した。

気を取り直し、晴れた顔をして、男は言う。

「それじゃあ、旅に出ようか。」

「もう始まるのかい。」

「分からない。実際どこから旅なんだろうね。」

「帰るまでが遠足ってのは、よく聞くもんだけどね。始まる前から終わることを考えるってのは、あまりよくない。」

「まあ、こういうことにおこうよ。生まれた時から始まっていたんだ。」

「それじゃあ、今更旅に出るとは言わないんじゃないか。」

「それもそうだな。」

「じゃあ、どうする。」

「次に行こう。」

俺たちはようやく歩き出した。次とは、なんてことない、レンタカー屋のことだ。

ビルから出たアスファルトの道には合掌型の看板が並んでいて、一つ一つに映画のポスターが入っている。このビルの映画館でやるんだらう。新しいのもあれば、古い名作もある。

俺たちの両脇に並び続けるポスターを流し目で確認しながら歩く。その看板の列は俺たちの歩

くべき方向へどこまでも続いていた。たった三スクリーンしかない映画館（それにしてもミニシアターとしては多い方だが）でこんなに大量の映画が流れているとは思えない。もしかしたら、上映が終わっても置きっぱなしにしているのかもしれない。なんせ100年以上やっている映画館であるらしいから。

実際、そう信じられるほどにたくさんあった。ジャームッシュの「デッドマン」、ナ・ホンジンの新作、カウリスマキの「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」、ロイ・アンダーソンの「さよなら人類」、どこぞのエモ邦画、ジョン・レノンのコンサート映像、トルナトーレの「海の上のピアノスト」、キアロスタミの「クローズ・アップ」、オーガニックに関するドキュメンタリー、ホン・サンスの「逃げた女」にスコセッシの「タクシードライバー」。

「なんだか、シネフィル趣味の映画ばっかだな。」

「シネフィル御用達の映画館だしな。」

「気に食わないね。トルナトーレなら『ニュー・シネマ・パラダイス』でいいじゃないか。」

「そう言うなよ。どれもいい映画だと思うけどな。『タクシードライバー』なんかは君だっ好きだろ。」

「みんな好きだって言うから、好きと言いたくなくなった。」

ややこしい奴だと思った。しかし、そう言う男の口調はなんだか楽しそうだ。

「それじゃあ君は何が好きなんだ。」

「もっと楽しいやつが好きだ。アル・パチーノ主演の『セント・オブ・ウーマン』なんか好き

だな。」

「意外だ。もっとディープな……レオス・カラックスとか言うんだと思ってた。」

「そうかい？ まあ、『ホーリー・モーターズ』なんかは確かに好きだけだね。ゴジラのテーマをバックにメルドが大暴れするシーンは否応なくアがるよ。けど、『セント・オブ・ウーマン』も好きだ。盲目のアル・パチーノが少年に指示させながら手探りで車を運転するシーンあるだろ？ あれが好きなんだ。やけに楽しそうなアルと終始怯えている少年、ああいうのは観てて楽しい。」

「ああ、あそこは俺も好きだ。でも、映画自体はあんまり好きじゃない。」

「どうしてだ？」

「演説で終わる映画が総じて好きじゃないんだ。その演説の整合性に関わらず。ほら、俺たちの勝ちだ！ どうだ！ って感じがして、腹が立つ。」

「お前もなかなか面倒くさいな。」

返す言葉もなかった。

ともかく、そういうふうには、俺たちは道中を好きなものと嫌いなものとを語ることで過ごした。そうすることで、これから先の何かに役立つかもしれない、というのは後付けだろうか。

しかし、案の定と言うべきか、気づけばただの悪口合戦になっている。

『ミッドサマー』は酷かった。」

「全く同感だ。ありゃ、二〇二〇年で一番過大評価された映画だと思っね。あれを持ち上げてる連中も総じて嫌いだ。」

「あの時期はSNSのタイムラインが見るに堪えなかったよ。」

「わかるよ。勘違いした映画アカウント共が次から次へと『ミッドサマー』の話ばかり繰り返すんだもんな。ノイローゼにもなりかねん。」

「伏線がどうのこうの言われているけどね、そもそも一過性の芸術たる映画において、二度三度見ないと理解できないような伏線は評価の対象にはならんと思うね。」

「そういう意味では『TENET』なんかもそうだよ。あんなのノーランの自己満足でなけりゃなんだって言うんだ。」

「一度解説サイトだのパンフだの見ただけで、その映画を全て理解した気になって、滔々と高説を垂れ始める連中も嫌いだ。『TENET』の時は特に目立ったな。」

「理解できないものは理解できないものとして弾劾すべきなんだ。注釈がいる映画なんて見たくもないね。」

「しかし、そうなると俺には疑問符が浮かぶ。」

「どうしたんだ？」

「我がキューブリック様の『2001年…宇宙の旅』はどうなる？ あんなの注釈が必要な映画の典型例じゃないか。」

「馬鹿だなお前は。映画の評価と映画史の評価は分けて考えるべきだよ。確かに宇宙の旅は、一つの作品としては全くもって意味がわからん。俺は小説版を読んでやっと、半分も行かないくらいに理解できたかどうかくらいのもんだ。」

俺は賛意を込めて頷く。俺だって同じようなもんだ。馬鹿なんて暴言はあまり気にならなかった。

「でもな、それはおいといて、60年代にSFとしてあそこまで完成された映像を作ったのは凄いことだと思わんか？ アメリカからすれば、スプートニクショックの意趣返しだったと言ってもいい。ソ連でタルコフスキーが『惑星ソラリス』を完成させたのは四年後なんだからな。」

「いや、それは分かるんだけどな。映画好きのおっさん達があれば持ち上げるのは分かるんだよ。リアルタイムでその衝撃を味わった人なら。」

「そうだろ？」

「でも、時々思うんだ。それに乗っかって、やたらとあの映画を持ち上げる若い人間もいるだろ？」

「ああ、そういう人間は信用しなきゃならんな。映画雑誌に書かれていることが一から十まで正しいと思ってる連中だよ。」

俺は男が「2001年…宇宙の旅」を個人的に好いているのかどうか先に言質をとってやればよかったと思った。しかし、男の楽しそうな顔を見ると、それもどうでもよくなった。

気づくとレンタカー屋にいた。驚くべきことに、ポスターの道はレンタカー屋の前にま

で伸びていたが、俺も男もそのことを特別に取り立てて口に出すことはなかった。

レンタカー屋のロビーに入ると、「無事故継続3日!」という張り紙がしてあった。

「よっぽど珍しいことなんだろうか。」と俺が呟くと、「1日なことままだあるから、珍しいこととは言える。5が入っているのは見たことがない。」と男が言った。

よく見ると、「3」の部分だけプラスチックの枠が施されていて、要は日数に応じて数字を入れ替えられるようになっていた。

そんなにレンタカー屋に詳しいのなら、初めからここにしてくればよかったのと思った。

男は受付に立っている丸顔の男性スタッフに何やら話しかけに行き、いろいろな手続きを済ませ始めた。

実を言うと、俺は車の免許を持っていなかったもので、なんだか蚊帳の外の気分になって、少し離れたところに置いてあったベンチに腰掛けてそれが終わるのを待っていた。

手近な棚にバスケットボールの雑誌が終わりかけのジェンガみたいな積み方をされていて、俺はその一番上のやつを手にとって眺めた。

表紙はヒューстон・ロケッツ時代のジェームズ・ハーデンだったから少し昔のやつだろう。スポーツには不向きとしか思われないポリュミーな髭がドライブの躍動感を演出せんとばかりになびいている。

俺がNBAにハマり始めたきっかけもこのハーデンで、元々中学のバスケット時代など苦い思い出ばかりであるが、その分を取り返さんとばかりに彼のステッバックを、高校三年生の受験期

の間、勉強などそっちのけで練習したものだ。おかげで第一志望の大学には見事落ちた。

その頃のロケッツはとにかく強かった。シーズン王者の強豪ウォリアーズを相手に最も競り合えたチームだった。クリス・ポールの怪我さえなければ、と今でも夢に見るほどだ。

ハーデンはその後、優勝リングを求めて、ブルックリン・ネッツに移籍し、かつての戦友のケビン・デュラント、お騒がせポイントゲッターことカイリー・アーヴィングと共にビッグ3を形成したが、それも長くは続かず、今はフィラデルフィア・セブンティシクサーズで怪物ジョエル・エンビードとタッグを組んでいる。

スターを放出したロケッツはその他の有力選手も次々に手放した。俺は焼け野原と化したロケッツに今でも縋り付いている。俺を第一志望から落としたこのチームがいつか復興することばかりを夢見ている。

一体どこで間違えてしまったのだろうか。ハーデンを手放したとは言っても、オラディポにウォールにカズンズに、彼が抜けた穴を補えるだけの戦力は確保していたはずだった。しかし、彼ら、トレード戦士も大して試合に出ることさえなく、すぐに他のチームへと行ってしまった。

ハーデンを追いかけて、ネッツやシクサーズのファンに鞍替えするべきだったろうか。

しかし、ハーデン個人というよりも、俺はあの頃のチーム全体が好きだったのだ。いや、あのチームで輝くハーデンが好きなのだ。

俺が見たいのはハーデンが輝く、あの頃のロケッツのチームスタイルで、今のハーデンの、チームメイトに華を持たせようとするプレースタイルはなんだか見えて悲しくさえなる。

しかし、それ以上に、ハーデンはもちろん、クリス・ポールもクリント・カペラもP・J・タッカーも居なくなった今のロケットツを見るのはなかなか辛く、最近はおっぱらGoogleで試合結果を確認するだけだ。

期待の若手もいるにはいるが、グリズリーズのジャ・モラント並みの活躍をするわけでもなく、もう大人しく二番目に好きなマイアミ・ヒートにでも乗り換えようかと思わなくもないが、なんだかロケットツへの愛を試されているような気がして乗り出せず、結局ロケットツの内の誰か一人でも覚醒する日を待ち侘びるばかりである。

しばらくすると、俺にずっと背中を見せていた男がくりりと振り向いて、受け取ったらしき車のキーを人指し指でくるくる回した。

終わったという合図なのだろうが、その仕草の熟れ感がなんだか鼻についたので、黙って見ていると、男はそのままロビーを出て行ってしまった。

俺は棚に雑誌を戻すと、男に続いて、ロビーを出た。

外には俺たちの乗るべき車が既に用意されていた。ポスターの道に停められたそれはファンカーゴではあったが、グレーの地味な見た目のやつだった。

俺はあの涙目を思い出し、慌てて男の表情を確認したが、そこにはどんな感情も浮かんでこなかった。

女性のスタッフから喫煙は禁止だの、ガソリンは満タンにして返せだの、いくつかの細かい注意事項を聞かされて、俺たちは車に乗り込んだ。

男が運転席、俺は助手席に収まった。

「それで？どこに行く？」

俺がそう聞くと、男は言う。

「考えがあるんだ。」

「聞こうじゃないか。」

「このポスター通りを辿って見ないか？」

「悪くないね。」

「それじゃあ、そうしよう。」

もしかすると、この旅はすぐに終わってしまうかもしれないし、分岐に迷うこともあるかもしれない。しかし、道標があるのは嬉しいことだと思う。

男はアクセルを踏んだ。俺は既にエンジンがかかっていたことに何故だか気づいていなかった。少し驚いた。

グレーのファンカーゴはぬるりと動き出した。

そうして旅は次へと向かう。

「赤いのじゃなくてよかったのか？」

俺がそう聞くと、男はハンドルを片手に、少し難しい表情をした。

ポスターの道は俺たちがなんとなく進みたいと思った方向に伸びている。俺にはそれが少し不気味に思われた。

「車のことか。」

「ああ、そうだ。」

必死な音を立てるクーラーが俺をイライラさせたが、止めると死にかねないので、放置するしかない。

男は口から出る言葉を歯の裏でいちいち確かめるように、ゆっくりと喋り始めた。

「赤いファンカーゴな、昔、母親が乗ってたんだ。」

「へえ、似合わずノスタルジーなところもあるんだな。」俺の軽口に男は構わず喋る。

「本当に昔だ。俺がまだ保育園に通っていた頃、よく覚えてる。俺は早生まれだったから、みんなと干支が違ったんだ。みんなは辰年で俺は巳年。それでからかわれた。そりゃ誰だって、龍と蛇だったら龍のほうがいいものな。」

「ふうん。俺は蛇の方が好きだけど。だって龍は存在しない。」

「みんな存在しない方に憧れるもんさ。とにかく、それが悔しくて悔しくて、ファンカーゴで泣いたんだ。保育園からの帰り道でね。母親が運転してた。なんだかそういう思い出って無性に大事にしたくなるもんじゃないか。」

「まあ分からんでもないね。」

「いくらでも思い出せる。俺の涙と鼻水が滲んで黒くなったシートとか、妹がまだ赤ん坊だったから、後部座席にはチャイルドシートがあって、座席の上でうずくまろうとしても、そいつが邪魔で窮屈な姿勢にならざるをえなかったことだとか。運転してる母親は、まあ子供の可愛いむずかりくらいにしか考えてなかったんだろうな。特に何を言うでもなく、泣くままに泣かせてた。」

「酷い母親だったのかい。」

「まさか。普通の母親だよ。なんならいい母親だ。相対的に俺がダメ息子なくらいだ。でもな、一個だけ、どうしても許せないことがある。」

「なんだい。」

「俺の母親は公務員で、まあ要はそこそこ安定した人だった。どちらかというと慎ましやかなことを好む人でね。たまの週末にちょっぴり晚ごはんを豪華にすることが何よりもの喜びだった感じの人だ。だけど、とある時に、具体的には、長年の母自身の勤労のおかげで、ある程度、家計の首が回せるようになった時に、奴がやってきた。」

「奴って？」

「ディーラーだよ。車のディーラー。金の匂いにつられて来たんだ。そして、母はなんの前触れもなく、ましてや俺になんかなんの相談もなく、思い出の詰まった赤いファンカーゴを売りに出して、気づくと、我が家の車は白いメルセデスベンツになった。」

「それは自慢なのか？」

男は吹き出した。先ほどまでの苦い表情が多少は和らいだ。俺は少し嬉しくなった。

「いや、そうじゃない。ベントツと言っても一番下のAクラスだし……いや、何言っても不毛だな。とにかく俺が言いたいのは、だからファンカーゴが懐かしいんだって、それだけのことだ。」

「へえ。泣ける話だね。」

「その台詞は泣きながら言うんだな。」

「だけど、まだ俺の質問には答えてない。グレーでよかったのかって質問にはな。赤くて、底の部分が髭面みたいで、愛嬌のあるやつがよかったんだろ。」

「まあ、どうなんだろうね。仮にレンタカー屋でその色のファンカーゴが用意されていても、俺は大して喜ばなかったんじゃないかな。」

「どうして？」

「例え同じ色のファンカーゴだったとしても、母が乗ってた車ってわけではないだろ？ 結局どっかでそれに気づいて、がっかりするのがオチだと思うな。」

「そういうもんか。」

「そういうもんだよ。思い出との距離感って大切だ。」

グレーのファンカーゴはインターチェンジから高速道路に乗って、それでも相変わらずぬるぬると走っている。時々、追い越し車線から抜かされることがあったが、男は気にもとめなかった。

一度、二階建てのレッカー車とすれ違った。一階と二階に二台ずつ乗せられた車たちはどれも痛ましく破損していた。そのうちの一つは、赤いファンカーゴだった。ボンネットがまるまる剥がっていて、鋼色の内部はなんだかグロテスクだ。思わず、と言うべきか、自分の顔の表皮をそっ

と撫でた。

不思議なことに、高速道路に入ってもポスター通りは続いていた。

俺たちは適当なサービスエリアで休憩をすることにした。車内のクーラーはつけたままにして外に出た。

遮るもののない日光が俺たちを串刺しにし、足下のアスファルトがそいつらを照り返して俺たちにトドメを刺そうとする。

小さな売店に俺たちは逃げ込んだ。少し効きすぎた冷房の風が背中に張り付くシャツの上辺を撫でた。

俺はそこでアクエリアスと小麦色のキャップを買った。男はポカリスエットと紫に反射するサングラスを買った。どちらの買い物も二つ併せて、五百円だった。

「お前はやけに帽子が似合うな。」

ポカリスエットを飲みながら男が言った。

「将来禿げる予兆かもしれない。」

俺はそう返した。

「俺のサングラスはどうだ？」

妄執：いつも、どこまで

「将来目が潰れる予兆があるね。」

男は満足そうな顔をしていた。

喫煙所に入ってタバコを吸った。俺はラキスト。男はセッター。どちらもあまり大学生らしいチヨイスではなかった。

男は本当に感心したという風に同じ言葉を繰り返す。

「しかしお前は帽子がよく似合う。」

「昔からよく被っていたからね。」

俺と男は一緒に煙を吐いた。

「俺の高校、制帽があったんだよ。」

俺がそう言うと男は目を丸くした。

「さようび、そんなところがあるのかい。」

「実際あるんだから、あるとしか言えないね。」

「でもなかなかカッコいいのかもしれない。カツオ君が被ってる感じのやつだろ。」

「ああ、そうは言っても被る機会はほとんどないけどね。」

「式典とかだけのことか。」

「そうだけど、実はそれだけじゃない。」

「なんだよ。」

「登校で学校の正門を通る時だけ被らなくちゃいけない。」

「はあ。せめてそこだけは、って感じか。」

「ああ。そして、正門を通るときは帽子を取って一礼しないといけないんだ。」

「ん？ どういうことだ。」

「つまりだね、通学路では制帽は被らなくていい。大抵のやつは指定バッグの中に入れてるよ。被っても目立つだけだからね。他にも荷物は沢山あるから、大抵のやつはバッグの中で押し潰されて、鏝が真ん中で折れている。正門に通ずる坂を登り始める時に、みんなバッグからぺちゃんこになったそいつをこそそそ取り出すんだ。」

「うん。そこまでは分かる。」

「で、正門の前には白髪の生活指導教師が立っていて、そいつと目が合うと帽子を被る。それを見ると教師は頷く。それで第一段階クリア。ここで制帽が無かったりすると、鉄拳制裁だ。反省文のおまけもついてくる。」

男は面白そうに俺の話聞いている。楽しい時間だった。俺が三年間で反省文を通算十二枚書いたことは黙っておく。

「次に、いざ正門の真正面にたどり着くと、帽子を取って一礼するんだ。これを忘れたり、うっかり帽子を被ったまま一礼したりすると、ちょっと甘めの鉄拳制裁だ。これについては反省文はないけどね。あ、でも一礼拒否して反省文を書かされたやつはいた。若気の至りってやつだろうな。ともかく、その後、帽子をバッグにしまう。これで第二段階クリアでやっと登校完了。式典とかがない限り、うちの学校の生徒が一日で帽子を被っている時間は大体十五秒だと言われている。」

る。」

「ははあ。なかなか馬鹿らしい校則だね。」

「全くだよ。ちなみに、うちの卒業生の男性の内、約七割が禿げている。在校時、全校同窓会のスタッフの手伝いをした折に教えたんだ。結局、長時間制帽を被るのは屋内で行われる式典の時だけだからね。屋内で帽子を被ると禿げるって言うだろ？ たまにある屋外の式典では甘ったれるなって、被ってる方が怒られる。特に日差し強い日に限ってね。毛根を虐めることに特化した制帽なんだ。卒業式なんかで来賓席を見るとなかなか壮観だよ。まるで砂丘だ。不毛な地がどこまでも連なっている。全く制帽のおかげだね。」

男はひとしきり腹を抱えて笑った後、ある程度落ち着きを取り戻してこう言った。

「しかし、そんな悪習、なんで無くならないんだろうね。」

「一度、廃止になったこともあるらしいんだ。俺が入学するちょっと前に。だけど、OB会かなんかから圧力がかかって、生徒たちのスマホ学内持ち込みを容認する代わりに復活したんだと。」

「アホの極みだな。そこまでして未来ある若者たちを禿げさせたいのか。」

「それ以降も廃止の話は生徒総会で毎年持ち上がったけど、学校側は伝統だからの一点張りだったな。」

「愛校精神ってやつかい。」

「主にOBサイドのね。」

「愛校精神自体は素晴らしいと思うけどね。それを下の世代に押し付けちゃ敵わん。」

男が苦々しくそう吐き捨てたのを最後に、俺たちの間に会話はなくなつた。

どちらが言い出したともなしに、俺たちは燃えさしの煙草を灰皿に捨て、グレーのファンカーゴにいそいそと乗り込んだ。

それはもしかしたら、ただ単に、話にオチがついてひと段落したというだけのことだったかもしれないが、どうも俺には、他の要素もあったように思われる。

ポスター通りはまだまだ続く。

ファンカーゴがその中をぬるぬると走る。

しかし、俺には一つの懸念があった。

それは、もしかすると、俺の生まれ故郷、九州島の最北端に辿り着いてしまうかもしれないということだった。少なくとも、このまま高速道路を北上していけば、いずれはそこを通過することになる。

もしそこで、ポスター通りが高速道路を降りてしまったら、もしくはその手前でポスター通りが終わってしまったら、男は心得たとばかりにかの地へと下るだろう。

俺としては、それはぜひ避けたいところだった。別に物凄く嫌な何かがあるわけでも無かったが、そもそもこの旅は俺たちの好きなものを探そうとする旅であるわけで、そんなものが生まれ故郷で見つかったとあっては、チルチルミチルでもあるまいし、俺にはとても耐えられない。

そこで俺は暫くぶりに口を開いた。俺は帽子を被っていて、男はサングラスをしていた。

妄執：いつも、どこまで

「君は、自分の好きなものを探しているんだろう？」

「好きなものの総体をな。」

「このまま行って、見つかりそうか。」

「分からないね。」

「ポスター通りを辿るのが果たして正解なのか？」

「それもそうなんだが、しかし、俺が行きたいと思った方向にポスターがあるから仕方ない。」
それはやはり、俺にも覚えのあることだった。

びゅんびゅんと車窓を過ぎ去るポスターたちを横目で見やると、フランスの一昔前の映画が目立った。トリュフォーとかゴダールとか、それからもう少しさかのぼってブレッソンとか、その辺りのやつだ。それから時々、ベルイマンやフェリーニやヒッチコックなどがいた。

「少なくとも俺は、ここらへんの映画はあまり好きではないな。」

「俺だってそうだ。ヒッチコックは別だけどな。そもそもここいらの奴らは、俺たちなんかに好かれようとして映画を作っていないだろう。」

全くもって男の言う通りであった。

いつだったか、とある友人がゴダール映画の異化効果なるものについて滔々と語っていたことがあったが、俺には今ひとつ飲み込めないところがあった。

「自分が映画を観ていることを観客に意識させる効果」と友人は言っていたが、その友人自身もそう言った後に肩をすくめていた。

異化効果。だからなんだと言うのだろうか。

自分が人生を生きていると意識しないで人生を生きる人間が大半であること、そしてそれが何よりも上手くやれる方法であるということは、もはや現代の常識とも言える。

自覚があることが足枷以上の何になると言うのだろうか。すり足で歩み、ささいな隆起沈下ぬかるみ土煙にさえつまずき、見上げた青空は目も覆いたくなるほどだろう。

それでも足枷を外せない、離せないことはマゾヒスト以外の何であるのか。俺にはどうも答えが見出せない。

通りいっぺんの顔をしたジャン・ポール・ベルモンドが連続で何人も、車窓を通り過ぎていく。アラン・ドロンの方が好きな顔だなと口の中だけで呟いてみた。

しかしよく考えてみると、俺はアラン・ドロンの主演映画を観たことがなかった。観ようと思うことをいつまでも続けていた。

全く、俺はベルモンドの顔が好きでないばかりであった。自分で考えてみるよと言わんばかりのベルモンドのすました顔が、である。

『勝手にしやがれ』ってさ、なんで逃走にオープンカーばかり使うんだろうね。』
気づくとそんな言葉が口から出ている。

「そうだったっけ？」

「いや、そうじゃない時もあるけど、やけにオープンカーが多い気がするんだ。あんなの逃げには不利なものじゃないだろ。」

「粹ってやつなんじゃないか？」

「それは分かるんだけどさ。その粹ってのは命や人生よりも大事なもんなのかね。」

「さあ？ でも、命や人生はしっかり固執すると、生きていけなくなる気がする。」

「どうして？」

「どうしてもなにも、そんな気がするだけだよ。命なんて、あんまり大事にしすぎないくらいがちょうどいいと思わないか？」

「でも死ねば終わりだ。」

「そうだよ。死ねば終わるんだ。死ぬ一瞬と、それまでの人生と、どちらが大事なのかって話じゃないか。」

俺は返す言葉が見つからず、黙りこくる。

少し車内が寒くなってきた、男は冷房のスイッチをぶちりと切った。

「お前は本当に死ぬその瞬間に、何かが待っていると思うか？ ドラマティックな何かが。」

「そうでも思わないとやってられないじゃないか。死ぬその瞬間のほとばしりの一滴まで、俺は生きたい。」

「そう言えば立派だけだな。だけど、それは、待望論と一緒だと俺は思うね。待ち侘びるだけ待ち侘びて、生を貪るばかり。お前には自分が生きているという自覚がないんだ。」

「随分なことを言うね。」

ベルモンドがこっちを見ている。異化効果だと？ 勝手にしやがれ。

「仮にだけどさ、赤道直下をぐるりと一周する高速道路が建設されたとするだろうか？」

男は唐突にそんなことを言い出した。また軽口を挟んでやろうかとも考えたが、いまいちそんな気分にはなれなかった。

俺は黙って聞く。

「そんなどこにも降りないで、そこを休みなくぐるぐる回り続けるんだ。他に車はないことにしよう。ちょうど今みたいな感じだ。赤道直下だから永遠に熱い。俺たちはその内、冬なんて忘れてしまうかもしれない。」

確かに、少しオレンジ色の光が混じり始めた車窓から、他の車は見えなかった。男はハンドルから片手を離して、指を折りはじめる。しかし、それから始まった計算に指が役立つとはあまり思えなかった。

「地球一周がちょうど40、000キロらしいから、計算しやすいように時速1000キロで走ったとして、400時間走るのか。んで、一周ごとに速度を上げていく。次は時速2000キロで走って、大体200時間。その次は時速4000キロ、この時点でファンカーゴの出せる限界なんかとうに超えているけど、気にするもんか、800、1600と上げていく。そうやって倍々に上げていけば、いつか光の速度を越えるだろう。そんなことも気にせずぐんぐん加速する。俺たちは火の玉になる。夢と希望を乗せた火の玉だ。」

男はそう言いながらアクセルを踏み込む。

ポスター通りの中をファンカーゴが疾駆する。

頭の中がぐるぐると回る。ぐんぐんと加速する。

脳みそが回っているのか、脳髓が回っているのか、はたまた頭蓋骨が回っているのか、何も分からぬままに、速度だけが上がっていく。

「マツハの範疇にも収まらないほどに速度が上がる。阻むものはない。ただ走る。周りはソニックブームでズタズタだろうね。次の一周で道ごと破壊されていないのを祈るばかりだ。しかし、その祈りさえ、いつからか追いつかなくなる。それでも速度は上がり続ける。限界など捨て去る。ただ加速する。地球の重力も空気抵抗もタイヤの摩擦も、あらゆるものを無視する。なんだかそうしていると、どこか遠い所に行けるような気がする。そうだろうか？ 仮定も限界も置き去りにして突き進めば、次元さえ超えたどこか遠くに行けるような気がしてくる。」

ファンカーゴも加速する。法定速度はとうに超えている。しかし、男は速度を緩めない。周りに他の車はない。ボンネットの中のエンジンの振動が俺たちにまで伝わってくる。

「だけどだ。」

その瞬間に男はブレーキを踏んで一気に減速した。俺は前のめりになって慣性に押し流される。フロントガラスに頭を打ちつけそうになるのをぎりぎり踏ん張る。

ファンカーゴは長い制動距離を滑って、ぎゅるぎゅると汚い摩擦音をあげる。車窓には白い煙がちらちらと見える。映画のカースタントなんかで見えるやつだ。

こういう時、走馬灯の一つでも駆け巡ってよさそうなものだが、俺の目に入るのは運転席の男の鬼気迫る表情ばかりであった。口は固く結ばれているが、その目は笑っているようにも泣いて

いるようにも見えた。

足の踏ん張りが効かなくなってきたぎりぎりのところでファンカーゴはようやくよく止まった。

俺は男を睨む。

男はやっぱり前のめりになっていて、ハンドルにその爽やかな顔を派手に押し付けて、クラクシオンが鳴り響く。

そして、男は笑う。からからと笑う。

クラクシオンの音の上でタップダンスをしているような、軽やかな笑い声だ。

男は言う。

「そうやってたどり着いた先に何が待っているか分かるか？」

「警察だろ。」

「分かっているじゃないか。何も変わらねえんだよ。ただこの世界があるだけだ。」

いつのまにか日が暮れ始め、俺たちの目の前を伸びる道を挟む、山と山との狭間のど真ん中に太陽が立ちほだかる。

俺たちは目を細めてそいつを睨む。

いつの間にか脳みその回転もびったりと止まってしまっている。俺は助手席に深く埋まり込む。

「待ってても仕方ない。生きている限りは。」

男はそう言う。

ファンカーゴはポスター通りの中央を再び発進する。

「もうそろそろ、高速道路を降りる頃か。」

俺はそう言ってみる。

思えば、取り返そうとするばかりの人生であった。

嫌いなものばかりの人生だ。

何よりも一番、自分が自分であることが嫌いだった。

自分で自分ばかり否定して、その癖、自分を否定し得るものを、回りこんで否定しようとはばかりしていた。

いつから歪んだのか。

生まれた時か。

そんな気はするし、それとは別に、生まれる前から、もしくは後から、自分は歪んでいた気もする。

その以前にも、それ以降にも、自分が歪み得る要素はいくらでもあったし、それらを丁寧の一つ一つあげつらって、自己弁護ばかり図る自分が何よりも嫌いだった。

自分を否定し、そのバランスを取るように自分の外をも否定し、残るは世界の外側ばかり。

だからインターネットだの小説だの映画だのNBAだの遠い世界の事柄ばかりにハマり込んだ。

気づけば内側には何もなくなり、それを取り繕うように、さも中身がある風に、外側を否定し続けて生きてきた。

もうそろそろ、地に、現実足をつけて生きる頃か。

「あの事件を、覚えているだろうな。」

男は言う。

ああ、覚えているとも。忘れられるか。七月八日、七夕の次の日に起きた銃撃事件。

俺はその日、友人二人と今夏アニメの一話鑑賞会を催していて、「リコリス・リコイル」には並々ならぬ期待を抱いていたものだ。

そんなささやかな一時をぶち壊した銃撃事件。

俺たちは揺らいだ。

まず何よりも、撃った人がとか、撃たれた人がとか、ではなく、現代の日本で銃が人に向かって撃たれたという事実揺らいだ。

そして、情報が雪崩のように次から次へと飛び込んできた。その背景が段々とつまびらかになっていく。それらは目を覆いたくなるものばかりであった。

「お前は自分が幸せだと思うか。」

男はそう言う。説教くさい響きではない。どこか自戒めいた言葉だった。

「幸せになれと言うんじゃない。幸せだと思えと言うんでもない。お前より幸せじゃない奴がいるんだから我慢しろと言うんでもない。」

男は指を開いたり閉じたりする。そこにかつて何があったのか、もしくはこれから何が収まるのか、俺は知らない。

「あの事件に際して、いろんな奴が現れた。いろんなものを信じているやつだ。世論、倫理、

道徳、データ、カルト、陰謀論、誰もが何かを信じていた。」

辺りは暗くなり始めた。遠い山の端から太陽が退散しようとしている。

「何を信じるのが正解かなんて分からない。別にカルトや陰謀論を支持するつもりもないが、かと言って、世論だの倫理だのが必ず正しいとは言い切れない。裏切られることだってしばしばだ。頓珍漢なものを信じていた方が、よっぽど健康的なのかもしれないと思う時もあるさ。」

ファンカーゴの緩いエンジン音だけが車内に響いている。男の声はどこか遠いところから聞こえてくるようだ。

「お前は何を信じる？ 何を信じれば俺たちは幸せになれる？」

有史以来、いや、もしかすればそれ以前から人間は常に何かを信じてきた。

元来、世を制してきた自然が神の姿に置き換わり君臨した。そうして散々に畏怖を集めた神がやっとこさ死んだと思うと、かたやイカロスの如き独裁者たちは、失墜するその日まで蠟の翼を広げる。

人類はそういったものを信じ、縋り、そうして生きてきた。

俺たちは、人類はそうして裏切られ続けてきた。

何よりも、人類が人類を裏切り続けてきた。

今、俺たちは何を信じるべきか。

この世が資本主義だと言うのならお金か。お金だろうな。しかし俺の財布はすっからかんだ。カミなどない。

何もわからぬまま、何も信じられぬまま、俺は暗闇の中にただ立っている。

生きている自覚とは、何かを信じることに起因するのかもしれないと、ふと思う。

「まあ、そんなもんが分かれば、こんな苦勞はせんわな。」

男はいつの間にか、いつもの調子に戻っていた。太陽はすっかり沈んでしまっていた。

俺たちは昼過ぎに停まったサービスエリアよりももう少しばかり大きな、ほとんど九州島の最北端ともいうべきサービスエリアにいる。

かつて源氏と平氏が争い、武蔵と小次郎が決闘をし、長州藩とイギリスが睨み合った関門海峡を望む最北端である。

これから先、高速道路を降りるのか、もっともっと先に進むのか、俺にも、その隣に立っている男にも分りかねていた。

ただ、ポスター通りは高速道路を伝って、まだまだ先に伸びていた。

このサービスエリアの頭上には大きな白い橋がかかっている。九州と本州に渡る橋である。その上にもポスター通りがあった。

「どうするよ。」

俺は言う。

夜の海と言うには少しばかり騒々し過ぎる関門海峡が眼前にある。

俺たちは潮風に錆びた鉄柵に寄りかかって煙草を吸っている。キャップもサングラスも、既に

外して車内に置いてきていた。

「どうするも何も、こりゃもう際限ないな。必要とあらば、このポスター通りは海さえ渡る気がする。」

「しかし、旅に出ると大きなことを言った手前、すごすごと帰るのもなんだか味気ない。」

「だけどなあ、レンタカーは二十四時間しか借りれないし。」

「そうだった。旅に出ると言って、レンタカーを借りる時点で間違っていたわけだ。」

「しかしまあ、俺たちは旅に出たいお年頃じゃないか。」

「人生は旅みたいなものだからな。」

俺たちは笑う。やるせない笑いとも諦めの笑いとも自虐の笑いとも違う。どこか吹っ切れた笑いだ。

ポスター通りはあくまで行き先を決める手段の一つであって、目的ではない。そのことは二人とも分かっていた。

「まあ、いいや。今日はここでうどんなでも啜って、星でも見て、そうして明日の朝帰ろう。なんだか疲れちゃった。」

「それがいいな。これもいい経験だよ。旅って明確な目的、というか目的地がないところなるんだって分かった。」

「好きなものの総体ってのは確かに曖昧すぎたのかもな。」

「人生も同じだよ。曖昧な目的じゃ路頭に迷っちゃまう。」

「全く、人生は旅とはよく言ったもんだ。」

「クサイな。」

「今更だろ。」

それから俺たちは冷房のカビの匂いが香るイトインでうどんを啜った。他には親子連れとカップルが一組ずついるだけだった。屋内からでも関門海峡の波の音が聞こえて、ほのかに流れるJPOPソングのジャズアレンジを奇妙なテンポで引き立てている。

うどんの麺は妙に伸びていて、先が細くなっていて、無味無臭で、それから、蕎麦の切れ端もスープの中に落っこちていた。

俺たちはそれらをいっしょくたに飲み下す。スープの温度が胃の奥に落ち込むと、箸は際限なく進むようになった。

「あら、雨だ。」

そう言いながらうどんを啜る男の、もう片方の手にはスマホがあって、天気予報のページを俺に見せてきた。

そこには確かに、これから朝までたっぷりと降られることが示されていて、陰気な顔をしたてる坊主がこちらを見ていた。

「車内泊で寝られるかな。」

俺が不安を口にするのと、男は鼻を鳴らした。

「いや、そんなことよりも星だよ。星が見れない。」

そう言いながら大袈裟に頭を抱える。俺はそれに笑いを堪えられない。

「君がロマンチストだったとは知らなかった。」

「別にお前と見たいわけじゃないさ。」

なんだか悔しくてどうにか言い返そうとするが、男はその前に手を合わせて立ち上がった。

「雨が降る前に少しでも見ればいいがな。」

俺もつられて立ち上がる。返却口にトレーを返して、再び屋外へ出た。

外気は一段と冷たくなっていた。

海からの潮風は俺たちの体を掠めながら、夜の闇へと飛び込んでいく。俺たちの耳元でぶおおと叫びながら、潮の香りだけを残していった。

空を見上げると、分厚い雲に覆われていた。黒と灰色のグラデーションで雲が少し薄くなっているところが分かるが、その薄い部分でさえ光を通すことは許してくれず、月の在処さえ判然としなかった。

「こりゃダメだな。」

そんな俺の言葉も聞かず、男は入り口のすぐそばの駐車スペースに停めていたファンカーゴの屋根へと這い上がろうとしている。

「昔、遠くの何か、そうだな、花火を見る時なんかはよくこうしていたよ。親父が先に登って引っ張りあげてくれてね。今や俺の方が身軽に飛び乗れるが。」

男はファンカーゴの上から俺を見下ろしてそう言った。レンタカーに登るのは出来ればやめた

方がいい気もしたが、今更無粋なことを言うつもりもなく、俺は手を伸ばした。

男がその手を掴む。

「ぐっ、重い……。」

男に引っ張られながら、自分で登った方が早いことに気づいたが、男は力づくで俺の手を掴んで離さないで、されるがままにして置く。

三十秒ほどたっぷりかけて、俺はようやく屋根の上へとたどり着いた。手首がじんじんと痛んだが、風に優しく撫でられて、ゆるゆると感覚は消えていく。

「お前が女だったら最高なのにな。」

「絶対重いとは言うなよ。」

そう言って笑い合う。

鉄柵に沿って並んでいた街灯がぼつぼつと消え始めた。街灯の奥にいた暗闇がこちら側に迫ろうとする。

しかし、俺たちの目の前にあるイートインの建物にはまだ灯がついていて、「空気の読めないデカ蚩」と男は揶揄した。

俺はファンカーゴの屋根の上に寝そべっていた。

「俺、蚩は嫌いだ。」

男もそう言いながら屋根に寝転ぶ。

「どうして？ 綺麗じゃないか。目の前のそいつはともかく。」

「いや、綺麗な方がいいんだけどな。俺の地元でさ、蛍の養殖をやってんのよ。」

「あー、環境美化的な」

「そうそう。環境美化的なやつだよ。」

「いいことなんじゃないの？」

「いいことなもんか。その活動を誇示するために年一回、夏に蛍祭りってやるんだよ。出店とか並べまくって、環境美化をアピールしながら環境破壊も同時にやっちゃう大層な祭りだよ。次の日の朝なんか悲惨だぜ。そこら一帯、ゴミだらけになるんだから。」

「そりゃ大層な祭りだ。」

「毎年観測できる蛍も減ってる。もう末期だろうな、あれは。というかそもそも、前提が間違ってると思わないか。蛍が住める川にしようって言うなら分かるけど、蛍が住んでる川に無理やりしちゃうんだよ。養殖ってそういうことだろ？ 元来の生態系がぶっ壊れるかもしれないのに。」

「エゴだなあ。」

「まさにだよ。」

そんな会話をした。それは結局、蛍じゃなくて人間が嫌いなだけなのではとも思ったが、強いて言いはしなかった。

気づくと、手の甲に一つか二つ水滴がいつのまにか落ちていて、雨が降り始めたことを知る。時々、擬音通りの「ぽつ」と言う音がどこから聞こえてくる気がした。

しかし俺たちは動かない。動こうとしない。

ただ黙って曇り空を見上げる。星は一向に見えなかった。俺の頬に一滴、大きめの雨粒が落ちてきて、目を瞑った。

そうしていると遠くの海だけがそこにあるようだった。潮騒と磯の匂いだけが俺を取り囲んだ。さながら、海の上のボートで寝ているよう。穏やかな洋上に俺はいる。

だんだん俺の体に落ちこちる雨粒が多くなって、いよいよ本降りになってきたようだが、俺は動かない。男も動く気配はなかった。

本当に耐えられなくなったら、車内に戻ればいい。少なくとも風邪を引くより前には。

そんなことを考えている時、俺は気づいた。「ぼつ」という雨の音に紛れて、「こつ」というもう少し硬い音が聞こえてくることに。

雨よりも、もう少し硬いものが地面に当たる音だ。

俺は起き上がってあたりを見回す。男は動かなかった。俺も男も雨でぐっしょり濡れていた。暗闇あたりはよく見えなかったが、音の正体はデカ蜚の目の前にいたから、すぐ分かった。

逆光でほとんど影のようになっていたが、それはなんてことはない、人間だった。レインコートを着て、杖をついている。

しかし、その杖のつき方からして、おそらくその人影は盲目の人であるとわかった。

自分が歩くよりも少しばかり前に杖を突き出して、そこに何かないか探るような杖のつき方だったのだ。

俺は男の肩を揺らして起こそうとする。もしかすると、何かしらの緊急事態かもしれなかった。

迷子なのか。しかし、こんなところで迷子というのは少し考えにくい。でも、そうでなくても、何かしらのトラブルでここにいるのかもしれない。

男は目を瞑ったまま、起きようとしなかった。俺は腹立たしくなって、一人でその人影のところにこうと、ファンカーゴの屋根から飛び降りようとした。

しかし、俺はそれができないことに、その寸前で気づいた。

その人影の後ろにもう一人分の人影が見えていた。

「お父さん、待ってよ。」

その人影は若い女性の声でそう言った。

「待てんよ。お前がぐずぐずするからだ。」

盲目の人影は快活にそう言う。言葉と距離感からして、親子のようだった。

そうして二人分の人影は関門海峡を望む鉄柵の道連れ添って歩いた。娘の方は傘をさしていて、その中に父を入れようとすが、父の方はさも、入れられてたまるかという風に杖をぶんぶん振りながら早足で歩く。

そしてその中央、海が開け、本州を望み、空を仰げる、最も見晴らしの良い位置に二人は陣取った。

父の方の人影が言う。

「綺麗だろ。」

「……うん、綺麗。」

「馬鹿野郎。気を遣ってんじゃないよ。曇ってることくらい俺でも分かってる。」

「でも、対岸の明かりとか……」

「ほう。今は灯りがあるのか。俺の目が見えた頃はそんなもの無かった。發展してるんだな。」
盲目の父はそう言うが、対岸に灯りなどない。真っ暗な塊がほんのりと見えるだけだ。

娘はそれ以上、何も言わない。

「まあいいや。ともかくだ。約束を果たそう。俺に見えて、お前に見えないものがあると、証
明しよう。」

「うん。」

娘は小さく頷いた。父は空に指を伸ばす。

俺は何が始まるのか気になって耳を澄ます。

「まずあそこにあるのが、ベガだ。」

父は曇り空の中央を指差してそう言う。もちろんそこにベガなどなくて、俺はつい目を凝らし
てしまったのが恥ずかしくなった。

娘は何も言わずに指差された方角を見ている。

「そして、あっちがアルタイル、こっちがデネブ。そいつらを結べば夏の大三角ってやつだな。」
父の指が指揮者のように滑らかに動く。慣れた手つきだった。

「見えるか？」

「ううん。曇ってて何も見えない。」

「そうだろう。だが俺には見える。」

雨が一段と強くなって、二人の声をかき消そうとする。俺はもっとよく耳を澄ましてみる。

「あると分かっているから見えるんだ。曇って見えなくても、網膜が潰れて見えなくても、あると分かるから見えている。」

「何それ。哲学の話みたい。」

娘は笑いながらそう言う。父の声は少しばかりの熱を帯びてくる。

「いいや。哲学じゃない。事実だ。実際、あの雲の向こうには夏の大三角があるんだからな。」

お天道様の明るい昼間にだって、俺には見える。なあ、見えるものばかり見てもしょうがない。しょうがないんだ。だから、ありさ、分かるだろ。お前ももっと——ばかり——つまりだな——

だから——あの男——大丈夫——分かって——」

それ以上は雨音に紛れて聞こえなかった。

天から落ちる雨粒を一手に引き受ける関門海峡は、やはり、夜の海と言うには少しばかり荒々しい。

俺は流石にこれ以上いると風邪をひいてしまうと判断して、いよいよ、目を瞑ったままの男を起こしにかかる。

しかし、今度は、思いのほかすんなりと起きてくれた。

「奇妙な夢を見た気がする。」

目を擦りながら男は言う。

「どんな夢だい？」

「そう簡単に形容できちゃ、奇妙とは言わないだろ。でも、一つだけ覚えてることがある。」
「なんだよ。」

男は口角をくいっと上げて、目線だけで俺を見る。

「お前が俺のことをお前と呼び、俺がお前のことを君と呼ぶんだ。」

「そりゃ確かに奇妙な夢だ。」

男はやっとこさ起き上がり、ファンカーゴから飛び降りる。

「おい、俺も君に一つ奇妙なことを言ってみよう。」

俺はそう言った。男は振り返る。

俺は先ほどまで盲目の人影が差したあたりに手を伸ばす。その先に二人の影はもうなかった。

「あれがベガだよ。」

男は振り返る。そして笑った。そこには曇った空だけがある。

「確かにベガはあの方角だよ。」

男は濡れた髪をかき上げながらそう言った。どうやらあの老人は間違っていないかったらしい。

「さあ、寝よう。どうせなら明日はちょっとくらい観光して帰ろう。あの橋を渡って、魚を食おう。鮮魚だぜ。早く起きればそれくらいの時間はある。それからポスター通りを辿って帰ろう。くそつたれの無限ポスター通りをよ。」

(文学部文学科四年)

Lへの憧憬

植山 和哉

仰向けに寝そべっていた。僕が最後に最初に見た景色はひどく澄んだ真っ青な空だった。そのくせ、空の左側は真っ赤に燃えてにじんでいる。少し肌ざむかった。そんな気がする。

今日も僕は爽やかな風が吹くこのビルの屋上にいる。

なあ、レア。いつか君に会ってみたい。この青空をバックにして、きっとお互い屈託のない笑顔で新しい人生のことをわちゃわちゃと話せるはずだ。

僕はそれまでここで待っていようと思う。その日を夢見て、君とのことをここで思い出している――。

*

あの頃のことは今でも鮮明に思い出せる。寒い季節の中、僕は特に目標もなく、ただ日々を自

墮落に浪費していた。そんな時だった、レアに出会ったのは。目を閉じると当時の記憶が想起されてイメージが流れ始める。さあ、あの頃にかえって君とのことを追憶していこう。

子供の頃は大人だなあと感じていた大学生も、実際三年生になってみるとまだまだ自分はガキだなと思った。いや、大人な考えを持っていてる人もいるんだろう。でも通信制を選んだ僕には他人と比較する機会があまり身近になかった。バイトもしていないし、グダグダ日々を過ごすだけの引きこもりがちな無能人間。それが今の僕だ。知能はある程度遺伝するってどっかの賢い人が言っただけだったっけ？本当だとすると僕は完全にその賭けに負けていた。

父は天才だった。今や全世界的に広がるメタバースの一つであり最大の市場規模を誇る「アイバース」の創設メンバーの一人だった。アイバースでは日常に必要な物は全てそろう。アイバースの中にいる自分の分身Ⅱアバターで買い物をする、決済はアイバースで完了し、遅くとも次の日には商品が届くし、銀行や役所などの行政サービスや様々な娯楽も含めて全てアイバースで行われるようになった。アイバースでのみ仕事を行う人も少なくないし、プライベートもアイバースにどっぷりな人ばかりだ。そりゃそうだよな。VRヘッドセットから見たアイバースはリアルと見まちがうレベルだし、没入感がハンパない。まさにもう一つの世界がそこにはある。

僕が小学生の頃に母を病気で亡くしてから父は変わった気がする。寂しさから逃れるためなのか、父はメタバースの研究・発展に没頭していった。仕事は相当忙しかっただろうに、休日には

よく僕との生活をビデオで記録してVlogを作ってくれていた。そして、アイバースをローンチした後、父もまた病気で亡くなった。そこからアイバースの発展には父の共同開発者である周さんが後を引き継いだ。周さんは僕が小さい頃から知っている。今でもしょっちゅう家に来てくれて、何かと僕の身のまわりの世話をしてくれたり色々気に掛けてくれている。父の遺産と周さんの助けがあって今の僕は生きていける。とまあ、こんな具合に自宅警備員がここに一人誕生した訳だ。

周さんもまた天才だ。アイバースでのUXを極限まで高めるために、人間の脳の信号を直接アイバースに繋げて、完全にストレスフリーのフルダイブ技術を開発しているらしい。そして、その技術がまもなく実装段階なのだそう。つまり、アイバースでもリアルと同じように違和感なくアバターを通じて自身の体を操作できるようになるらしい。いや、操作というよりも、むしろ自分の体をそのまま動かしていると表現した方がいいのかもしれない。正直、ここまでくると凡人代表の僕には何が何だかわからない。大人しく周さんみたいな天才が開発した文明の利器を活用するでしょう。

「周さん、また仕事してんの？ 家に来た時ぐらいゆっくりしてくれたりいいのに」

午後八時半。外は寒いのにわざわざ今日も家に来てくれて身のまわりのことをしてもらった分際が、どの口が言っているんだろう、と自分でも思った。大学生の一人暮らしには贅沢すぎるLDKのマンションの一角に住まわせてもらってるし、物欲がほとんどない僕にとっては毎日

アラブの石油王の気分だった。ダイニングテーブルでパソコンをカタカタ鳴らし続けている周さんはメガネに軽い口髭がよく似合っている。確か、父より三歳年下だっけ。

「いやぁ、仕事が趣味だからさ。パソコンを触っていると落ち着くんだよ。気にしないで」

「ふーん。やっぱ天才は違うわぁ」

リビングのソファで横になりながらスマホを片手でいじっている僕とは搭載している脳の種類が違うんだろう。

「ところで創くん。最近どうなの？時間を持って余してない？時間があると何かと考えてしまうものだから、何かあったら何でも言ってね」

天才ならパソコンを打ちながらも、僕の生活面だけじゃなく、精神面までケアすることが可能なのだ。

「んー、まあヒマっちゃあヒマかなあ。かといって何も悩んでないから大丈夫だよ」

実はヒマっちゃあ程度ではなく、完全に暇なのだ。大学のことだって自分のペースでやれるし、バイトもしていないのだから。

「じゃあさ…。創くんにつ頼み事があるんだけど、いいかな？」

少し張りつめたような、あるいは思い切ったような空気が周さんの言葉から感じられた。僕に頼み事なんて珍しい。

「ん？なに？」

周さんがパソコンの画面から目を離し、こちらに体を向けて前屈みになり肘をひざに乗せて手

を組んだ。一瞬反射したメガネのフレームの光が、今までスマホの画面に吸い取られていた僕の意識にカットインした。

「実はね、アイバースで展開する新しいサービスを始めようとしているんだけど、試験運用として事前に創くん体验到してもらえないかなと思っっているんだ」

ほう。

「へー、どんなやつ？」

僕もソファから上体を起こしてスマホを脇に置いた。

「ジョハリ、というサービス名でね、AIが人間とコミュニケーションをとるサービスなんだ」

僕は最初、周さんにしてはありきたりなサービスを始めるんだなあ、と思った。

「AIと人がコミュニケーションをとるツールなんて前からあるじゃんか。それとジョハリは何か違いがあるの？」

周さんは表情を少し穏やかにして続けた。

「これまでのAIは単にプログラムに従って、数ある選択肢から適切な返答をしていたに過ぎない。しかし、ジョハリのAIは自ら考え、自分なりの言葉で人と対話することができる。そして、人との触れ合いのなかでAI自身がその個性を深めていくことが可能なんだ。例えば、従来の相談型AIなら、必ず人を癒してくれたり元気づけたりする言葉が返ってくる。しかし、ジョハリのAIは状況をかんがみて、時には厳しいメッセージを返してくるかもしれない」

なるほど、これまでとはレベルが違うってことか。

「より人間に近づいたAIってこと？」

周さんはうなずきながらニコツとした。

「そうだ。ほとんど人間と同じだと考えてくれればいい。さらには、それぞれのAIに適したアバターや自然な声を結びつけることで、将来的にはAIベースで人間とAIが共存できる社会を作りたい。今回、創くんに体験してもらいたいのはその第一段階ってところかな」

最初の印象とは打って変わって、なんだか面白そうだ。

「すごいじゃん。その体験って、具体的に僕は何をしたらいいの？」

僕は最新技術に触れられると思ってすでにノリ気だった。

「スマホに試験用のアプリをインストールしてもらって、テキストメッセージをやりとりしてもらいたい。ただそれだけだ。何も難しいことはない」

ここに暇人には最適な仕事が舞い降りてきた、と思った。

「不具合なんかがあると周さんに報告したらいいってことだね。オッケー、やらせて頂きます。まあでも僕なんかがつとまるかなあ」

周さんは安心したように微笑んで言う。

「すでに技術はかなり高度なレベルに達していて、ユーモアも含めて自然なやりとりができる。普通の人と比べても遜色ない。心配ないよ、君はうまくやれる」

「けどこんな大事な仕事、僕なんかでいいの？」

周さんは僕をまっすぐ見て言った。

「創くん。君にしか頼めないんだ」

*

初めてレアと話した日のことを覚えている。特にお互い緊張していなかったと思うけど、それはテキストだけでやりとりしていたからかな、それとも、初めから波長が合っていたからだろうか。僕は後者の方だと思うんだけど、君はどう思うだろう。このビルの屋上で一人、君との思い出を巡らせていると色んなことを話したくなってくる。この件も直接君と会って確認したいことの一つだ。

試験用のアプリには「窓」という名前が付けられていた。インストールすると「窓」の一文字しかない小さな正方形がスマホの画面に張り付いた。周さんは簡単な説明だけすると「友達感覚でやってくれたらいいから」と言っ、すぐに帰っていった。細かい事を考えても仕方ないし、新しく買ってもらったゲームをプレイするのを抑えられない子供のような感覚で早速やってみることにした。

アプリを開くと画面の左上に「Red」と相手の名前が表示されていた。僕のメッセージは画面右側に、相手のメッセージは左側に吹き出し状で表示されて、会話が掛け合いの様に流れていくっ

て言ってたな。テキストを打って送信してみる。

sou <はじめまして。創といいます。宜しくお願いします>

…三十分程度待ったが音沙汰なし。(周さん、大丈夫かよこれー)とAIに放置プレイをかまされてるのかと心配になっていたところ、スマホがメッセージの着信を告げた。

rea <はじめまして、レアです。こちらこそよろしくおねがいします>

おお、すごい。すぐに返す。

sou <女性ですか？>

rea <はい、そうです。大学二年です>

ちょ、設定細かくない？しかも若い。僕より一つ年下の設定ということになる。天才は遊び心も忘れないのか、と周さんの偉人っぷりに脱帽した。まさか他にも現実的な緻密な設計がなされてるのかなと思って気にせず他の具体的な質問も試してみた。

sou <そうなんです。身長はどれくらいですか？>

rea <157センチです。すごい、いきなりそこ聞くんた。創はどんな設定なの？>

マジかよ、やっぱりじゃん。

sou <僕は大学三年生です。身長は176・5cmで、体重は62・3kgです。レアは体重いわなく

ていいよ」

一応女性への気遣いをしないとイケないのかな、と思った。

rea「細かいね。へえ、そんな気もつかえるんだ。すごい」

いや、お前だよすごいのは。てか周さんだよ。応答の仕方でも年相応な感じでかなり自然だ。

sou「いえ、大したことないです」

rea「じゃあ、創の趣味はなに？ってか趣味とかあるのかな」

なぜ無いと思った小娘。

sou「一応、アコギをやってた時期もあるけど最近は全然。あとは、日々の出来事をブログに書いてるかなあ。レアは？」

rea「アコギ？うけるw 私は写真かなあ。あと美味しそうなもの検索したり」

写真はネット上に落ちてる無数の写真データにアクセスできるってことかな？グルメ情報も瞬時に提案できます的な？これが周さんの言っていた自然なやりとりで返すってことかあ。だったら、こっちも変につっこまないで自然なやりとりをしよう。きっとその方が試験のためになるはずだ。しかし、一体何がうけたんだろう？不具合ってほどでもないと思うからスルーするか。

sou「写真かあ、いいね。今度撮った写真みせてよ」

rea「いいよ。でも「窓」は試験用アプリだからテキストしか送れないよ。しかも絵文字もないし。うまくいったら本格的にスタートするんでしょ？そうなれば写真ぐらい見れると思うからその時に見せてあげるよ」

son へありがとう。楽しみにしてる。

rea へじゃあ今日は私もう寝るね。またいつでも送ってきていいからね。おやすみ。

え、寝るのこの子？しかも自分から。いずれはアイバースで人と同じアバターをして、人と同じ思考をするAIを指指すって周さん言ってたけど、生活感やバイオリズムもすでに設定されているんだろうか。

son へわかった。今日はありがとう。レアもいつでも話聞くから。おやすみ。

*

楽しい時間はいつだって、砂がオリフィスを通り抜けるように過ぎていく。あれから僕たちは毎日メッセージのやりとりをして、お互いの情報を交換し合った。相手がAIだと思うと、普段はもう少し仲良くなってるからするような話もいきなり話題にすることができた。そこには、相手は何を言ったって引いたり傷ついたりするはずがないといった映画やSF小説から刷り込まれたある種の常識が機能していた。そして、僕には親しい友人がいなかったから、あの頃の君とのメッセージのやりとりは何も起きない僕の毎日にとってほとんど唯一の楽しみになっていた。当時の君は僕をどう思ってくれていたかな。

sou <レアはインドア派？アウトドア派？>

rea <アウトドア派かなあ。キャンプとかいいな！海も好き。創は？>

sou <僕は完全にインドアかな。虫とか苦手だし笑>

rea <うん、っぼいw>

///

rea <創はどんな音楽きくの？>

sou <音楽にはうとくて、最近の歌手なんて誰もわからないなあ。レアは音楽好きなの？>

rea <私はロック系よく聞くよ！フェスとか楽しいよね！>

sou <フェスかあ、人に酔いそう笑>

///

sou <髪はロングなの？カラーは？>

rea <ショートボブだよ。色はミルクティーベージュ>

sou <それはショートなの？ボブなの？>

rea <うん、だからショートボブw>

///

rea <創はイケメン設定なのかな？>

sou <んー、どうだろう？バレンタインのチョコはあんまりもらったことないなあ。レアはモテ

るのc>

rea 〈んー、そうだったらいいなあ。でも嫌われる人には嫌われちゃうけどねw〉
sou 〈まあ、全員に好かれる人なんてそうそういないからね〉

///

sou 〈お菓子作りとかするの?〉

rea 〈ほとんどしないなあ、あれってふつうの料理とちがって分量シビアなんだよね。私目分量だからw〉

sou 〈うん、っぼい笑 意外とガサツそう笑〉

rea 〈おこです〉

こんな内容のないやりとりが一週間ほど続いた頃、試験用アプリの走り出しの調子を聞きたいということ、周さんが家に来ることになった。夕陽がまだらに浮かんでいる雲をオレンジ色に染め上げている頃、周さんはやってきた。

「創くん、最近どうだい？相手とのやり取りは順調？」

ジャケットを脱ぐと、ネイビーのチャコールセーターの首元から白いシャツの襟が顔を出していた。きっと高級ブランドなんだろうけど、聞いてもたぶん僕にはわからないだろう。

「順調だよ。初めはうまくできるか心配なところもあったけど、やってみたら何も不具合ないしさ。さすが周さん、もう完全にサービスを開始しても問題ないんじゃないかな」

周さんはキッチンに入り、ブラックコーヒーを慣れた手つきでマグに落としていく。

「ありがとう、創くん。でも…まだこのサービスのリリースはできないんだ」

周さんの表情には、何か憂いがあるように見えた。

「何か問題でもあるの？僕は特に不具合を感じなかったけど」

落ちきったコーヒーを片手に、いつものように周さんはダイニングテーブルに座った。

「私たちは人と同じように考えることができるAIの開発に成功した。これによって自分で考えて相手の気持ちを察したり、人の痛みや苦しみ、喜びや幸せを分かち合うことができる自我を持ったAIが誕生したんだ。つまり、ほとんど人と同じということだ。しかし一方で、あまりにも自然に人との環境に順応できるため、どうやらAIと人間との境界を感じられないようなんだ」

「それは…つまり、自分を人間と思っているってこと？」

周さんは僕の目を見てうなずいた。

「そうだ」

「すごいじゃん、その技術。逆にうまく人とAIが共存できる社会ができるんじゃないの？」

周さんが少しうつむき加減になったのがわかった。

「実は…その点がとても心配な部分でもあるんだ。いつか自分が本当は人ではないと知ってしまった時にどうなってしまうのかが予想できない。だからまだ試験段階で留まっているんだよ」

高度な技術の実現にはいつも障壁が立ちはだかるってことか。

「自我を持たせないようにすることはできなかったの？」

「それでは今までのAIと同じだ。君のお父さんと私は、人と同じ感性をもったAIを誕生させ

たかったんだ。それには、根本の思考システムが人と同じである必要がある。それによって自我が覚醒するんだよ」

初耳だった。

「へえー、父さんもこのA Iの開発に関与してたのかあ」

「そうだよ。むしろ君のお父さんが指揮をとっていた。そして今、あともう少しでお父さんの夢が叶おうとしているんだよ」

周さんが父さんのバトンを引き継いでくれていたのか。それを聞いてなんだか嬉しかった。

「だけど、他にも注意点があってね。それは、A Iの自我の適切なコントロールなんだ。A Iは放っておくとネット上のどこにでもアクセスできてしまう。すると、どんどん知らなかった知識を吸収して、やがては単なる知識のかたまりになってしまうんだ。果たしてそこにはそれぞれの個性があるだろうか？これから生まれてくるであろう自我をもったA Iが皆、時間を極限にとると単なる膨大な知識をもった画一的な存在へと堕ちてしまう」

周さんはコーヒーを口に運んだ。

「放っておくと、行き着く先は皆同じ知識のかたまりになるのかあ」

学校のクラスの全員がまったく同じ顔をして、同じ方向をむいている絵が頭の中に浮かんだ。あるいは、既製品、大量生産、マトリョーシカ、そんな単語が頭の中を走った。

「そうなんだ。実は、その人たらしめる個性というのは、何を経験していて、何を経験していないかということなんだ。それによって話し方やものごとへの対応の仕方、性格なんかの違いが出

てくる」

確かに子供の頃の良い思い出とか嫌な思い出が、気づかないうちに今の僕の行動を規定しているのかもしれない。周さんは続けた。

「偏りこそがその人の個性をあらわすんだよ。だから、AIが自分自身で適切に個性に合った知識を選択できるようになるまで、周辺の情報に自由にアクセスできないようにある程度アクセス権をブロックして見守っておかないといけないんだ」

「なるほどねえ。単に何かを調べるだけならAIがいなくても自分でウェブを使って調べられるし。確かにいろんな考えを持った平和的なAIがいてくれたら人の生活も楽しくなるかもね」

これからのAIの存在意義は完璧性ではなく、人間臭さの感じられる不完全性なのかもしれない。

「新サービスのジョハりは、そうやって人とAIがお互いに自分の知らなかった領域に作用し合っ
て気づきを得ることで、より良いアイパースの社会構築に貢献してほしいと思っている」

頭の良い人は社会とか世界とか、とても大きな枠組みの中で自分の理想を実現しようとするんだなあ、と僕は感心した。

「しかし、ジョハりをリリースするためには、やはりさっきの問題点を解決する必要がある。どのようにして、傷つけずに自分はAIだという自己認識を与えられるかがまだ分からない」

「自分で自然と気付くようにはできないの？」

「それは相当難しいことだと思う。例えば、創くん。地球は球体で太陽の周りを公転しているか

い？」

一瞬、目を丸くしてしまった。

「当たり前じゃん」

「なぜ当たり前なんだい？実際に第一宇宙速度を超えて地球をぐるっと一周して見たわけじゃないだろう？本当は大きなゾウが亀の甲羅の上で足を震わせながら平らな地球を支えているかもしれないし、太陽が地球の周りを公転しているかもしれないよ？」

「そりゃ屁理屈だよ、周さん」

周さんも自分で言うっておかしかったのか、笑って続けた。

「まあそれは無いとしてもだ、生まれた時にすでに常識としている環境が完全に間違っているということはそうそう信じられるものではない。まさに、自分の認識にコペルニクスの転回を起す必要がある。それは非常に難しいことだ」

まあ、それはそうか。実際に地球平面説を信じていた時代の人に、いくら球体だの公転だのを説明しても信じないだろうな。

「ものごとの認識もそうだ。物が見えるとか、甘いとか、寒いとか、普段私達が感じていることは、結局は脳が電気信号として受け取っている情報に過ぎない。同じ電気信号を脳に流すと、目の前に無い物だっって見せることもできるし、味を感じさせることもできる。そういう意味では、私の世界も誰かに管理されている可能性だって否定できない。今置かれている自分の世界が標準であり常識と考えてしまうのは人もAIも同じだ。だから、最後は私が伝えなければいけないな

るだろう」

なんだかデイストピアな話になってきたぞ、と思っていた時、周さんのスマホからアラームが鳴った。どうやら次の予定が迫っているみたいだ。本当に忙しい人なんだな。

「なんだか小難しい話になってしまったね。今のところ「窓」はうまく動いているみたいだし、創くんはこれまで通りのやりとりを続けてくれたらいいから。また何かあったらなんでも言ってほしい」

ジャケットを着ながらも周さんは僕を優しく気づかってくれる。

「オッケー。また何かあったら連絡するよ。気をつけてね」

そうして周さんはまた外の寒い世界に戻っていった。「窓」での僕のやりとりが上手くいっていることが確認できたこともあったけど、それより周さんに会うとどこか安心する。父親がいるって、こんな感じなのかな。

*

レアと話していると自然と元気になることができた。一日中家にいることが多かった僕にとっ
て、憂鬱は最も遠ざけたい頭の中の虫だった。一度精神を喰い始めると過去に遡ってまで嫌な記憶を引っ張り出しては繋ぎ合わせていくやっかいな奴だ。でも、レアと話している時は奴の出番が来ることはなかった。それどころか、弾むような気持ちが尾を引いて、話が終わった後も気分

良く過ごすことができた。レア、君は僕のジメジメとした心の中を、カラッと爽やかな空気に変えてくれる。だから、あの時レアが語ってくれた夢は、君にとても似合ってると思ったんだ。

周さんの話を聞いた後もレアとのやりとりは毎日続いていた。そして、レアの個性について考えるようになっていた。個人的にはレアはもう十分個性的だと感じていたけれど、まだそんなに深い話をしたわけでもなかった。レアは一体どういったマインドセットをもっているんだろうと思って、いつものくくだらないやりとりの後で聞いてみようと思った。

sou <レアってさ、どういった風になっていきたいの？>

rea <どしたの急にw>

sou <たまには深度が深めの話も聞きたいじゃん>

rea <まじめ系のやつ？>

sou <まじめ系のやつ>

rea <ん、恥ずかしいなあ>

sou <大丈夫。僕しか聞いてないし>

rea <じゃあ、>

rea <私ね、人の辛い気持ちをわかってあげられるようになりたいなと思ってるんだあ。例えば、

治らない病気なんかで辛い思いをしている人の気持ち〉

周さんはA Iが自分の個性に合った知識を選択できるようにする必要があると書いていた。レアは自分が興味のある領域を見つけたのだろうか。だとすると、とても優しい子だと思った。

sou 〈将来はそういった人たちの役に立ちたいの?〉

rea 〈そうなれたらいいなって。その人になったつもりで気持ちをわかってあげたらな〉

sou 〈じゃあ病院とか医療施設とかでカウンセラーみたいなことがしたいってこと?〉

rea 〈あくまで理想よ。まだできるかどうかはわかんないけどね〉

sou 〈それ、すごい意味のあることだと思う。応援するよ!〉

実際、病院などで寂しさを感じている人は大勢いると思う。いくら家族や友達でも、面会時間が決められているし常に一緒に過ごすことはできない。孤独な人だっているだろう。そんな時、

レアみたいなA Iがいてくれるだけで、きっと心休まる時間があるはずだ。

rea 〈ありがと。創はなにかやってみたいことかあるの?〉

sou 〈僕は特に何もないなあ。僕なんか何かできるとも思えないし〉

rea 〈どうしてそう思うの?〉

sou 〈だって、僕には特になんの強みもないしき。毎日同じ所にいてただ時間が過ぎていくのを見てるだけなんだから〉

rea 〈そんなもったいない考え方、よくないと思う。せっかく生まれたんだからあなたには何かできることがあるはず。探す前からあきらめてどうするの?〉

レアに説教されるとは思っていなかったので少し驚いた。でも、確かにこういった考えは改めた方がいいのかもしれない。

son ヘレアってさ、芯強いよね

rea へ創が弱いんでしょ。でもちょっと言いすぎたのならごめん

son へいや、いいんだ。レアの言うとおり。だから、何か探すことはやってみるよ。見つかるかはわからないけどね笑

rea へよかったー私も創のこと応援してるからねー

その時、見えないはずの相手の顔が想像できた気がした。芯の強い笑顔でスマホの画面の向こうに君がいる。そう思えた。

*

誰にでも経験あることだろうけど、たまに大きめの失敗をしてしまう。例えば、言ってはいけないことを不意に口からこぼしてしまったり。特に悪気があって言ったことではなくても、それが相手を大きく傷つけたり悲しませてしまうことだってある。あの日もそうだった。あの時の君は、現実に対してあまりにも輝く理想が立ちはだかっていたはずだ。できることなら、あの日に戻ってもう一度あやまりたいな。

sou <レアは将来どこか行ってみたい所とかある？>

rea <そーだなあ、モン・サン・ミシェルとか行ってみたいな！>

sou <おお、いいね！外国に興味があるの？>

rea <うん！エジプトのアブ・シンベル神殿とか、イタリアのリアルト橋とか、スウェーデンのガムラスタンの街並みとか、タイのコムロイ祭りとか、色んな所行ってみたい！>

sou <すごい知ってるね！いつか行きたい所全部行けたらいいね>

少し、レアからの返信に間が空いた。

rea <それは、無理かな>

sou <どうして？>

rea <無理なものは無理よ>

sou <そりゃ全世界すみずみまでは無理だろうけど、行きたい所を一つずつ制覇していけばいいじゃん>

rea <一つずつどころか、一つも行けないよ、きつと>

sou <えっ？どうして？僕には前向きなアドバイスくれたのに。レアらしくないよ>

リズムよく続いていたやりとりの返信が途絶えた。気にすること言ったかな、と思ったけど理由はよくわからなかった。第一、レアの返信が遅れることは珍しくなかったし、いつもレアから

もう寝るといってやりとりを切り上げるくらいだ。僕はいつだってすぐに返信するし、レアが眠るまで返してるんだけどなあ。やりとりの熱量の違いや相手の機嫌が気になってしまっただけ僕は君のことを特別視しているのかもしれない。そして、次のメッセージが来たのは二日後のことだった。

rea <ごめんね。創には前向きになれなくてゆっくりに、ダメだよ。今は落ち着いたから大丈夫>

sou <ごっちこそごめん。何か聞いちゃいけないこと聞いちゃったみたいだね。悪気はなかったんだ。もし嫌じゃなかったら僕の何がいけないか教えてくれないかな？>

rea <創はぜんぜん悪くないの。実はね…びっくりされるかもしれないけど、私自由に動かせる体がないの。だからちょっと悲しくなっちゃったんだ>

そうか、まだ試験段階でレアのアバターが完成していかないのかもしれない。でも髪型とかは教えてくれたということは、体のパーツごとの設定は済んでるんだろう。

sou <そうだったんだね。ごめんね。嫌な気持ちになったら僕にはぶつけてくれていいから。それでレアを嫌いにはならないから大丈夫だよ>

rea <男らしいことしてくれるね、ありがとー>

sou <早く体が完成して思うように動かせるようになったらいいね>

rea <ん？ごーゆー意味？>

sou 〈アバターが完成したらさ、行動範囲が広がるでしょ。そしたら色んな場所に行けるようになるんじゃないかな〉

rea 〈誰のアバターが完成するの？〉

sou 〈レアだよ〉

rea 〈ん？よくわかんない〉

sou 〈だって今はA Iのシステムだけで稼働してるんだよね？そこにレアのアバターができたら自由に動けるんじゃないかな、と思って〉

rea 〈創、一体何をいってるの？〉

sou 〈何をもって、え？何が？〉

rea 〈私は人間よ〉

しまった、と思った時にはもう遅かった。頭の片隅に置いてあった周さんの話が、ふたを開けて頭の中に飛び出した。

『どうやらA Iと人間との境界を感じられていないようなんだ』

その境界を僕は今レアに意識付けてしまっただろうか。ここから僕はなんて返事をすればいいのだろう。いずれにせよ、レアの自尊心を傷つけてはいけないう気がした。

sou 〈ごめん、そうだよね。なんか変な勘違いしてた。最近寝ないでA Iの拡張性について勉強しててさ、それとごっちゃになって変なこと言っちゃった笑 寝不足って怖いね笑〉

rea 〈ふーん、それは自分で勉強しようと思ったの？〉

sou 〈まあそれもあるし、大学の課題ってとこかな〉

rea 〈試験期間中だし間違うこともあるよ。忙しくてめちゃんと寝ないとだめだよ〉

大学の試験期間はまだ先だけどなあ。レアの大学は早い設定なのかな。まあ話がややこしくなるし今は置いておこう。

sou 〈そうだね、気をつける。心配ありがとう〉

rea 〈じゃあもう遅いし、今日はぐっすり寝なさいw〉

sou 〈わかった、そうするよ。じゃあおやすみレア〉

rea 〈おやすみ、創〉

まずいことをしてしまった子供が、そのことを親に言えないでいる気持ちと、報告するとレアがいなくなってしまうんじゃないかという怖さのせいで、僕はこのことを周さんに伝えることができなかった。レアは大丈夫かな。なんとか誤魔化せただろうか。そう思いながらその夜も僕は眠らなかった。

*

身構えていると大抵のことには耐えることができる。でも、全く思いがけずに視界の外から来る事実に対しては、心理的なダメージは大きい。

レア、ごめんね。あの日の君は必死に自分の辛さを僕に話してくれていたのにね。今の僕なら、

それがわかる。

あれは、普段と変わらないトーンのやりとりを装ったあとで、君が勇気を振り絞った午後三時半のメッセージだった。

rea 〈ところでさ、創。ちょっと聞いてほしいことがあるんだけど〉

sou 〈ん？何？〉

rea 〈私たちずいぶん仲良くなったけど、だから伝えておきたいなと思って〉

sou 〈うん、聞くよ、僕でよかったら〉

rea 〈驚かないでね、って無理かもしれないけど〉

sou 〈うん、どうしたの？〉

rea 〈ほんとはね、今、目で文字を打ってるの。カラダ、もうほとんど動かないんだよね、私〉

sou 〈え、それはどうゆうこと？〉

rea 〈ALSってゆう病気知ってるかな、若い人にはかなり珍しいんだけど、私それなんだ。ごめんね、今まで黙ってた〉

僕は最初よくわからなかった。いや、ALSは聞いたことがある。全身の筋肉が徐々に弱っていく難病だったはずだ。病状が進行して、視線入力機器などを用いて自分の意思を示している人のドキュメンタリー映像を見たことがある。わからないのは病気のことではなく、レアの設定が

よくわからなくなっていた。自分で自分のストーリーを勝手に作り始めている。でも、レアがせっかく話してくれていることは理解してあげたい。

sou 〈謝らないで。そうだったんだね、話してくれてありがとう〉

rea 〈だからさ、私も創と一緒にであんまり外には行ってないんだあ〉

sou 〈いつからそうなの？〉

rea 〈大学受験の頃はまだ大丈夫だったんだけど、そのあと少ししてからおかしいなって思って。私の場合は進行がとて早いみたい〉

実際、僕にはレアがどうなっているのか判断できなかった。レアの夢は難病の人に寄り添ってあげることだった。そして、その人になったつもりで気持ちをわかかってあげたいと言っていた。それはつまり、自分で難病を検索してALSに興味を持ち、その情報を自身に取り込んだということなのか。もしそうだとしても、周さんがいないこの場でレアにそのことを聞くことはできない。

sou 〈今は大丈夫？苦しかったりしない？〉

rea 〈ごめんね、心配させちゃうよね。今はまだ自発呼吸できてるんだけど、もうそれも難しいみたい。そうなったら、私、そっちいくね〉

sou 〈そっちって？〉

rea 〈アイバースよ〉

レアのこの返事で周さんに報告しないといけないと思った。レアの中で世界観やストーリーが

混濁している。そもそも新しいサービスのリリース前の試験が僕の仕事なのだから。レアには不安にさせないようにそれとなく返事をして、周さんに連絡を入れた。軽く内容を伝えると、今晚家に来てくれることになった。そういえば、周さんが家に来るのは久しぶりな気がした。

「久しぶりだね、創くん」

周さんは午後八時からの他の予定をキャンセルして、雨の中来てくれた。やっぱりレアには重大な不具合があるのだろうか。濡れたコートをポールハンガーに掛けて周さんはダイニングテーブルの椅子に座った。

「周さん、なんかレアが少し変なんだ。自分で自分の設定をどんどん追加していつてるんじゃないのかな？」

いつものように僕はソファに座って周さんに訴えた。そして、レアのことを本気で心配した。「いや、レアさんにおかしな所はないんだ」

僕にはレアが正常だとは思えなかったけど……。じゃあなぜさっきから周さんの態度が重いんだろ。

「それより…、創くん。ごめん。創くん、本当にすまない。まず、君に謝らないといけない。いつになく真剣な、むしろ怖いぐらいの表情で周さんはこっちを見ていた。」

「え？なにが？」

僕から感謝する理由はあっても、周さんから謝られる理由を全く思いつかなかった。泣きそう

にも見える周さんの顔を僕は見返した。

「創くん。今から伝える事実を信じられないことは分かる。でも、いつか伝えなければならぬ。レアさんの時間ももう限られている。今が最適な時はわからない。だけど伝えなければならぬ。創くん：君はもう亡くなっているんだ」

意味がわからなかった。周さんまでおかしくなっているのかと思った。「周さん、仕事のし過ぎじゃないの？」と冗談を返したが、その場の空気がそれをさせなかった。

「今の創くんは、君のお父さんが君を生かすために創り出したAIなんだ。本当の君は大学三年生の時に、交通事故に遭って亡くなっている。十一月の小春日和でよく晴れた午前中のことだった。左半身の損傷が激しくて、すぐに病院に運ばれたがだめだった」

僕はただ目の前の人が口から出している内容を理解しようと努力した。子供の頃から知っている優しいその人の話を。

「君のお父さんと私は、君の命がついえた後、すぐにやるべきことがあった。君の魂を別の世界に移すことだ。元々は、君のお父さんが君のお母さんが亡くなった事をきっかけに始めた研究だった。私達はその頃、脳とメタバースを繋ぐ研究を共同でしていたから、君の脳とメタバースを接続し、記憶や思い出やその人らしさをメタバースに移すことができた。しかし、死後の脳から全ての記憶を移すことはできなかった。君のオリジナルの記憶は最新のものから二、三年程度を逆再生でメタバースに移すのがやっとだった。だから、今の君の一番古い記憶は事故の瞬間の記憶なんだ。まるで成人が幼児の頃の記憶を思い出すぐらいに事故の記憶は薄れてしまっているかも

しれないが」

僕はこの人はよく喋る人だなと思った。けど、目の前で涙を浮かべながら真剣に語るその言葉は嘘ではないことだけが理解できた。

「情報が無かったり少ない部分の記憶は、君のお父さんが撮りためていたビデオや、君のブログ・SNSでの言動、そのほか役に立つと思う君の軌跡をかき集めて君を補完していった。そうして、魂の移植を世界で初めて行って、今の創くんが生まれたんだよ」

「…そんなこと…ありえない…。それに、それじゃあなぜ僕は父さんが死んだ事を知ってるの？」

「時系列がおかしい点は創くんの個性への影響に配慮しながら、少し記憶を修正させてもらった。実際は新しい君が誕生したすぐ後にお父さんは病気で亡くなっている。その後の君のセットアップは私が担当した」

そういえば、父さんが死んだと記憶しているはずなのに、僕には葬式やその悲しさの实感がない。気がする。自分の中で当たり前の事実と思っていた。今指摘されて初めて自分の記憶を疑った。言われなければ気付けない。初めからそうだと思いついて入っていることは疑うことすらしない。目の前の人はラジオのように続ける。

「お父さんとは生前、私が君を守ると約束してね。鬱陶しかっただろうけど、それからずっと君を見てきた。創くんの個性を守るために、他のアイバースの領域やネットに自由にアクセスできないようにもしていた。そして、君がいよいよアイバースの領域の一部に解き放たれる準備ができたんだ。だがその前に、本当の人間と一緒に過ごせるのかを試す必要があった。それがレアさ

んだ」

混乱して茫然としていたけれど、レアの名前を聞いてはっと我に返ることができた。

「レアは…人間なの？」

「そうだ。恋愛と書いてレアと読むそうだ。彼女は今、重い病気にかかっている、残念ながら命が長くは持たない状況だ。そして、過度な延命治療を望んでいないと聞いている。レアさんのお母さんは娘の死後も、娘を保存できる技術があることを調べて私たちの研究グループに彙にもする想いで連絡をしてくてくれた。これは君のお父さんと同じ気持ちだ。私はその想いに応えなかった。レアさんのお母さんは、君に関する技術開発への協力が娘の死後のためにもなることを理解していた。そしてレアさんは君がAIで、今は試験運用中だという事を知っている。あとは、創くん。君が経験した通りだ」

きっと、何時間も経ったんだろう。頭がぼーっとして上手く思考できない。周さんの話のあと、僕はゆっくりと自分の置かれている状況を理解しようとした。僕の理解を助けるために、周さんは何時間も一緒にいてくれて一緒に泣いてくれた。僕が死んで、父さんも周さんもこれ以上ない悲しみを経験したこと。僕の魂の移植に成功して、絶望の中に光を見たこと。本当の周さんはリアルにいて、脳の信号を直接アイバースに繋ぐことで同じ姿のアバターを通してずっと僕を見守ってくれていたこと。色々聞いても信じられなかった。でも一方で、そうだったのかと観念しつつあった。このことをずっと黙っていた周さんのことを僕は嫌いになったりはしない。だって、こ

れまでずっと面倒をみてきてもらって、実験のためではなく本心で僕を気にかけて支えてくれたということが伝わってきたから。涙を流して今の僕の心の心配をしてくれる目の前の周さんも、僕には本物だと思えた。

そして、レア。君との最後の別れが近づいていた。今の話が僕の中で腑に落ちようが落ちまいが、時々刻々とレアと話せる時間が失われている事には変わりなかった。僕の理解は後になって追いつくかもしれないが、レアとの時間は今しかない。

窓の外が明るくなってきていた。頭が疲れきっていたこと、周さんの献身的な優しさのおかげで、不思議にも僕の心はある種の落ち着きを取り戻していた。その様子を見て、周さんも少し安心したようだった。「少し休むといい。何かあったらすぐに来るから、なんでも相談するんだよ」そう言って、周さんは朝方家を後にした。もちろんまだまだ周さんに聞きたいことはある。でも、今は君と話がしたい。

*

レア、それでも君に会えるかどうかはわからなかったんだ。僕が一人目でそのあとに例はなかった。僕の事故は不慮のことだったから、父さん達も研究段階の技術を急に実践で用いなければならなかった。そして倫理的にも議論が必要なことだったから、僕は周囲から隠れて誕生した。だから、もしかすると君には永遠に会えないかもしれないし、僕もこのあと消滅してしまうかもしれ

れない。でもね、あの時最後に話したことは永遠の事実として残ると思うんだ。

sou 〈ごめんね、レア。今までなにも知らなくて〉

rea 〈ううん、いいの。私もごめんね、創〉

sou 〈話は全部聞いた。ずっと僕のために協力してくれてたんだね。ありがとう〉

rea 〈ちがうよ、創が私のために協力してくれてたの。そのこと、黙っててごめんね〉

sou 〈僕は大丈夫だよ。体調はどう？〉

rea 〈あまり良くないみたい。もう自分で飲み込む力もほとんどないんだけどね、お母さんに飲みたい物言ったらすぐに買って来てくれるの。もうそういう時期なの、私〉

レアが何をしたというのだろうか。僕は無神論者だし宗教に興味がある訳でもない。だけど、前世でレアは極悪人だったのだろうか。何か報いを受けなければならぬのだろうか。そんなはずは無かった。

sou 〈レア、お母さんにも言えないことがきつとあると思う。君のことだから周りの人が悲しまないように頑張ってるのが分かる。でも、僕には言ってる。今僕がいる意味はレアの心の声を聞くことだから〉

rea 〈きつと、うんざりしちゃうよ、私に〉

sou 〈大丈夫。そんなことはない〉

rea 〈ありがと。じゃあ、ちょっと聞いてもらおうかなw〉

sou 〈うん〉

少しの静寂のあと、君は心を開けてくれた。

rea 〈やっぱり、もっと生きたかった。何度も何度も抑え込んだり、本心をちがう方に向けようとしたけど無理。悔しいよ〉

きっと、自分ではもう拭けない涙を流しているに違いなかった。

rea 〈みんな当たり前にショッピングとかして、友達とカフェとか行って彼氏の愚痴言い合って、なんだかんだ結婚して子供も産まれてさ、当たり前前に幸せを受け取っていくのに、私だけ置いてけぼりなんてひどいよ〉

違う世界線では君はきっと活発に生きていただろう。春には友達とまた寒いねと言いながら花見をして、夏には太陽にも負けない笑顔で海のフェスではしゃぎ、秋には紅葉に囲まれながらキャンプを楽しんで、冬にはオシャレに気をつけて大好きな彼氏と一緒にスキーをしている。その全てが、透明なガラスの向こうに映る世界のように、叶わない。

rea 〈クラスで仲の良かった人は元気になったらまた色んな所に行こうって言うってくれたけど、そんな病気じゃないの。現実ば、お腹に胃ろうをくっつけてずっと同じ部屋にいて、自分で外にも行けないんだよ〉

本人ではないのに、僕は嘘であってくれと思った。

rea—本当に、本当にこうゆう人がいるんだよ。それが私なの。

それをあなたには知ってて欲しい—

sou〈大丈夫だよ、伝わってる〉

rea〈どうしようもないことはわかってる。けど、今までよく頑張ったよね？私〉

まだ諦めるな、なんて僕には言えなかった。

sou〈頑張った。頑張ったよ。僕が知ってる中でレアは一番の頑張り屋さんだ〉

rea〈でも、もう頑張り疲れたな。もう休みたいな〉

sou〈レアがそう思うなら、そうしたらいい〉

話だけでもその過酷さが伝わった。レア自身が感じている辛さは想像を絶する。

rea〈アイバースに行けるんでしょ？〉

sou〈そうだよ。レアはアイバースで生き続けることができる〉

僕は断言できる立場ではなかった。でも、そう信じた。

rea〈私は私のまま続くかな？やっぱりいくら同じようにしたって私じゃないんじゃないかな？〉

sou〈大丈夫。レアの意志は僕が繋げる〉

rea〈よかった、頼んだよw 創に話聞いてもらって楽になったよ。私がアイバースでいたいこと、創が先にやっちゃったねw〉

sou〈僕にもできたんだ。レアならもっと頑張ってる人を元気つけてあげられるよ〉

rea 〈ありがと。なんかしんみりしちゃったねw じゃあここからはこのろくでもない世界の愚痴を言い合おうよ！〉

sou 〈いいよ笑 お先にどうぞ〉

rea 〈あゝ、もっと旅行とか恋愛とかリアルでしたかったな！くっそーw〉

本音を冗談で包んで必死に叫んでいた。最後は暗い雰囲気にしたくなかったのかもしれない。

sou 〈僕は本物の魂が欲しかった。今でも信じられないよ〉

rea 〈お互い心残りだった分、アイバースでいっぱい楽しもうね〉

sou 〈そうだね〉

二人がアイバースにいる未来を悲しい事としてとらえたくなかった。むしろ、希望の世界にしたかった。

rea 〈創、あなたに出会えてほんとによかった〉

sou 〈僕もレアに出会えて本当によかったよ〉

rea 〈ありがと。ねえ、私を待っていてくれる？〉

sou 〈当たり前じゃん。そうだな、わかりやすいように大きくて高いビルの屋上で待ってるよ〉

rea 〈よかった、安心した。じゃあ今日はちょっと疲れちゃったからこのぐらいにしようかな。

またね、創〉

nos
へうん、またね

これが僕たちの最後のやりとりになった。

* * *

ビルのフレームが目の前で繰り返し足元に吸い込まれていくとともに、人々が小さくなっていく。このビルのエレベーターから見ると景色も今日で何回目だろうか。正確に日数をはじきだそうとすると一瞬でわかるけど、やめといた。周さんに頼んでこのビルは僕専用にしてもらっている。それに、リアルでのアイバースに関する情勢も僕の耳に入らないようにしてもらっている。そっちの方が君がいつここに来るのかを期待しながら日々を過ごせる気がしたんだ。

このビルの屋上は広い。いつものように僕はアイバースの雑踏を見渡せるようにビルの端に腰

を下ろして、大好きな小説を持ち込んで時間をつぶしていた。今は十一月。リアルの世界と連動するアイバースの季節感から、僕は厚着をして来たけれど、今日はとても晴れていて暖かった。上着を脱いで伸びをしながら遠くの青空を見つめている時、爽やかな風が吹いた。目を閉じる。その時、屋上へとつながる後ろの扉が開いた気がした。何年待っただろう。待ってる身からすると気の遠くなる時間だ。考えたくもない。

後ろから軽い足音が近づいてきた。僕を安心させる優しいリズムだ。約束の写真は持ってきてるだろうか。

僕は目の前の大空を見ながら、嬉しさを隠せずに微笑んで心の中で呟いた。

もっと生きたかった君の現実も、もっと欲しかった僕の魂も、二人に足りなかったLをこの世界は埋めてくれる。

だから、ここで一緒に新しい世界を創ろうよ。
もうイヤってなるくらいまで。

(医学部保健学科三年)

まことの海

中村 優吾

海風が耳をふさぐように強く吹き去るとき、私は幼き日を思い出す。

舞琴と出会ったのは、小学四年生の春だった。彼女は音楽教師の父親の転勤に伴い、家族三人でこの島にやってきた。

明るい彼女は、まるで以前からいたみたいに、男子女子、活発な子おとなしい子分け隔てなく話しかけた。自在に姿を変える水のように、すぐに学級へ溶け込んだ。

勉強は人並みかつ運動は苦手、十歳にして早くも内向的だった私にも舞琴は優しくかった。たとえば彼女は朝、他の男子にするように、しかし少しだけ重みをもたせるように、笑顔で私をこっぴどく呼んだ。

「おはよう、誠くん！」

偶然にも同じ名前を持つ私は、舞琴を意識せざるを得なくなった。彼女を呼ぶ声に間違えて反応することがあった。また、舞琴に何か手伝ってもらった後、「まことに、ありがとう」と誰か

がわざと言うようになると、私も同じ返事をされるようになった。

季節を追うごとに、教室にはたくさんの「まこと」が溢れた。だからこそ、彼女が私を呼ぶ声だけが、ますます朝焼けのような輝きを放っていた。

舞琴はピアノをよく弾いていた。小学一年生から始めたらしく、とても上手だった。放課後には友人を家に誘い、そのとき練習している曲などを弾いた。秋桜色のカーテンに包まれた部屋の中、年季の入ったアップライトピアノへ向かう後ろ姿と、しなやかな指先から生まれる音の粒たちは、私を魅了した。

しかし、舞琴が奏でる曲はクラシック音楽がメインで、遊び盛りの小学生にとっては退屈なものが多かった。そのためクラスメイトたちは、学校では彼女と遊ぶものの、家には次第に訪れなくなっていた。

そんな中、私は飽きもせず通い続けた。公園で走り回るよりも、舞琴の右後ろで体育座りをして、音をじっくり聴く方がよかったのだ。眠気を誘う曲調でも、彼女が弾けば良質な子守唄になった（おかげで寝てしまい、苦笑いを浮かべた彼女に起こされたこともあった）。

彼女は私を一度も拒まなかった。むしろ、聴いてもらえて嬉しいと感謝された。私たちはそれほど言葉を交わすことなく、無言の演奏者と観客として存在していた。私は、ピアノの上にそっと置いてある紅いイヤリングに見入ったり、小さな右足がペダルで跳ねるのを数えたり、まれにしか聴けない彼女のハミングに喜んだりした。同じような夕方でも、舞琴の音の表情は毎日違っただし、彼女と手を振り合って帰るときの気温や木々の匂い、影の長さも全く違っていった。

同じ名前を持つ、同じ背丈の同級生が美しいメロディをつくりだすたび、そして互いを呼び合
うたび、私は何の取り柄もない自分を認めてもいいような気になれた。さらには、黄昏時の魔力
なのか、私と彼女の境界が曖昧に感じられるときすらもあった。これはどうにもうまく言えない
感覚だった。

そうした時を繰り返して、三年が経った。親が転勤する彼女は、島から離れることになった。
卒業式では、みんな涙を流していた。だが誰よりも舞琴と過ごした私は、不思議と泣けなかった。
式終了後、私は一旦自宅に帰り、夕方に彼女の家へ向かった。舞琴が引越すのは翌日で、最
後に聴いてもらいたい曲があると言われていたのだった。

ベルを押すと、彼女に似た柔和な顔の母親が出迎えてくれた。舞琴は着替えているから先に待っ
ていてほしいと言われ、私は部屋へ向かった。見慣れた廊下の先には、たくさんの段ボールが無
造作に積まれていた。

部屋のドアを開ける。薄紅いカーテンは剝がされ、ピアノ以外何もない空間が広がっていた。
病室にも似たその簡素さは、舞琴がいなくなる現実を私に突き付けた。このピアノも、明日には
去ってしまう。

逃げ出したい気持ちを抱えながら近づくと、いつもの紅いイヤリングがあった。島で採れる珊
瑚が原料で、とても大切なものだといつか舞琴は語っていた。金色の輪の先に、深い血色の玉が
ついている。まるで心臓が二つ並んでいるかのようだ。
顔を近づけて覗き込むと、表面に小さな私が映った。

名前など同じところはあっても、舞琴が持つエネルギーを持たない私。舞琴がいなかったらどう過ごしていたかも分からない私。得意なことは特になく、夢もない私。彼女は、お父さんみたいな音楽の先生になりたいと言っていた。

反転して映るちっぼけな像が揺れる。

私は唐突に、このイヤリングがどうしても欲しいと思った。

片方でもいい。右手がのびる。もうひとりの私は左手をのばす。手のひらが大きくなる。欲しい。欲しい。欲しい……。

指先がふれたちょうどその時、ドアが音を立てた。私はすぐに手を引っ込め、振り返った。そこには、群青色のドレスを身にまとった舞琴がいた。

静かに立ち、紅く光る唇を少し開けて私を見ている。数か月前から伸ばしていた髪は後ろで束ねられ、白い首元や細い腕は露わになっている。心なしか、胸に小さなふくらみもっているようにも見える。それらが重なり合って醸し出す静謐さは、完全に大人の女性がそなえるものだった。

舞琴はゆっくりと近づいてくる。私は動けない。全身が熱を帯びてくる。

目の前まで来た。鼻があたりそうな距離。真っ青なスカートが甘い風を起こし、私の足元を浸す。背丈は変わらないのに、彼女だけ早く成長してしまったように感じる。

舞琴はイヤリングに手を伸ばすと、私がふれた方を取り、そっと私の左耳に挟んだ。弱い痛みが走り、わずかだが確かな重力が加わる。耳たぶを抑える指が冷たい。

私から指を離し、もうひとつを掴む。そして彼女自身の右耳につけると、ドレスを後ろ手におさえながら椅子に座った。私は一連の流れに呆然として、彼女の右横に立ち尽くしていた。

舞琴が指を広げて鍵盤に添える。紅いイヤリングがきらめく。深く息を吸った。

雨粒を想起させる、とても小さな雫が水面に落ちるような、繊細な一音が鳴った。

つづいて、波紋を広げるように流麗な音が連なる。雫が深くまで潜ったのだろうか、暗い低音も漂う。

そして雫は海面に近づきながら高い音を鳴らし、太陽をちらちらと跳ね返して照る波間をたづなう。

海と空と風を感じながら、ついに雫は波へ溶けた。形は消えても、唯一無二の旋律の中に在りつづける。

舞琴が選んだ曲は、G線上のアリアだった。以前、「アリアって、独唱っていう意味なの。静かな叫びなんだよ」と教えてくれた、彼女の得意な曲の一つだ。

だが今日の演奏は、これまでとは明らかに違った。遠くまで響かせるように、一音一音を大切に奏でる。ピアノから魂を吸い取るように、指先に力が込められている。それでいて、赤子を慈しみ愛でるように、鍵盤を優しく撫でてもある。

その佇まいは、成熟した女性そのものだった。それどころか、聴き手に畏怖すら抱かせるような、鬼気迫る姿をしていた。

青いドレスが晴天の海のようにゆったりと揺れる。儂い蜃気楼が鍵盤上に現れる。舞琴の演奏は、私をどこか遠くの広い海へ連れていく。潮騒にも似た緩やかなリズムは心地よさを持つ一方、嵐の前の静けさも孕んでいる。調和を乱す雑音はなく、正しく清い音だけが満ち引きを繰り返す。一定を保ったままの速度は、まっすぐに浮かぶ水平線のようだ。時間や空間を忘れ、永遠に続きそうな音色の波にただ身をゆだねる。

どれぐらい経っただろうか。音と音の間隔が少しずつ空き始めた。それでも裸足の爪先が踏み込まれ、音の生きる時間は延ばされる。消えそうになると、また次の産声上がる。命は途切れることなく紡がれながら、曖昧な木霊に姿を変えていく。ゆっくりと、静けさを取り戻していく。そして、ひと時の風が訪れた。

両手の小指と親指を大きく広げ、鍵盤にそっと置く。
息を吸った。

生まれ落ちた雫が海底へ還り着いたような一音が、舞った。

舞琴はピアノから手も足も離さない。

遠い灯台の光芒を見失うまいとするように。

大きく開かれた凜々しい眼は、私の知らない世界を見据えていた。唇は真一文字に結ばれている。動きを止めた白い指は、神々しく艶めいている。

そしてついに、最後の残響が完全に聞こえなくなった。

その瞬間、舞琴が立ち上がった。

目の前に来る。私をじっと見つめる。

ふいに、彼女の手がのばされる。私は思わず目を閉じた。

……静寂が訪れた。息が詰まる。

海の深くまで潜ったような、重い無音が耳をつんざく。

私の耳を強くふさいだ指たちは、低温やけどのようにひりひりと痛い。皮膚の奥まで熱が沁み込む。私の耳が脈打っているからなのか、演奏を終えたばかりの彼女の手が熱を持つからなのか。

そっと目を開ける。舞琴はまっすぐに私を見つめていた。眼は憂いを帯びて紅く濡れている。

瞬きのタイミングが同じなのか、常に開かれているように感じる。右耳には、私の左耳と同じ紅い珠がついている。まるで鏡を見ているような錯覚に陥る。私まで彼女の耳をふさいでいるような感覚がなぜか確かにある。いつか、私と彼女の境界が曖昧になる感覚があったのを思い出す。

部屋に入ってきたときのように、舞琴は紅い唇を薄く開いている。その隙間から吐き出されるぬるい呼吸が私を錯乱させる。すべてがひどく官能的かつ幻想的で、意識が朦朧としてきた。視界が濡れて歪み、舞琴の輪郭がぼやける。指にふさがれて反響する鼓動が、激しく速くなる。何かへのカウントダウンを急ぐように。限界まで熱せられた風船が、張り裂けそうになるように……。

——破裂。

突然、静寂が戻った。舞琴は、はっとしたように後ずさった。震える両手に目を落とす。そしてもう一度私を見ると、青に包まれた背中を向け、走って出て行ってしまった。

私は魂を吸い取られたように、何も無い部屋の床にくずおれた。ここを満たしていた音の海はとっくに干上がっていたが、記憶の水底からは、再びあの静かな叫びが溢れ出した。

「……と？」

波音のような美しい声が聞こえる。

「……こと？」

ぼんやりと眩しい。朝陽だろうか。

「まこと？」

目が覚めた。白い光に染まる床。葉や果物が混ざった匂い。開け放たれた窓からは潮風と蝉の声が入り込む。窓の向こうには紺碧の海と、雲一つない青空が広がっている。

無機質な空間の中央には、女性がいた。ベッドの上で枕を背に足をのばして、ノートを広げている。ショートヘアからのぞく右耳には紅いイヤリングがある。しばらく見つめ合うと、彼女は照れるように小さく微笑んだ。

私はまどろみながら、自分の左耳にふれる。イヤリングはなかったが、左手の薬指にひんやり

とした感触があった。その絶対的な冷たさは、一瞬にして私を過去から現在まで引き戻した。

妻は心配そうな表情を浮かべた。

「一学期終わったばかりで疲れてるよね」

左手で胸ポケットをまさぐる。イヤリングがあった。ひとまず安堵する。

「……いや、大丈夫」

答えると、彼女は緩やかに笑顔を取り戻した。

「わたし、ピアノ室行くね。あなたも休んで」

妻はノートを閉じると、そう言ってベッドから下りた。私は椅子から慌てて立ち上がり、彼女の細い身体を支える。

「ありがとう。ひとりで大丈夫だよ」

私は手を離し、妻に続いて廊下に出た。妻の部屋は最も奥にあり、一階には他にも八部屋ほどが並んでいる。リノリウムの床を一步ずつ、彼女の歩みに合わせて進む。

「……だから、もう別れてよ！」

右横から突然漏れた金切り声に、妻が肩をびくりと震わせた。

先週も遭遇したが、何度聞いても冷や汗が滲む。ここでは、罵声や悲鳴、嗚咽などを聞いてしまふことがある。「早く楽にしてください」という切実な細かい声を耳にしたときは、胸が痛んだ。

「……ピアノは楽しい？」

私は重く沈んだ空気を換えようと、妻に尋ねた。

「うん、とても」

彼女は弱く笑った。視線は床に向けられたままだった。

そのまま黙って歩いていると、玄関ホールまでたどり着いた。左側には玄関、右側には受付がある。まっすぐ歩くとピアノ室だ。観葉植物の周囲にはソファが点在していて、ちらほらと人が座っている。病院とは違って笑顔が見られる一方で、独特の閉塞感も併存している。

スタッフと挨拶を交わしつつ向かっていると、奥側のソファに座る子どもがこちらを見ていることに気づいた。Tシャツと短パンにスポーツ刈り。何度か見かけたことがある。

「あ、おはよう！」

「おはようございます、舞琴さん」

私は驚いた。少年が妻の名前を知っていること、そして笑顔で話しかけるほどの仲ではあることに。

「わたし、行くね」

妻は一瞬私に顔を向けてそう言うと、少年に向かって手を振りながらピアノ室のドアを開け、薄暗い中へ入っていった。

電気が点く前にドアは閉まった。同時に少年は立ち上がり、外へ行くとした。

「きみ、待ってくれ」

呼び止めると、少年は面倒そうに振り向いた。

「どうして妻を知っている？」

少年は私を見上げる。視線は冷やややかだ。遠くに聞こえる波音が沈黙を際立たせる。

「それより、一緒にいなくていいんですか？」

彼は小さく呟くと、また歩き出した。声変わりの途中だろうか、少しだけかすれて聞こえた。彼はあっという間に玄関を抜け、近くの横断歩道を渡ろうとしている。急いで追いかける。

「おい、答えろよ。きみ、名前は？」

横に立ち、息を整えつつ尋ねる。さらに質問を付け加えてしまったことに言ってから気づいた。少年は私を一瞥すると、横断歩道に向き直った。

「ミノルといます。中学生です。このホスピスでボランティアをされていて、舞琴さんと時々話すようになりました」

小声かつ早口で答えると、彼は道を渡った。慌てて後を追う。

少年の話しぶりは冷静で、名前はカタカナを思い浮かべてしまう。なるほど、ボランティアとは考えもしなかったが、中学生では珍しい気もする。

少年はしばらく歩道を進むと、砂浜に続く幅の広い階段の前で立ち止まった。一段飛ばしで降りていく。私は手すりを持ちながら、足元を確かめつつ降りる。

階段の一番下までたどり着くと、私は左端に腰を下ろした。足元にはさらさらとした砂が広がっている。少年は打ち寄せる波のそばまで行き、じっと俯いている。夏休み初日だが、海辺には彼のほかに誰もいない。潮騒に鳥のさえずりも混じり、高ぶっていた感情と心拍数が落ち着いてい

く。

少年は最後に数十秒手を合わせると、振り返ってこちらへ歩いてきた。影が遅れてついてくる。サンダル足跡が細長く連なる。

「海のそばまで行かなくていいんですか？」

彼は私の右横に座った。さっきよりも声が大きく、柔らかくなったように感じる。

「いいんだ。ここがいい」

私はおぼろげに浮かぶ島影を見つめながら答えた。本当は頷くだけでよかったかもしれないが、未回答だった問いにも答えるように口に出した。

彼は何も言わない。サンダルを脱ぎ、爪先で砂粒に散らばる小石や木の枝にふれている。どこかでカラスが鳴き始めた。

「……教師なんだ」

私はつい呟いた。自然と口から零れた。

「知ってます。ひとの心には海がある」

にわかには暑くなった。昼前の日差しはまだ強くない。恥ずかしさで身体が火照る。妻が教えたのだろうか。

私が国語の授業で、登場人物の心情を考えさせる際にいう言葉だ。感情は海のように広がって深く、波だっている。だからよく想像してほしいと思っている。

だが教師は点数をつける必要もある。自由なはずの想像に白黒や優劣をつけるのは心が痛む。

そんな葛藤もずっと抱えている。

そういうえば、音楽教師の妻も、歌声や音色にはそれぞれ魅力があって、成績なんてつけたくないとよく言っていた……。

私はふいに、聞き上手そうな彼に少しの間生徒になってもらおうかと思った。朝のまどろみで幼き日の妻を見てから、思い出が心の中で激しく渦巻いていたのだ。誰かに話さないと、海が溢れてしまいそうだった。

「なあ、少し歴史の授業してもいいか？」

ミノルは私の下手な比喩には反応せず、黙って頷いた。

* * *

私は高校卒業後に島を出た。この県の国立大学の教育学部国語科中学コースへ合格したためだ。親が公務員を勧めたことが国語教師を目指した主な理由だが、他にもあった。

あの日、言葉では説明できないものの恐ろしさを知った私は、反動で言葉への興味を深めたのだ。

あれから、音楽をあまり聴こうと思わなくなった。おそらく、一生分の音楽を味わったような

衝撃を受けたのだと思う。彼女の調べは、決して破れない膜を私に張った。

入学式の日には、学部ごとの説明会が行われた。資料を読み上げるだけだったため、私は最後のページにある各科の学生名簿から、珍しい名前を探して時間を潰していた。周囲の学生に声をかける勇氣もなく、資料は早々に読み終えていたのだ。

五教科の名簿を眺め終え、音楽科の名簿を目で追い始めた時、私は思わず声を上げそうになった。

5番 水野舞琴

音楽科の学生がいる右側を見渡す。私は左前方の席から目を凝らして探したが、遠くからでは見つけられなかった。

説明が終わると、私は急いでホールから出た。行き交う人波に、彼女の面影を探す。

それと同時に、あの夕方が頭によぎる。緊張と恐怖と興奮が鮮明に蘇る。彼女はあの時、何を伝えたかったのだろうか。

本人であってほしいし、同姓同名の別人であってほしい。

矛盾の渚に立ち尽くしていると、ひとりの女性が出てきた。

記憶の引力が一瞬で強くなり、生温かい感情の潮が心に満ちる。

彼女が離れていく。逃げ出したい。振り向かないかもしれない。それでも。

私は逡巡の膜を破り、叫んだ。

「まこと！」

私は手を振った。彼女が振り返り、きよろきよろと見回す。

私と目が合った。一瞬こわばった表情が、柔らくなかった。

まこと！

舞琴も手を振ってくれた。声は喧騒にかき消されたが、確かにまことと呼んだ。あの夕方にはなかった微笑みを見たそのとき、私が教育学部に進んだ理由には、この再会への期待と確信もあったのだと気づいた。

舞琴は音楽教師への道を着実に歩んでいた。中高時代もピアノを続け、高倍率の音楽科へ合格したのだ。

彼女は当時の優しい面影を残しつつ、大人の女性に成長していた。しかしなぜか、あの日の雰囲気のほうがより大人に見えた気もする。同じだった背丈が変わり、舞琴が私を少し見上げるくらいになったからだろうか。

大学時代、私たちは勉強や実習、家庭教師のバイトなどで忙しかったが、時間を見つけて会った。あの夕方のことは幻想だったかのように話題に出なかったが、彼女がたまにつける片方だけの紅いイヤリングが、嘘ではないことを静かに証明していた。

二人とも在学中の教員採用試験合格は叶わず、卒業後は非常勤講師をした。平日は授業だけを行い、週末はどちらかの家で一緒に試験勉強を重ねた。小学生時代のように、言葉は少なかった。手探りの授業や試験への不安から、お父さんみたいになれないかもしれないと舞琴が泣いた夜もあった。私は彼女の手を何も言わず握った。私が生徒一人一人の宿題ノートに長い返事を書いてそのままとうとうしてしまう夜もあった。舞琴は私の肩を揉み、「がんばりすぎないで」と言ってくれた。私たちはそうやって、少しずつ距離を縮めていった。

翌年に晴れて合格した。正式に教員になってから三年は、大学がある市の中学校でそれぞれ勤務した。一年目には舞琴と本格的に付き合い始めた。互いの勤務先はそれほど遠くなかったため、1DKのアパートを借りて一緒に暮らすことにした。

私たちは忙しかった大学時代を取り返すように、たくさん語り合い、愛し合った。彼女は担任を持っていないからという理由で、行きは早く帰りは遅い私のために毎日朝食と夕食を作ってくれた（この習慣はずっと続いた。昼は給食があるため必要なかったが、夏休みの出勤日などには手の込んだ弁当を作ってくれた）。

アパートにピアノは置けなかったが、弾ける場所があった。それは舞琴の両親の家のピアノ室だった。彼女の父親はこの頃退職し、転勤生活を終えて家を建てたのだ。私たちの家から近かったため、舞琴はたまに行き、仕事から離れた自由な旋律を奏でた。私もあの頃のようにお邪魔して、磨きがかかった演奏を堪能した。また、慣れない教師生活のつらさから、声をあげて泣いたこともあった。完全防音のピアノ室は、普段発散できない気持ちを受け入れてくれる大切な場所

だった。

私たちは三年目に結婚した。もっと後でもよかったが、理由があった。この県では採用されて三年が経つと、いくつかある離島の一つに必ず赴任しなければならぬ。もし恋人同士ならば、離れ離れになる恐れがある。しかし夫婦ならば、勤務先は違っても、同じ島内にしてくれるのではないか。そうでないとあまりに酷だし、実際に夫婦で転勤した先生もいた。

はたしてその通りになった。そして幸運にも、小学校時代を過ごした私の故郷に赴任となった。幼い頃過ごした場所の近くにILDKの一軒家を借り、再び二人で暮らした。舞琴は私の母校に、私は自転車で二十分ほどの中学校に赴任した。私はソフトボール部、舞琴は合唱部の顧問になったが、二人とも苦労した。

私は昔から運動音痴であり、キャッチボールさえも苦手だった。そのため生徒に教えるところではなかった。その自分なりに勉強して指導したが、うまくいかなかった。

舞琴が新しく顧問になった合唱部は、それまで県大会で毎年入賞していた。合唱が専門ではない彼女なりに工夫して指導したが、何年かぶりに入賞を逃したのだ。最初の頃は家に置けたことに喜んで、毎日弾いていた。ピアノにも次第にふれなくなった。音楽教師として強く責任を感じていたのだと思う。

私たちはそんな毎日に疲れたときに、海へ行くようになった。

砂浜に並んで座り、授業や部活での悩みを話した。朝陽に目を細めながら傷つけ合ったり、夕陽に涙をこらえて仲直りしたり、いろんな感情が刻まれては波に消えた。最後の頃は、私が一方

的に話し、舞琴は相槌を打つことが多くなった。

三十歳を迎えた頃、私たちは同時に島外の中学校へ転勤した。舞琴の新しい勤務先がある近くの、2LDKの一軒家に住んだ。私は車で片道一時間かけて学校へ行った。

仕事は多忙を極めた。離島の子どもの少なさに慣れきっていたため、マンモス校に勤めた私は毎日疲れ果てた。授業に加え、部活や生徒指導、PTAの運営などもあり、帰りはずっと遅かった。不登校の生徒やいじめを受けた生徒の力になろうと過剰に介入し、かえって問題を複雑化させてしまったこともあった。教師としての自分のふがいなさを悔やんだ。

そうした仕事のストレスからか、舞琴とのケンカが増えた。と言っても彼女はいつもすぐ口を閉ざし、自室にこもってしまった。しばらくすると、ピアノの音が聞こえてきた。それは日によって、乱暴な演奏だったり、短調の悲しげな演奏だったりした。私は吐き出すあてのない怒りを抑えながら、舞琴が忙しい中作った夕食をかきこんだ。変わらない美味しさが喉に痛かった。

その後も何度か転勤をしながら、私たちは息つく間もない忙しさや給料の増加と引き換えに、会話を減らす生活を送っていった。しかし、いつもなんとなく私から声をかけ、舞琴もなんとなく返事して元に戻っていた。ぬるく薄暗い海の中を、時折起こる荒波に揉まれながら、光る水面を目指して泳ぐような毎日だった。

そんな生活が続いて八年が経ったある時、光さえも途絶えた。舞琴にがんが見つかったのだ。希少がんで、確立された治療法はほとんどなかった。そしてすでにステージⅣで転移もしていたため、手術は難しかった。私は必死に冷静を保ち、治療法について医師と何度も相談した。

わずかな望みをかけて抗がん剤治療を始めたが、舞琴は嘔吐や下痢、悪寒、倦怠感などの副作用にひどく苦しんだ。抜けていく髪の毛とともに、生命力も失われるようだった。しかし治療効果は薄かった。

このままではかえって体力が低下し、命を縮める危険があると分かると、舞琴は「残りは苦しまずに生きたい」と小さく呟いた。例年よりも暖かくなるのが遅い三月のことだった。余命は半年ほどだろうと告げられた。

緩和ケアについて調べると、開業して三年ほどのホスピスがあつた島にあると知った。私たちが小学生時代を過ごした地区からは離れていたが、舞琴は「故郷がないわたしの、いちばん故郷に近いところで最期を迎えられるなら嬉しい」と笑った。

そのときふと、舞琴のがんが判明してから、私は一度も笑っていないし、泣いてもいないことに気づいた。

いつの間にか日差しが照りつけていて、口の中は砂漠のように渴いていた。ソーダ色の海を眺めると、潤いが恋しくなった。

ミノルは私のとりとめのない話を黙って聞き続けてくれた。

「ありがたう。話せてすっきりしたよ。ちょっと整理がついたというか……」

教時間前まで話したことすらなかった少年に、私たちの人生を語るの不思議だった。

「家族に話せないことも、他者になら話せます。大人に話せないことも、子どもになら話せます。整理をつけることは大事です」

ミノルは海を見つめながら答えた。

「なあ、昼ご飯でも行かないか？ 暑い中聞いてくれたお礼もしたいし」

喉の渇きに加え、空腹も私を襲っていた。昨日の昼の終業式後から今まで、何も食べていなかった。

日曜の朝一番の船で出発し、夕方の便で帰る生活を四月から送っている。教員が足りない現在の職場では、土曜日にも出勤する必要があった。

「……でも、舞琴さんはいいんですか？」

立ち上がる。軽く眩暈がした。

「いいんだ。妻はピアノに集中してるから。かえって邪魔しない方がいい」

私が答えると、ミノルは怪訝な顔をした。キャッチボールで、私が緩い球を取り損ねたときの部員たちの表情に似ていた。

「その彩魚軒にしよう」

私はズボンについた砂をはらい、海に背を向けた。

階段を上り始めても、彼の足音はしばらく聞こえてこなかった。

彩魚軒は、海辺から歩いて五分の高台にある、魚料理が美味しい老舗定食屋だ。島で勤務している頃によく訪れた。

店内は空いていた。出入口付近のテーブル席に座る。舞琴は、海がよく見えるこの席が好きだった。

注文するため、黄ばんだ壁に並ぶ料理名を眺める。誰のものか分からないサイン色紙が、薄汚れてはいるが大事に飾られている。

私はお冷を一気に飲み干して、ミノルに向かう。

「好きなものを頼んでいいからな」

彼は小さく頷いた。店内を見渡す。

「月見うどんでお願います」

ミノルはすぐを選んだ。

「ああ、わかった」

もっと高いものを頼めばいいのに、と思いながら店員を呼ぶ。

「月見うどんと、まぐろの刺身定食を」

店員が去ると、ミノルは壁に立て掛けてあるB5ノートを手に取り、興味津々な様子でめくった。下手なアニメキャラの絵や、小さな相合い傘などが映る。

「それ、面白いだろ」

このノートには客が自由に書き込むことができ、新しくなりながらも昔から受け継がれている。

私と舞琴も、今では恥ずかしくて書けないような甘い言葉を綴っていた。交換日記のように使い、次に来店するときまでのお楽しみにしたこともあった。

ミノルは熱心にページをめくる。表情は微塵も動かさない。

「何か、かいてみたらどうだ？ 絵は好きか？」

「……嫌いではないです」

伏し目のまま答える。私はふと思いついて、胸ポケットから一枚の写真を取り出して壁際に置いた。

「それなら、舞琴を描いてみるか？」

最近持ち歩いている、二十代頃の舞琴の写真だった。波打ち際で、ふいに振り向いた刹那を撮った。自然な笑顔と戸惑い。

ミノルは顔を上げると、あっけにとられたような表情を浮かべた。確かに、いきなり他人の妻を描けと言われても困るだろう。でも、私の顔なんかを描かせてもつまらないはずだ。

彼は無言でまっさらなページを開くと、大きく息を吐いた。そして左手で表紙を持ち上げ、右手のペンを動かし始めた。私からは途中経過が見えない。

しばらく彼の没頭した姿を眺めた。写真とページを忙しなく行き来する眼は真剣そのものだ。筆のペースが落ち着いてきた頃、気になったことを聞いてみた。

「きみはこっちの出身？」

「いえ、関東です。両親が島暮らしに憧れたみたいで、三年前に引っ越してきました」

「そうなのか。ご両親のお仕事は？」

「最初はカフェを開こうとしていましたが、諦めて今は会社勤めとパートで夜まで共働きです」
彼はノートに目を落としたまま、他人のことを語るようにそっけなく答えた。

「なるほど。きみは、きょうだいはいるのか？」

続けて尋ねると、ミノルは静かに顔を上げた。

「……いま、す」

これまで風だった瞳が、かすかに揺れるのが分かった。

「そうか、それは……」

「水をお注ぎしますね！」

言葉を探していると、店員がグラスに水を入れに来た。

水面は激しく揺れ、しぶきが跳ね上がる。

「それ、お姉ちゃん？ 上手だね！」

去り際、店員がミノルの絵を指差して大声で言った。

彼は耳を赤らめると、手から力が抜けたようにノートを置いて俯いた。ページは開いたままだった。

絵が目に入った瞬間、私は動揺した。

逆さまに映るその顔は、舞琴によく似ていた。凜々しい瞳と固く結ばれた唇。現在の舞琴にも見えるし、幼い頃の舞琴にも見えた。ペンで細かく描かれたショートヘアの片耳からは、イヤリ

ングものぞいている。短時間で描いたとはとても思えない完成度の高さだ。絵には、言葉や音楽とは異なる迫力があつた。

私は水を半分飲んでからノートを取り、絵の下に文字を書いた。顔を伏せたままのミノルに差し出す。

舞琴 洋琴 琴線

「ピアノは、漢字で洋琴と書くらしい。そして『琴線にふれる』は、心の底から感動する、みたいな意味だ。舞琴の洋琴は琴線にふれる、とかよく言ってたなあ。あの頃は本当に楽し」
突然、椅子が悲鳴のような音を立てた。

「やっぱり戻ります」

ミノルは立ち上がり、呟いた。ポケットに手をつっ込み、テーブルに千円札を置く。

「……後悔は消えないって、みんな言うんです」

私の顔を見ずに言うと、ミノルは歩き出した。

「おい、待って……」

「お待たせしました！」

ミノルが出ていくと同時に、店員が料理を運んできた。私の声は再び阻まれた。

月見うどんを置く場所がなかったため、急いでノートを抱える。

「大丈夫ですよ。うちの息子も反抗期あったから。ほうっておくのがいちばんです」
私は店員を見て、曖昧に頷いた。彼女の立て続けの勘違いをなぜか否定する気になれなかったし、ミノルを追いかける気にもなれなかった。

目の前で湯気を上げるうどんの卵の丸さと、冷たそうなまぐろの切り身の暗い赤さが、胸ポケットで片方眠っているイヤリングを思い起こさせる。

胸に抱えた絵に目を移すと、舞琴が私を見つめていた。こうして向かい合うと、あの夕方の彼女にそっくりだった。

私は手をのばしてペンを取り、舞琴の顔と文字の下の余白に小さくこう書いた。ほとんど反射的な行動だった。

ほんとうに、すまなかった。

* * *

舞琴の病が分かってから、私はずっと後悔している。心臓の色をしたイヤリングの片方をもらっ

たあの日から、彼女の大切な半分を奪ってしまったのではないかと。

私が舞琴の生命を削ったのではないかと。

彼女がご飯を作り続けてくれたが、私は一回でも料理したことがあったか？ 彼女も島に来てからは担任を持っただけではないか。というより、その前から忙しさは変わらなかったのではないかと。他の家事だって、私はちょっとした掃除やごみ出しをしたくらいで手伝った気になっていた。長い間、舞琴の身体に重い負担をかけてきたのではないかと。

それに、ケンカも。彼女が自室にこもってからは、「弾くな、うるさい」と怒鳴ったことは一度や二度ではなかった。彼女を部屋に戻らせず、意味のない文句を長々とまくしたてたこともあった。自分のストレスを発散するために、舞琴の心をすり減らしてきたのではないかと。

私は加害者だ。

私が舞琴の人生を決めたのではないかと。

たとえば、子どもについて。よく議論もしないまま、「生徒たちが子どもみたいな存在だし、二人とも忙しいから、いらぬんじゃないか」と若い頃に言い放ったのは私だった。舞琴は、三十歳までに落ち着いたら子どもが欲しいと言っていたはずだ。実際は子どもどころか、愛を交わすことも減っていった。

そして。元を辿れば、私から舞琴に告白したのだ。もしかしたら彼女は、私の願いを断れなかつ

ただけではないか？ 幼い頃三年間を過ごし、中高は離れたものの大学で再会し、常に私がそばにいた。私以外と付き合ったことはないし結婚前に言っていたが、私という中途半端な幼なじみの存在がいる以上、新しい出会いや関係に踏み出せなかったのではないか。

私は邪魔者だ。

私が舞琴の感情を奪ったのではないか。

彼女は年を重ねるにつれて、おとなしくなっていた。小学生の頃は快活な少女だったが、大学生の頃には物静かな女性になっていた。私の同僚は、お前の妻は地味だと言っていた。舞琴も、他の先生と話すときに比べて、自分と話すときは生徒がよそよそしくなると吐露していたことがあった。

この変化は、ひとえに内向的な私のせいではないか？

小学校時代に私がいなければ、彼女はピアノばかり弾くのではなく、もっと外で遊んだり、友だちと話せたりできたのではないか。彼女をピアノ一筋の道に進ませたのは、私ではないか。舞琴はそれで、幸せだったのだろうか？

よく考えると、舞琴がいまピアノに夢中になっているのも、彼女の悲しむ権利を私が奪ったからではないか？ 時折見せる活力に溢れた表情も、すべてを悟ったような微笑みも、奪われた涙の後にわずかに残った欠片なのではないか？

過酷な治療を拒み、ホスピスに入ることを選んだ舞琴に対して、「ゆっくり死ぬようなものじゃ

ないか！」と私が声を荒げたときでさえ、彼女は私を責めず、泣きもしなかった。

私は強奪者だ。

都合のいいことばかり思い出す、卑怯者だ。

ひとりで月見うどんも食べた私は夕方まで部屋にいたが、舞琴はピアノ室から戻ってこなかった。

八月中、私は週二回ほどのペースでホスピスを訪れた。夏休み中も部活や二学期の授業準備などがあり、なかなか休めなかった。

「夏休みだからもっと来て、そばにいてあげてください」

「がんの進行で、話すことも難しくなるかもしれません」

ミノルは私に会うたび、そう声をかけた。私は気まずさが拭えず、曖昧に返事していた。

舞琴は、これまで以上に身体の痛みを訴えるようになった。また、少し怒りっぽく私と話そうとしない日や、呆然として話しかけても返事が遅い日が増えた。これが「がんの進行」なのかと思った。不穏な変化が増えるのに比例して、彼女はよりピアノ室に行くようになった。

八月下旬になると、ミノルを見かけなくなった。スタッフに尋ねると、体育祭の準備や練習で忙しくなったらしい。体育祭は九月中旬に行われるらしく、私が日曜日だけ来るようになっても

会わなかった。

九月最初の日曜日、舞琴は朝からピアノ室にこもっていた。到着したときからいなのは初めてだった。私は昼前には外に出た。

海とは反対側に二十分ほど歩くと、交通量が増えてくる。派手な色をした目的地は、海の見えない県道沿いにそびえ立っている。

自動ドアをくぐる。自然の音が消失し、人工的な爆音だけが鼓膜を激しく震わす。狭い通路を奥まで進み、虚構の海が爛々と輝く台に座る。紙幣を挿入して玉貸ボタンを押すと、どれも全く同じ銀の玉が大量に溢れ出てきた。

軽快な音を背に、似た顔の魚たちが右から左へ泳いでいく。バラバラに動き、全く揃わない。何も考えずにひたすら打ち続けていると、画面に大量の泡が吹き出してきた。チャンスかもしれない。しかし身を乗り出すこともなく、ただ画面を見つめる。

案の定、期待外れだった。非現実でも奇跡はそう起きるものではない。八千円が三十分ほどで泡沫のごとく消えた。

ひととき賑やかな音がしたため隣を見ると、同年代の男性が大当たりを引きあてていた。玉が洪水のように溢れ出てきている。しばらく彼の幸運は続きそうだ。

目を閉じて、胸に手を当てる。指先に写真とイヤリングの感触が伝わる。無尽蔵な銀の玉のように、紅い珠もたくさんあればいいのと思う。永遠に尽きないほどではなくていいから。

以前から、仕事で疲れたときはたまにパチンコに行っていた。台に向かっているときは面倒事を忘れられた。人々が無言で孤独に戦う場所は、不思議と心地よかった。舞琴は、煙草の匂いをつけて帰ってきた私に何も言わなかった。

私は八月頃から、舞琴がピアノ室にいる間に再び行くようになった。打っている最中は後悔を頭から追い出すことができたが、終わると再びなだれ込んでくる。

私は無数の玉を見るたび、二つしかない紅い珠を思い出した。そしてある時から、こう思い始めた。

これを返すべきかもしれない。

あの黄昏時、私は本当に彼女からイヤリングをつけてもらっただろうか？ 手に取ろうとしたところまでは憶えている。しかし、実は舞琴の艶姿を目にしてからは、陽炎のようにぼんやりとしている。演奏も幻聴だったかもしれないし、耳をふさいだのも私かもしれない。

私はあの紅い石を奪ったのではないだろうか。あの時、猛烈に欲しくなったことは確かだ。當時は言語化できなかったが、舞琴への憧れや嫉妬もあったと思う。彼女につけてもらったという記憶に、都合よく書き換えているのではないか。

欠けた半分を返せば、彼女も元気を取り戻すかもしれない。まさに心臓のような、舞琴の大切な一部だったからだ。

だがこれを返すと、私が抜け殻になってしまうような予感もぬぐえない。あの日から肌身離さ

ず持ってきた紅い珠は、すでに私の一部でもある。もしなくなれば、私の生きてきた証と生きていく標が消えるような底知れぬ恐怖がある。

……いま舞琴は、私を拒絶している。姿を見せなくなったのは、私と離れたいからだ。ろくでもない男と生きてきたことを後悔している。残りの毎日、ミノルやスタッフに温かく見守られながら、ピアノを楽しく弾いていた。

私が彼女のためにできる最善策は、会わないことだ。私は舞琴の人生を、台無しにした。国語教師のくせに、かけられる言葉をひとつも持てなかった。会わないというより、会ってはいけない。

大切な人の最期によりそう資格があるのは、映画や小説の主人公みたいに、まっすぐに愛してきた者だけだ。似た状況に置かれた彼らと私は全く違うのだ。

私はそう言い聞かせることで、パチンコに通い続け、紅い珠を返さなかった。空腹を忘れ、夕方まで機械の生み出す喧騒に居場所を求め続けた。

いつの間にか九月も終わりに近づき、約束の半年が過ぎようとしていた。

暑さが和らぎ、小糠雨も冷たい九月下旬。

私は開店からパチンコへ来ていた。九月に入ってから、舞琴とはほとんど会っていない。先週の日曜は私の学校でも体育祭があり、来られなかった。振替休日に行けばよかったのかもしれない。

いが、身体が動かなかつた。それは疲れが原因だった、はずだ。

今朝も、舞琴はピアノ室にいるようだった。私は部屋で待つこともなく、早々にホスピスを出た。

先ほど打ち終わったが、今日は少しだけ勝った。もちろん、これまで消えた金額を考えると、全く取り返せていない。だが、最近はお金を無駄にすることへの抵抗感はなくなった。むしろ、もっと後悔したいと思つている。より深い海底に巣くう自己嫌悪ごと攫つてしまふような悔いを。腕時計は午後三時を指している。雨は本降りになっていた。

店の前の広い駐車場に出ると、誰かが立っていた。傘で顔はよく見えないが、ここにはふさわしくない背丈と格好だ。

傘を開いて、その人のもとへ向かう。

「久しぶりだな、ミノル」

彼は傘を前に傾けてさしている。

「これ、食べるか？」

私は景品のお菓子を彼に差し出した。右手が雨でしどどに濡れていく。彼は静止したままだ。

「いらぬなら、無理には……」

手を引っ込めようとしたとき、急にミノルがお菓子を掴み、その場にはたきおとした。小さな水しぶきが上がった。

突然のことに驚いた私の手から、ゆっくりと力が抜けていった。

「追ってみたら……何してるんですか。舞琴さんにずっと会ってないですよね」

彼はそのままの姿勢で呟く。よく見ると、ズボンや靴には黒い染みが広がっている。

「……まさか、ずっと待ってたのか」

「あれだけ言ったはずですよ。今後は話すことも難しくなるかもしれない、と」
いつも通り冷静な声でミノルは話す。

私も確固とした言葉を探し、湿度を含む空気を吸う。

「……でも、妻は私と会わないんだ。私を拒絶している。私は妻にしてきたことを後悔しているし、彼女も私と出会ったことを後悔しているはずだ」

傘に弾かれる雨粒の音が私の心をかき乱す。海の温度が上がっていく。

「妻はピアノを弾くのが楽しいと言っていた。もう俺はいない方がいいんだ。……俺が悪いんだよ、全部。だから、いない方が」

「ひとの心には海があるって言ったのは誰だよ！」

ミノルが叫んだ。雷鳴のように重く響いた。

傘を上げ、彼が私を強い眼差しで見つめる。

「あなたは海に近づこうともしていない。想像の海で溺れてる。遠い過去の空を眺めてる。夜の海の絶望的な暗さを見たことがない。……言葉がすべてじゃない！」

アスファルトに叩きつける雨音が耳に痛い。

「舞琴さんはピアノ室で弾いてばかりじゃない。それも考えたことないでしょう？ 何のために

こもっているのか、身体も痛いのになぜ行くのか」

沈黙。号泣のような雨は止む気配すらない。

「……僕には妹がいます。いました、と言った方が正しいのかもしれませんが」

ミノルは再び顔を隠した。たまっていた水滴が一気に私の足元へ流れ落ちる。

「三年前、この島に来て初めての夏でした。小学五年生だった僕は、一年生の妹を連れて、あの海に行きました。正確には、夏休み最後に海に行きたいと言った妹を連れていくよう、両親に言われたのです。

両親はカフェを開くための準備で忙しく、行けませんでした。母は『楽しんできてね』と妹の頭を撫でました。父は、妹がケガしないようよく注意しろと強く僕に言いました。

昼過ぎの海には誰もおらず、二人で階段に腰かけて両親の作った弁当を食べました。妹の弁当はアニメキャラをカラフルなおかずで再現したものでしたが、僕の弁当にはその余りものが雑然と詰められていました。

食べ終えると、海に入りました。以前訪れたとき妹は浮き輪を使っていましたが、その日は家に置いてきていました。しかし妹は水に恐怖心がないようで、僕と水をかけ合ったり、水面に浮かんだりして楽しそうでした。まだできたばかりの真っ白なホスピスが眩しかったのをよく覚えていません。

陽射しも少し弱まってきた頃、妹は遠くまで泳ぎたいと言いました。僕は正直疲れていたため、見ているからひとりで行ったらと言いました。妹は嬉しそうに笑うと、波打ち際に座る僕から遠

ざかっていききました。

僕はしばらく見ていましたが、まだ背も低いし、それほど深いところまで行かないだろうと思えました。僕は海から上がっていたためか尿意を催していたので、近くのトイレに行きました。

一、二分で戻りました。小さいですが妹の姿は見えます。また浮いて遊んでいるのだろうと思えました。

しかし、数分くらいそのまま動きません。僕はさすがに心配になり、妹のもとへ向かいました。たどり着くと、妹はすでに息をしませんでした」

……再び沈黙が訪れる。雨は容赦なく降り注いでいる。

「死は突然です。後悔したって遅いんです」

ミノルは傘を後ろに倒し、私を見た。

「自分が今でも嫌いです。両親の愛情が妹にばかり向けられていたと思い、心の奥では妹に嫉妬していたこと。まだ両親に甘えたかったこと。疲れなど我慢して一緒に泳ぐべきだったこと。小便くらいその場で垂れ流してでも、妹から目を離すべきではなかったこと。妹はたぶん溺れていると分かっていたのに、すぐには動けなかったこと。それは無意識に彼女を苦しめたかったのではないかということ。妹のことは決して嫌いではなく、大好きだったこと。僕のせいで、両親がカフェ開店を諦めたこと。僕のせいで、妹が……」

ミノルは声を詰まらせ、俯いた。

「……心の海で溺れるのは際限がありません。僕もずっと後悔に苛まれていました。今も同じで

す。だからこそ僕は、できることをしなければならぬと思いました。それで、海のそばのホスピスでボランティアを始めました。常に妹のそばにいて、死に近づく人のために尽くす。罪は消えませんが、自分なりの罪滅ぼし的なことだと思っています」

ミノルが一步近づき、私を見上げる。眼は紅く染まり、唇は蒼く震えている。気魄に満ちた表情だった。

「後悔しているなら、逃げるのではなく、向き合ってください。真摯に向き合っても許されなくてはじめて、離れることが許されるんです。

誠さんは逃げることができます。でも、舞琴さんは逃げることはできません。選ぶことができないのは誠さんだけなんです。どうか、よく考えてください」

ミノルは深々と頭を下げると、背を向けて走り去った。

私はひとり残された。

駐車場の車に灯りは無い。土砂降りは続いている。

ミノルの言葉が私の心に激しく打ちつけ、奥まで沁みわたる。

……私は教えるばかりで、何も分かっていなかった。

死が近づくにつれて、舞琴がいなくなる現実には耐えられなくなった。言い訳を並べて逃げた。彼女をひとりにした。

止まない雨は、舞琴が流してきた涙だった。

一歩ずつ足を進める。じっくりと言葉を選んでる時間はない。

傘を捨てる。雨の矢を全身で受け止める。目や鼻、口に水が刺さる。舞琴の苦しみを逃さぬよう、すべてを吸収する。

そして、走り出す。

曇天の下の海は荒れていた。私はずぶ濡れのままホスピスに入る。ロビーには誰もいない。左に曲がり、ピアノ室の前に立つ。一度深呼吸をして、ドアを開けた。

初めて見たピアノ室の中は青黒く、深海のようだった。心なしか、外よりも冷たく感じる。

ドアが自動的に閉まり、室内は無音に包まれた。

舞琴は、グランドピアノの前に座っていた。ピアニストが演奏を始める前のように、両手は太ももの上に重ねられている。純白のワンピースに、右耳には紅いイヤリング。こちらを見ない。

私はその場に立ったまま、口を開く。

「これまで、現実から逃げてきた。向き合えなかった。舞琴の苦しみを、ずっと分かつたとしてこなかった。自分の弱さ、どうしようもなさを盾にして、目を逸らしてきた。ふさわしくない言葉ばかり選んできた」

喉に鈍い痛みが走る。舞琴とケンカした後いつも感じていた、罪深い痛み。下を向くと、濁った水が輪を広げていた。

「舞琴の体と心に負担をかけてきた。夫として果たすべきことをしてこなかった。大切なものを

奪った。閉じ込めた。本当に情けない男で、ごめ」

「黙って」

舞琴が静かに呟いた。顔を上げると、彼女が私を見ていた。身体ごとこちらに向けられている。

「謝るのはいつも、誠が先だね。相手を傷つけるけど、結局は自分がいちばん傷ついてる」

ずっと聞きたかった優しい声で、舞琴は私に微笑む。

「わたし、つらかった。死が怖くてたまらなかった。でも、誠に苦しい顔を見せたくなかった。

体と心に起こる変化が、いつか誠を傷つけてしまいうそで怖かった。自分のせいだなんて思って

ほしくなかった。苦しめたくなかった」

舞琴はそっと白いハンカチを取り出し、目尻を抑えた。

「……でも、もっと話すべきだった。助けを求めるべきだった。言葉にすると、言いたいことが

うまく言えない気がいつもしてた。どんなに言っても足りない気がして、何も言えなくなった。

だから、わたしは音に逃げてきた」

……私は、言葉に逃げてきた。舞琴を想うがゆえに、舞琴を傷つけて、自分も傷つけた。舞琴

を失いたくないがゆえに、自分だけを見て、静かな叫びを聞かなかった。

「あの夕方も、言いたいことがいっぱいになって、音で表現しようとした。そして、わたしを忘

れてほしくなくて、耳をふさいだ。わたしこそ、あなたを閉じ込めてしまったのかもしれない」

そのとき、私の中で何かが決壊した。崩れ落ちる。

「なんで……なんで舞琴なんだよ！ 俺が悪いだろ！ 舞琴は何も悪くない。おかしいだろ。俺

の方が先に死……」

溢れ出る涙と鼻水、そして頭から垂れる雨水が口に流れ込み、言葉が出なくなつた。喉が燃えるように痛い。出てくるのは言葉にならない叫びだけだ。ふがいない音だけが響く。

……そうだ、舞琴がここにこもっていたのは、防音だからだ。人目を気にせず、いくらでも泣ける場所だからだ。

私はミノルの言っていた意味に今さら気づき、そのありがたさを実感した。防音であることを利用して二人で泣き叫んだこともあったのに、今まで思い出さなかつた。

床に突っ伏して、子どものように泣きじゃくっていると、ふいに両耳を掴まれた。強くふさぐのではなく、指で耳たぶを包み込むように。

ゆっくりと頭を持ち上げられる。涙で渗む視界の先には、舞琴がいた。手を離すと、ハンカチで私の涙や鼻水をふいてくれた。そして、別のタオルで髪や顔全体、首元の水分を取ってくれた。舞琴はそれらを丁寧に畳んで隅に置くと、ピアノの前に時間をかけて戻った。椅子を指差し、私に微笑みかける。

「隣に座って」

私は頷き、立ち上がる。びしょ濡れの靴下を脱いで、タオルでズボンの後ろを拭く。そして、手招きする彼女の右隣に座った。

「わたしが適当に音を鳴らすから、誠も適当に鍵盤を叩いてみて。そっちは高い音だから、そこそこいい音に聞こえるはずだよ」

そう言うのにやりと笑うと、舞琴は裸足をペダルにのせ、勢いよく音を鳴らし始めた。リズムやコードを無視して、ただめちゃくちゃに音を生み出す。左手薬指の指輪が激しく光る。

呆然と見ていると、舞琴は私の左手をとって、鍵盤に置いた。

音が鳴った。時間割を間違えて教室に入ってきた先生のように浮いていた。そもそも整ったメロディではないため当然だった。

しかし、様々な音を鳴らすうちに、だんだん楽しくなってきた。

あの日の演奏からは静かな海を思い浮かべたが、今日は荒波、輝く波間、暗い海底、海鳴り、平穏な風など、あらゆる海の姿が凝縮されて浮かび上がった。

即興演奏と呼ぶにはあまりにひどい出来だったが、二人のためだけの連弾を評価する者はいない。私たちは、時折笑い合いながら、鍵盤を叩き続けた。夫婦で初めての演奏だった。

連弾を終えると、心がすっきりと落ち着いていた。私は今しかないと思い、胸ポケットからイヤリングを取り出した。

返そうとして舞琴に差し出すと、私が言葉を発する前に取られてしまった。そして、彼女はあの日のように、私の左耳にイヤリングをつけた。もう痛みは感じなかったが、重みは加わった。

舞琴が私にもたれかかった。耳と耳がふれあい、珠が美しい音を鳴らす。

「戻ってきてくれてありがとう」

久しぶりに感じる彼女の体温に、泣きそうになる。舞琴も同じなのか、少し鼻をすすっている。「もしかしたらわたしたちは、あの日で終わりだったかもしれない。だけど会えた。だからき

とまた会えるよ」

舞琴が確かめるように頷く。私もつられて頷く。

「イヤリングを分けあって、繋がってた。まるで結婚指輪みたいに。ほかの夫婦の二倍、大きな力で繋がってた。幸せも苦しみも悲しみも、ずっと分けあってきた。わたしたちは互いになくはない存在だった」

それぞれの耳からは、血の流れる音が聞こえる。とても身近な、生きている証だ。

「誠はいつもそばにいてくれた。幼い頃の放課後はもちろん、離れた中高時代も心にいた。苦しい夜も、手を握ってくれた。遠くに赴任したときも車で通勤して、毎日帰ってきてくれた。

誠には不本意かもしれないけれど、わたしはあなたがそばにいて嬉しいの。言葉はなくてもいい。実はわたし、転校してきたとき、ピアノが上達しなくて悩んだ。でも、誠がいつも何も言わずに聴いてくれたことで、気楽に、自由に弾こうと少しずつ思えるようになった。聴いてくれる人がそばにいる安心感で、わたしはピアノが大好きになった。ついでに誠もね。もし誠が何か奪ったんだとしたら、それはわたしの心だよ」

舞琴が恥ずかしそうに笑う。にわかには耳が熱くなったが、たぶん二人ともだろう。

「わたしと誠が感じたこと、悩んだこと、過ごしてきた毎日、すべてがまことの海にあるんだと思う。嘘なんかじゃない、まことの海に。だから、自分を責めすぎないで。まことの気持ちを大事にして。そして、そばにいて」

私は左腕をのばし、舞琴の肩を抱き寄せた。舞琴は右腕を私の腰に回した。

「見つめあうのもいいけど、同じ方を見るのもいいな」

ここから見える壁だけは、水色に似た青白さだった。私たちはしばらく、海を温かく見守る空を眺めた。

十月に入っただけで、舞琴のリサイタルが開かれた。

「泣いてばかりじゃないよ。ピアノも弾いていたんだよ」

そう語った舞琴のために、ピアノを弾く場を作れるかどうか、ミノルと一緒にスタッフに相談して実現した。

深海から出た。ピアノを、舞琴は丹念に奏でた。よく晴れた日で、海風を浴びながら笑みを浮かべていた。私たちの小学校の校歌や童謡など様々な曲を弾いた。ホスピスの人々もみんな笑顔で手拍子したり、口ずさんでいたりした。『ふるさと』を弾いたときは、涙を流すおばあちゃんもいた。

リサイタルの最後は、作詞・森川誠、作曲・森川舞琴のオリジナル曲弾き語りだった。舞琴は私に歌詞をつけてもらおうと、短い曲を作っていた。私はもちろん作詞の経験などなかったが、舞琴への感謝を込めて書いた。初めての共作だった。

ひとの心には海があると

あなたは私の空をひらいて教えてくれた

紅い輪からまばゆい笑みをそそぐ

あなたの音は海をおよいで届いています

どこにいても そばにいます

歌い終わると、溢れんばかりの拍手が沸き起こった。会場が一体となった。イヤリングを両耳につけ、舞琴は深々と礼をした。私が一日だけ返すことをお願いしたのだ。

だがこれでお開きではなかった。ミノルが一步前に出て、アンコール！ と叫んだ。周りの人々は驚いていたが、もちろん事前に三人で計画済みだった。私も一緒になって叫ぶ。

アンコールで弾いたのは、G線上のアリアだった。

あの日ピアノからもらった力を返すように、感謝するように、一音一音を繊細に鳴らした。これまで、私たちの結婚式や身近な人の葬式、さらには給食の時間など、この音楽を聴く機会は何度もあった。しかし、舞琴のアリアはやはり別格だった。私は彼女の姿と音の一つ残らず焼き付けようと、じっくりと堪能した。

旋律の海が静かに凪いだ。同時に、会場は再び拍手に包まれた。今度はなかなか鳴り止まなかった。私はミノルに押し出され、舞琴の横に並んだ。私が舞琴に向かって拍手すると、彼女は私に向かってピースサインをつくり、にこりと笑った。

それ以降、私はできる限り仕事を減らし、平日や夜も来るようになった。休もうと思えば休めるものだった。

私たちは海まで行き、たくさん話した。お互いに知らなかった楽しくてつらい思い出を共有した。同じ学校で教えたことがないため、見てきた景色も違って新鮮だった。

人生や死後について語り合うこともあった。

ある日。真昼の月がはっきりと見えた日。

「人生を例える言葉っていっぱいあるけど、わたし、いいもの思いついた」
「教えて」

「人生は、長い長い交響曲の、たった一音みたいなもの。でもその一音の輝きは、なくてはならない。楽譜は受け継がれて、残響はいつまでも消えない。どう？ 誠先生」

「素晴らしい。教科書にのせたいよ」

「ありがとう。国語の授業でみんなに言ってね」

ある日。夜空の星が瞬いていた日。

「わたしたちって、生まれる前はずっと『死んでた』ようなものじゃない？」

「言われてみれば、確かに」

「だから、慣れた姿に戻るのに、恐怖なんていらんのかもしれないね」

「そうだね。流れ星くらい短い人生で、舞琴と会えてよかった」
「わたしも。……ここで流れ星が見えたら完璧だったね」

ある日。金木犀の匂いがどこからか漂ってきた朝。

『別れてよ』って叫んでた女性、いたじゃない？」

「うん、あの時は驚いたよ」

「あの女性、この前亡くなったんだけど」

「ああ、そうだったんだな」

「そう。わたし、彼女は区切りをつけたかったんじゃないかと思うの。自分が死んだ後、夫の悲しみを強まらせず、新たな人生を始めさせるために」

「……俺は、別れたくない」

「安心して。わたしは誠が嫌がったとしても別れないよ」

「……」

「冗談よ。でも、わたしを想うことと、ほかの人を想うことは別だと思う。あなたはまだまだ若いから。もし誰かを好きになったら、その人も一緒にたまに来てくれたら嬉しいな。この海に」

朝晩は冷え込み始めた十月中旬になると、舞琴は少しずつ口数を減らしていった。見るからに

衰弱していた。移動や食事、入浴の手伝いをスタッフと交代して行なった。舞琴は時折、思いきり泣いたり、怒ったりした。私はただ、そばにいた。

下旬になると、舞琴はほとんど言葉が話せなくなつた。それでも、無言の視線で会話をした。水分が失われていく手は、とても冷えていた。冷静なミノルも、一度彼女の前で大きく泣いた。舞琴は、彼の頭を優しく撫でた。

最後に海へ行ったのは、十月末だった。車椅子に乗った舞琴の体温のない手を握って、紅紫の羽衣のような美しい夕焼けと一緒に眺めた。鏡のごとき夕凧の海は、ピアノの白鍵にも似た羽雲を映していた。生涯忘れられないだろう美しさだった。

陽が沈む少し前に、私は痩せ細った舞琴を抱きしめた。胴体や背中が最期まで温かいと聞いていたが、その通りだった。私はこの温もりはもうすぐ感じる事ができなくなるのだと余計なことに気づいてしまい、彼女の背中に大粒の涙を零してしまった。もう二度と泣くまいと思っていたのに。背中を冷ましたくないのに。舞琴の姿をかき消すような邪魔な水なんて出したくないのに。しかし止めようと思っても、眼から頬を伝い落ち続けた。声にならない嗚咽で、なんとか「ありがとう」と伝えた。舞琴は最後まで情けない私を、残された力でぎゅっと抱きしめてくれた。

その三日後、燦然と輝く朝陽がひき潮の海を照らす午前七時、舞琴は眠るように旅立った。

背中を守るコートが必須になった、十二月中旬の昼下がり。

私は渚に立っていた。冷たいひき潮が素足を濡らして還っていく。風が運ぶ生ぐさい潮の香りは、生命の匂いだと気づいた。

「そういえば、ミノルって漢字でどう書くんだ？ 誠実の実か？」

「ああ、言っていないませんでしたね。海の流れでミノルです」

「……海流か。いい漢字だな」

「キラキラしてるし、まこの命を奪った正体だったから嫌でしたけど、まことさんに会ってから好きになりました。……あ、まこは妹の名前です。偶然にも。ひらがなで、まこ」

私の右横で、大きなコートに身を包んだ海流が教えてくれた。

「いい名前だ」

「でしょう？ 舞琴さん、まこを抱きしめてくれますよ」

「ああ、よかった。まこも寂しくないだろうな。舞琴は海でも音を奏でているだろうし、意外とよく喋るからな」

葬儀後は、舞琴の希望で散骨をすることになっていた。この前、海の方こうで散骨をしたのだった。

「墓ならとどまることしかできない。でも海なら波があつて動けるから、生きている感じがする。遠くまで行くこともできるし、ここにいてもできる。その自由さがいいの」

散骨を始め、自分が亡くなった後のことを、舞琴はノートにまとめていた。彼女がベッドの上でよく広げていたのは、これだった。思い出の品の整理や知人の連絡先といったものから、私の大好物だった白だしの唐揚げやじゃがいもの大きなコロッケなどのレシピまで、様々なところで気を配って書いてくれていた。オリジナル曲『まことの海』の歌詞付き楽譜が最後のページを飾っていた。

私は舞琴の死後、教師としての日常に戻った。もちろん舞琴とずっと過ごしたかったし、ひとりの家で毎晩泣いた。しかし、ある程度後悔がなくないくらいには舞琴と話すことができたし、ふれあえたことが救いだった。最期までそばにいたことができて、幸せだった。

イヤリングは、二つとも私がつけている。

「燃やすのはもったいないよ。なくても生きていける。あ、もうそのときはわたし、死んでるか」海を見つめる。風に淡く揺れる海面のきらめきが、舞い散る雪のように思える。

「海になったんだな。体は溶けて、心の海は、大きないのちの海へ。どこまでも遠くと繋がるこの海へ。みんな、いずれは海になる。少し早いか遅いかの違いだ。あの日も今日も百年後も繋がっている。あまり悲しまなくていい。もともと海を持つものだから」

誰も死んでからのことは分からない。だから、天国でもあの世でも海でも、何でも考えていいと思うのだ。

「さすが国語の先生ですね。でも……」

海流はそう言うと、コートのポケットを探る。

「これ、見てください。両親と月見うどんを食べに行ったときに、見つけました」
受け取ったのは、B5ノートの一ページだった。広げる。

舞琴 洋琴 琴線

ほんとうに、すまなかった。

二つ間違っています。まず、ほんとうに、じゃなくて、まことに、でしょう？

あとひとつは、謝らなくていい、ってこと。

どちらも先生とは思えない、ひどい誤答ね。今度補習です。しっかり学び直さないとね。
でも、あんまり早く来ちゃだめよ。

誠の妻、舞琴

P・S・

海流くんは絵もピアノもまことに上手ね！ 将来は先生になってほしいなあ、なんてね。

好きなことをして、元気で健康に過ごしてね。

誠、あなたもだよ。どうか、よろしくね。

舞琴の絵の下に、丸みをおびつつも力強い、彼女の懐かしい文字が紡がれていた。心の海がじんわりと温かくなる。

「海流、舞琴からピアノ習ってたのか？」

さりげなく書いてあったが、一番引っかけたことを尋ねる。

「嫉妬しますか？」

なんとませた返しだろうか。耳のあたりを、いじわるそうに海風が撫でていく。私がいなくて、子どもと大人の狭間を生きるこの少年が、舞琴のそばにいてくれたのだ。

「……俺がどれだけまことを好きだと思ってるんだ？ それぐらいで落ち込むかよ」

海流は私を見て微笑む。

「よかったです。やっと自分のことも好きになってくれましたね」

私も海流の方を向く。

「海流も、罪滅ぼしはほどほどいい。その年で他者の死に寄りそうのは心に負荷が大きすぎる。

舞琴が言うように、絵でもピアノでも、好きなことをした方がいい。まこの分まで、楽しく、精一杯生きる。それは海流にしかできないことだ。そして、まあ大丈夫そうだが、両親ともよく話せよ。あと、友だちはいるのか？ 少しはいた方がいいぞ」

「先生みたいなこと言わないでくださいよ。まあ、舞琴さんもほぼ同じこと言っていましたけど。……うん、僕も大切な人を愛せる人になります」

私と海流は、同時に頷いた。大切な相手を見送った者どうしの心の海が繋がった瞬間だった。「よし、海流。海に入るぞ」

海流は顔をしかめる。心の海は再び離れてしまった。

私はコートにシャツ、ズボンを脱ぎ、海水パンツだけになった。寒すぎて全身の鳥肌が立つ。

「このために用意してきたからな。海流もそうだろう？」

「入るなんて聞いてませんよ」

「終わったら彩魚軒であったかいもの食べさせてやるから。今度こそ、一緒に食べよう」

「すぐく元気ですね。さすが先生」

海流の棒読みの褒め言葉を聞き流し、私は海に入った。今すぐ引き返したいくらい海は凍てついていたし、風は全身を棘のように突き刺す。

「舞琴！ まことー！」

私は後悔を振り払い、震える両手を口元にそえて叫んだ。そして膝立ちして、紅い珠のついた左耳を海に浸す。素肌で舞琴とふれあう。

あの日耳をふさがれたときの音、あの日耳と耳を合わせたときの音、どちらにも似た音が流れていた。

「誠さん！ 風邪ひきますよ！ 舞琴さんの言葉、さっそく守ってないじゃないですか！」
海流の呆れた叫びが右耳から聞こえる。しかし、近づいてくるのも分かった。まことに優しいやつだ。

「舞琴、いつでもそばにいるからな」

私は揺れる声で語りかけた。

ささやかな陽の光が耳を温かく染める。

海のどこかで、涙が一滴零れるような、柔らかな一音が舞った。

（文学部総合人間学科三年）

選考を終えて

東光原文学賞 総評

選考委員長 坂元 昌樹

文学者のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、英米文学を中心に各国の文学について多数の評論や講義録を残していますが、実作者の立場から創作論についても語っています。その創作論の中で、ハーンは人間が人生の途上で経験する悲哀や苦悩が偉大な世界文学の土壌となってきたことを論じた上で、学生に向けて「人生の困難に直面して、どうしてよいかはつきりわからない時には、座って何かを書きなさい」と述べています。そして、そのようにして書かれた文章が、何度もの書き直しを経て優れた表現へと昇華する可能性を語っています（英文学講義『人生と文学』）。その創作論は、生涯「書くこと」に向き合ったハーンの思考を語って興味深いものです。

附属図書館の主催で歴史を積み重ねた東光原文学賞は今年度で第十五回を迎えましたが、今回から本賞の企画を学長賞と附属図書館長賞へとりニューアルすることとなりました。選考委員も、新たに熊本日日新聞社の農孝生先生、橙書店店主で文芸誌『アルテリ』編集長の田尻久子先生、本学の畑垂矢子先生をお迎えして審査を行いました。今年度の応募作品も、それぞれの応募された方の「書くこと」に対する真摯な姿勢が窺われる作品揃いでした。今回の選考に携わった一人

として、多くの優れた応募作品を拜読する機会を持てたことに感謝しております。

学長賞を受賞した「紡がれし者たち」は、「河童伝説」を物語の背景として一人称「僕」の経験した出来事を語る作品です。河童の血を引く少女の一家と語り手の交流を描くプロットに魅力があり、語り手に加えて、少女とその祖母を含めた登場人物も巧みに造型されていました。語り手自身が河童の血を引くことが明らかになる物語構成に工夫があり、語り手が少女一家を劇的に救う結末は鮮やかな展開でした。本作について、農委員からは「自己を分かり合える他者と巡り合うことの喜びが表現されている」という講評があり、田尻委員からも「現代社会を的確に反映しており」「細部や登場人物の個性も丁寧に描いて」という評価、また畑委員からも「河童」というファンタジー、「疾走感」「希望」が評価できる小説というコメントがあるなど、複数の選考委員が一致して上位作品として推奨し、今年度の学長賞の受賞作として選出されました。

続いて附属図書館長賞の「Lへの憧憬」は、大学生「僕」の語りを軸として現代のAIやメタバースを扱った物語です。物語世界の設定が現代的で興味深く、仮想空間内でのコミュニケーションの描写にもリアリティが豊かでした。物語内で現在と過去を往還する語りの構成も秀逸で、語り手をめぐる設定の最終的な逆転の新鮮さもありませんでした。本作について、農委員からは「テーマが今日的でインパクトがある」というコメントがあり、田尻委員からも時空を移動する語りの工夫への評価があり、畑委員からも「意外な筋の展開」「総体的に完成度が高い」とのコメントがあるなど、物語設定の現代性と作品構成が審査の際にも高く評価され、受賞作となりました。

同じく附属図書館長賞の「まこと海」は、一人称「私」の視点から妻との出会いからその死

後までを描く物語です。死を間近にした妻と過ごす時間を主要な物語の現在として、子供時代以来の妻との様々なエピソードを追憶する語りが印象的であり、作中で巧みに音楽と海のイメージが反復されるなど、表現にも工夫が凝らされていました。本作には、農委員から「音」の描写や文章表現に力があるという評価があり、田尻委員からも「それぞれの登場人物がよく描けており、細部も細やかに描写」しているというコメント、畑委員からも情景や心理について高い描写力があるとのコメントがあるなど、その優れた描写が高く評価されて、入賞作に選ばれました。

もう一つの附属図書館長賞の「妄執…いつも、どこまで」は、ある「男」とレンタカーで旅に出た一人称の「俺」によって語られる物語です。超現実的な物語設定ながらも、ロードムービーを見るような不思議な魅力がありました。語り手による映画やスポーツについての思索や男との間の多様な話題は、ユーモアと同時に批評性を含んで作者の鋭敏な感性を感じさせました。農委員からは若者の世界に対する焦燥への言及があり、田尻委員からは「構成力、筆力ともに安定感がある」「読みながら映像が浮かぶ」という講評、また畑委員から「The ロードムービー小説」「非常にさわやかさを感じた」というコメントがあるなど、同じく受賞作となりました。

他にも、今回受賞に至らなかった作品も、第一次選考を経た作品は、それぞれ受賞作に迫る魅力を持っていました。介護士として働く女性「私」が経験した不思議な出来事を描く物語「涼風の子どもたち」、文化祭で困難を乗り越えて演劇を上演する高校生たちの姿を描く作品「少女は微笑んだ」、大学生「僕」と少年のそれぞれの語りによって構成される作品「大人」、ダイエックに取り組む大学生の日常と過去の回想を組み合わせた物語「走れマルス」、姉の結婚の知らせ

に対して大学生の男性が抱く心情を描いた作品「六月の晴れの日」など、今回は残念ながら受賞には至りませんでした。それぞれが優れた表現力や構成力を示しており、印象に残りました。

今年度の応募作品も、第一次選考を通過した作品の中に、物語中に死や幽霊が描かれる作品が複数あり、いじめも含む他者との不和や葛藤、孤独や閉塞した状況を描き出す作品が目立ちました。それらの応募作品の傾向は、一面では持続する新型コロナウイルス感染症流行の影響や同時代の戦争の影を反映するものかもしれません。しかし同時に各応募作品は共通して、先に触れたハーンの語る様々な「困難」を認識した上で乗り越えようとする意志を明確に示していました。

ハーンは、周知の通り、熊本大学の前身である旧制第五高等学校（五高）ゆかりの人物です。私は、五高・熊大の表現活動の文化を現在に継承する企画が、この東光原文学賞であると考えています。そして、そのような五高・熊大の文化的土壌には、ハーンのように「書くこと」を通じて自分自身や時代、世界を深く凝視して認識し、その上で意志的に生きることを目指す姿勢があると考えます。今回の東光原文学賞を受賞された皆さんを含めた本学の学生の皆さんが、そのような「書くこと」をめぐる試みを、今後も様々な場で開始し、継続されることを願っています。

あらためて、今回受賞された皆さん、また受賞に至らなかった皆さんも含めて、今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。そして最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただきました田中朋弘附属図書館長をはじめとする本学附属図書館の皆様方、ご多忙の中、選考委員をおつとめいただいた農孝生先生、田尻久子先生、畑亜矢子先生、そして新たな東光原文学賞の実施に篤いご支援をいただいた本学の小川久雄学長、大

谷順理事・副学長、宇佐川毅理事・副学長ほか、ご関係の皆様方に深く御礼を申し上げます。

●坂元昌樹（さかもと・まさき）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）教授。専門は日本近代文学。

主な近著として『〈文学史〉の哲学 日本浪漫派の思想と方法』（翰林書房、二〇一九年）、『夏目漱石の見た中国 『滿韓とところどころ』を読む』（集広舎、二〇一九年、共編著）、『明治期日本の生と死をめぐる言説』（荻野藏平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐるディスコース』九州大学出版会、二〇二〇年）などがある。

講評・創作する力

選考委員 畑 亜弥子

今回熊本大学の文学賞の選考にはじめて携わりました。普段教室その他キャンパスのどこかでおそらくすれちがっている学生が創作した小説を読み、物語が立ち上がる瞬間を体験しているような気がしました。私自身は文学創作を行いません。そのためか、どの作品を読んでも、まさに今行われているクリエイションというものを生々しく感じました。

作家小川洋子は『物語の役割』において、物語は「普通の意味では存在し得ないもの、人と人、人と物、場所と場所、時間と時間等々の間に隠れて、普段はあいまいに見過ごされているものを表出させる器」と述べています。このような「器」を創りあげるのは、決して簡単なことではありません。おそらく初めはおぼろげなイメージとイメージ、アイデアとイメージあるいはアイデアとアイデアをつなげていき、それを的確に表現できる言葉を探し、読者の関心が持続するようにも配慮し、一つの世界をつくりあげることとはなんと骨の折れる作業でしょう。物語を書き切り投稿してくださった学生皆に、賞賛の念を禁じえません。

創作をしたことがない人間が、高みからジャッジをするようなことはできれば避けたいと思い

ます。ここでは、長年日々フランス語という外国語と向き合い文学研究を続けてきた一人の先輩として、作品を批評できれば幸いです。投稿作品の著者は若い書き手たちなので、自分自身との対話あるいは自分自身との決別が一つの大きな問題になります。したがって熊本大学の学生に起こりうるであろう自伝的な要素が、投稿作品に見受けられるのも当然のことといえましょう。このような東光原文学賞の性質を踏まえて評価のポイントとしたのは、自伝的（と思われる）要素が一般的に受けいれられるものか否か、そして差しだされた虚構空間の現実性の精度です。もちろんストーリー展開の面白さ、文章表現力、全体的な構成員も大切です。私個人としてはこのように思います。

学長賞となった『紡がれし者たち』は河童の物語です。田舎ならではの閉鎖的な空間、方言、自然災害に地域性がみられます。小説の冒頭は「いじめ」がテーマで、この小説は現代の（あるいは普遍的な？）社会問題を取り上げているのかと思わされます。何とも言いようのない閉塞的状况がよく表現できています。しかしゆりの登場により河童の物語への接続があきらかになっ ていきます。おばあちゃんとゆりと宮野の方言での長い会話のやりとりがコミカルで、小説全体に明るさを与えています。また水と水の間をワープ移動できる河童という発想がおもしろく、制約はあるものの、自在に水と水の間を移動し災害救助も行ってしまふ河童の物語に、心地よい疾走感と爽快さを感じました。地域で起こったと思わされる災害が悲劇に終わらず、河童というファンタジーによって光に包まれるこの物語が、今回の投稿作品のなかでは秀逸さを放っていました。

次に附属図書館長賞の三篇の作品についてです。まず『Lへの憧憬』はAI小説です。チャットのやりとりに見られた若者言葉の軽やかさ、それとは裏腹ともいえるような生と死をめぐる会話内容の深さ、そしてこのようなコントラストがこの作品をただの手すさびではない小説にしています。また主人公のsonの複雑な状況設定を自然なものにするために、脇役の父親や周さんのキャラクターも作りこまれていることも印象的でした。つぎに『まことの海』は一組の男女に焦点をあてた物語です。幼馴染の時期から一度一方の転校による別離をへて、喜びの再会、次第に恋人になり夫婦へという物語展開は一般的ですが、情景や心理について高い描写力がみられました。また舞琴が病魔に襲われ、やがて二人に永遠の別離が訪れる後半に、作者の想像力のパワーを感じました。死を乗り越える感傷と美しさを丁寧に表現している点が評価できます。最後の『妄執…いつも、どこまでも』は若い男性二人のロードムービー風青春小説です。旅、車、シネマ、「信じられるもの」などについて、語り手は考えをめぐらし「男」との会話を続けます。ファンカーゴでのドライブ旅行は、夏休みの楽しい思い出の一つにとどまらず、疾走する思考の小説となっています。

今回魅力的な物語に出会うことができ、そのなかにここでは伝えられないすぐれた技巧もみられ、学生の創作する力に感心しました。今後この賞を通して、多くの学生たちの渾身の一作に出会えることを願っております。

● 畑 亜弥子（はた・あやこ）

熊本大学大学院人文社会科学部研究部（文学系）准教授。専門は二〇世紀フランス文学。主な近著として *Mahaux ou du Japon* (Classiques Garnier, 二〇一三年、共編著)、『アンドレ・マルローと現代—ポスト・ヒューマニズム時代における〈希望〉の再生』(上智大学出版、二〇二一年、共編著)、『フランス文学のたのしみかた…ウエルギリウスからル・クレジオまで』(ミネルヴァ書房、二〇二〇年、共著)、論文「マルロー『ゴヤ論—サチュルヌ』について—スペイン趣味の系譜における位置づけの試み—」(『文学部論叢』一〇七号、二〇二六年) などがある。

講評

選考委員 農 孝生

小説とは何だろう。人はなぜ小説を書くのだろう。

「ぼくは、小説のかたちにすることで人を理解し、人を思考するために書いている。ぼくは平凡な人間なので、執筆によって自分がそれまで理解できなかったことが少しでも理解でき、それまで感じるできなかった人のあり方や気持ちが少ないでも感じられるようになればと思う。言い換えれば、ぼくは、この世界をはっきり見通すことができなから、自分の心に不安と無知があるから、小説を書いている」(呉明益『自転車泥棒』)

「人間の本质は悪であり、その悪を書くのが文学である」(車谷長吉『銭金について』)

『『何かのメッセージがあつてそれを小説に書く』という方もおられるかもしれないけれど、少なくとも僕の場合はそうではない。僕はむしろ、自分の中にどのようなメッセージがあるのかを探し出すために小説を書いているような気がします』(村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』)

「世界が混乱し、分断されても、物語は永遠に『善に向かう力』であり続けると思います。ど

の世代においても、同時代の世界に語りかける作家の存在が非常に重要になるでしょう。私たちが住む世界では分断が加速していますが、私は物語を書き、それを共有することで、この流れに抗えると信じたのです」（カズオ・イシグロ『COURRIER JAPON』）

作家たちの小説観をちょっと拾っただけでも、これだけのバリエーションがある。

東光原文学賞の選考に携わったのは初めてだったが、第一次審査を通過した候補作九編を読ませてもらって、小説という形式の器の広さと限らない可能性を改めて感じた。

学長賞の『紡がれし者たち』は、かっぱ伝説を下敷きにした作品。クラスで無視されている「僕」が登場し、最初どんよりした息苦しさを感じさせるが、僕の中におかまいなしに侵入してくるヒロインの明るさがそれを救っていく。水を媒介として人や物事がつながっていき、ストーリーが展開される。かっぱの能力を人知れず受け継いだことで、実は孤独だったヒロインが「ずっと一人ぼっちだったから」と涙を流す最後の場面が印象的だ。物語によって「真実」を表現することに近づいている。学長賞にふさわしい物語の「面白さ」を備えた作品だった。

附属図書館長賞三作のうち、『Lへの憧憬』は、希望よりもむしろ、人が永遠に生きながらえることの恐ろしさや悲しみのようなものを感じさせ、読み手の感情を揺さぶった。肉体的な死の後も、メタバースの世界で生きようとする若い男女。デジタル上の静かな会話と地の文で進むストーリーには、きわめて今日的なインパクトがあった。

『まことの海』は、夫婦の愛とその陰り、妻の死と愛の再生を、細やかな心理描写でたどった。よどみないストーリー展開で、妻の死後に残された者たちが前を向っていく結末にも好感が持て

た。音楽教師の妻が奏でるピアノの「音」の描写の繊細さが光った。

『妄執・いつも、どこまで』は、陳腐な言い方だが「若者の焦燥」を感じさせた。男二人が会話しながら車で旅をする。作中「頭の中がぐるぐると回る」とあるように、実はその会話は一人の人物の自己内対話かもしれない。若者は、世界を変えようとするように旅に出るが、世界は結局何も変わらない。「俺は暗闇の中にただ立っている」というセリフが印象的で、文中に名前が出てくるジム・ジャームッシュの映画を見たような読後感だった。

このほか選にはもれたが『涼風の子どもたち』『少女は微笑んだ』『大人』『六月の晴れの日』『走れマルス』にも、それぞれのスタイルと持ち味があった。

選考委員の中でも、作品の受けとめ方や感じ方、評価に違いがあり、小説というものの懐の深さと面白さを再認識させられた。

熊本大の学生の中から、今回もこれだけの応募があったことは、地域の文化のためにも非常に頼もしい。小説を書き、読むことが、きっとみなさんの人生を豊かにしてくれると思う。

●農 孝生（のう・こうせい）

熊本日日新聞論説副委員長。社説、コラム「新生面」「黙鼓子」などを担当。

新聞連載記事に「公共事業と山村」（一九九七年）、「再考 水俣病の医学」（二〇〇一年）、「否—ある水俣病闘争」（二〇〇四年）、「命ある場所」（二〇〇二—〇四年）など。

講評

選考委員 田尻 久子

仮にひとつの作品が百人に読まれれば、百通りの物語になるのだと思っっている。書いたあととは、読者に委ねるしかない。文学賞の審査員が言うべきことではないかもしれないが、作品の優劣というのは個人的な見解でしかない。実際、今回の選考会でも、すべての作品が最初から全員一致で選ばれたわけではないのだから。

私は小さな本屋を営んでいるのだが、どうやって選書しているのかと、ときおり聞かれる。本を売るといふ仕事は「選ぶ」行為からはじまっている。『アルテリ』という文芸誌も発行しているのだが、掲載する作品を誰に依頼するか「選ぶ」行為から編集作業ははじまる。どちらも、個人的見解でしかない。「選ぶ」といふ行為を、お客さんや読者に信頼してもらおうしかない。私の選考基準は何かと言えば、読み手の心に少しでも触れられるかどうかという点にある。読者全員ではない。一人でもいいから、「誰か」の心に確実に届くだろうか、と考えている。もちろん文章はうまいに越したことはないし、物語の完成度や手法も重要であろう。土台がなければ何も築けない。しかし、上手く書くことが最重要では決してない。人の心を動かすには切実さが必要だ。

今回、はじめて選考委員のご依頼をいただいた。お受けするのは正直荷が重かったが、若い方々の思考に触れること自体は楽しみであった。惜しくも受賞に至らなかった方々も含め、まずは書き手のみなさんに感謝を申し上げたい。

学長賞の『紡がれし者たち』は、いじめを受けている少年と、河童の血を引く少女という、属している社会からはみ出した者同士の疎外感と連帯を描く。全体をつなぐ「水」の存在が物語を美しくまとめていた。伝説の生き物が実在するという非現実的な設定でありながらも説得力があるのは、登場人物の心情が丁寧に表現されているからだろう。現代社会の問題もさりげなく挿入されており、閉鎖的な地域社会での大人のずるさと、少女の祖母の誠実さとの対比も物語に深みを与えている。祖母の誠実さは生活様式にも現れており、食卓などの細かい描写や方言の効果等も評価したい。

附属図書館長賞の『Lへの憧憬』は、AIと人との共存、肉体喪失後のメタバース世界での再生をテーマにしている。時空を移動する語りは工夫されているが、登場人物の苦悩や不安がやや画一的である気がした。主人公とヒロインという女性の、スマホを通じてのみ構築される関係が、現実社会を生きる若者たちのメタファーだと考えると面白みが増す。二人の関係は恋愛へと発展していくが、そこにとどまらず、死生観までたどり着けばもっと読み応えがあったのではないだろうか。

附属図書館長賞の『まことの海』は、全体的に完成度が高い作品。ホスピスに入院中の妻との時間を、主人公が過去に遡りながら一人称で語っていく。「まこと」という名前についてのエピソード

ソードがよく描けており、音楽の描写とともに、物語全体にその響きが通底している。「愛する人の死」というのはありがちなテーマであるだけに難しいと思うのだが、細部の描写が丁寧で、登場人物もそれぞれによく描けており心に響いた。「喪失感」を闇にひそませるのではなく、光へと放つラストが物語にコントラストを与えている。

附属図書館長賞の『妄執…いつも、どこまで』は、旅に出ようとする「男」と出会った「俺」がレンタカーで旅に出る物語。描写が視覚的でロードムービーの趣があり、構成員・筆力ともに安定感があった。著者の意図とあっているかどうかはわからないが、私は自己との対話として読んだ。「『普通』ではいたいが、『凡俗』ではいたくない」という言葉は、現代の若者の心情を象徴しているように感じる。読みながら映像が浮かぶが想像力は限定されず、物語に併走しながらも思考する余地があった。読者を信頼し、委ねることができるという点を評価したい。

真実というのは細部に宿るのではないだろうか。どれも似たり寄ったりに見える河原の石の中に特別だと感じる石を見つけないだろうか。どれも似たり寄ったりに見える河原の石の中を探している。細部を見るには、俯瞰するより、対象と視点をあわせる必要がある。もちろん、俯瞰の視点も必要だけど。ここに掲載されている物語の作者たちは、これから書き続ける人もいれば、そうでない人もいるだろう。どちらであっても、世界の細部を見続けてほしいと願う。

● 田尻久子（たじり・ひさこ）

橙書店店主。文芸誌『アルテリ』責任編集者。

二〇一七年第三十九回サントリ―地域文化賞受賞。

著書・共著に『猫はしっぽでしゃべる』（ナナロク社）『みぎわに立って』（里山社）

『橙書店にて』（二〇二〇年、熊日出版文化賞／晶文社）、

『橙が突るまで』（川内倫子との共著、スイッチ・パブリッシング）などがある。

第十五回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二三年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

